





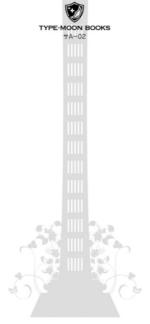




ロード・エルメロイⅡ世の事件簿



「case.双貌塔イゼルマ(上)」



Lord El-Melloi

II

Case Files

ロード・ エルメロイ II 世の 事件簿

・2+ 「case.双貌塔イゼルマ(上)」

目次 Contents

『序章』 005

『第一章』 017

『第二章』 069

『第三章』 149

『第四章』 221

『あとがき』 282

ロード・エルメロイII世の

事件簿

2 「case.双貌塔イゼルマ(上)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時 に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次 Contents

序章

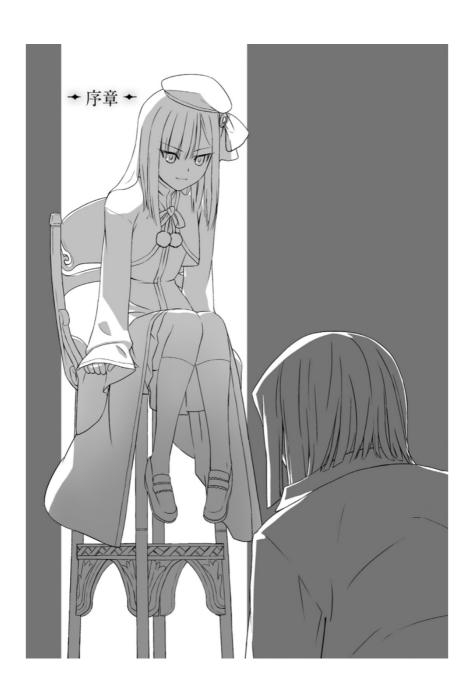
第一章

第二章

第三章

第四章

あとがき



― 率直に言って、私の性格は悪い。

他人が苦しんでいると唇がほころんでしまうし、それが真面目な 人間ならなおさらだ。光溢あふれる道を歩いていくはずの人間が、 くだらないことで鬱屈して道を踏み外していくところなど、ぞくぞ くと快感を覚えてしまう。

これが、家庭環境やトラウマによるものなら、まだ言い訳も立つ だろう。

残念ながら生まれつきのものだった。いや、生まれつきなのだから両親や先祖の遺伝だとは言えるだろうし──実際こちらは性格が悪かったのだが、あまり同情してもらえる気はしない。だいたい魔術師の家系なんて性格が悪いのが当たり前デフォルトだ。とりわけ時計塔にも名だたるエルメロイ派は、本家だったアーチボルトを筆頭として常に権謀術数と足の引っ張り合いを繰り返す、ろくでもない輩やからの集まりだった。

だから。

その日のことは、とりわけ深く記憶に刻まれている。

「……うん。あれは愉快だった」

回想しながら、私は微笑する。

もともと、極東での大儀式で生き残った『彼』のことは以前から 注目していた。

儀式参加者で最も未熟とされていた『彼』が無事に生還してくるなど、時計塔の誰も夢想だにしていなかったのだが、帰ってきてしまえばただ放置するしかなかった。

いや、その逆に想定外の死者となった君主ロード──つまりロード・エルメロイの利権を巡る争いが生まれ、それどころではなくなってしまったのだ。古来受け継がれてきた十二の名門のひとつは膨大な財産と人材、霊地と魔術礼装を蓄えていたのだが、まさしく餓うえた鳥についばまれるように、ことごとくを奪われてしまった。

ライバルだけでなく、身内からも略奪者が出たのが大きかったろう。アーチボルト家がいままで押さえつけていた分家筋は、エルメロイの資産、財産は自分たちのものでもあると主張し、配当と称してその大部分を分解したあげく、ほかの君主ロードたちに迎合して背を向けたのである。結果として、本家に残されたものは『エルメロイ』という家名と、天文学的な負債だけとなった。

しかし、一体何を思ったのか。

そんな中、帰ってきた『彼』は、見捨てられたエルメロイ教室を 受け継ぐと放言したのである。

時計塔の授業は、ついてこられる者だけついてくればいい、という性質だ。

魔術とは家系と才能によってほぼすべてが決定される。ならば真面目に授業を行う必要なんてない。適当に餌になりそうな情報をばらまきつつ、これはと見込みのあるヤツだけ自分の助手に引き込んでしまおうというのが、時計塔の講師の常であった。

だからこそ、見捨てられたエルメロイ教室自体にはほとんどの者が価値を見いださなかったのが、『彼』の場合は幸いした。

ひとまず三級講師となった『彼』は、めきめき頭角をあらわしたのである。

最初こそ正式な学部も決まっておらず、ほそぼそと少人数の講義を行っているだけだったのだが、その異様に分かりやすく実践的な授業は、時計塔で居場所のなかった新世代ニューエイジたちの間で、たちまち話題となって広まっていった。あげく権力争いに敗れた講師たちを何人も説得して登壇させ、これまでになかった多角的な教育体制さえ実現させたのだ。

(......)

今思えば、それも意図した現象ではなかっただろう。

血統にも才能にもたいして恵まれなかった『彼』の場合、むしろ 雑で分かりにくい授業の方が困難だっただけのこと。なんとか必須 単位を修めて三級講師とはなったものの、根本的に能力が足りない のだから、他人の手を借りるしかなかったという話。 うん、胃痛に耐える若かりし『彼』の姿が、ひどく簡単に思い浮かぶ。眉間に走る深い皺しわが生まれたのはこのときだろう。おそらく一生深くなる一方だろうから、今の内に計測しておきたいものだ。

なんにせよ、『彼』はエルメロイ教室を三年に亘わたって存続させた。

ある種の奇跡といってもよい。

確かに、ほかの利権と比べれば大したものではないが、教室には 霊地の管理権も付属する。ろくな後ろ盾もない『彼』の場合、 ちょっと失点や弱みを見せるだけでたちまち奪われていたはずだ。 まさか三年も耐え抜くなど、時計塔の講師たちは妖精にでも騙だま された思いだったろう。

だいたい、それぐらいの頃だ。

つい面白くなってしまった私は、直接『彼』を呼びつけたのだ。

.....おっと。

これは、一応訂正しておこう。

呼び出したと言ったが、実際は拉致の方が正しい。当時ほんのわずかに残されたエルメロイ派の権力は、さまざまな偶然とちょっとした諍いさかいのあげく、私のところに集中していた。その権力をもって、いろいろ強引に引っ張ってきてもらったのである。

そして、私室で這はい蹲つくばった『彼』に話しかけたのだ。

「──帰国してからの君の活躍は知っている。日夜、胸躍らせながら 拝見させてもらっていた。実は私は、君の隠れファンというやつで ね」

おそらく、死でも覚悟していたんではなかろうか。

私の立場からすれば、『彼』もまたエルメロイ派の利権を奪った

盗賊にすぎない。名門中の名門だったエルメロイ教室の名を貶おとしめて、新世代ニューエイジを中心に低俗な現代魔術を講義しているなど、聞く者が聞けば死でも償い切れぬ大罪である。

だが。

『彼』は最初こそ戸惑っていたものの、私の名前を聞くや稲妻に打たれたみたいに立ちすくみ、申し訳なさそうに頭こうべを垂れたのだ。まさかこんな反応を起こすとは思っていなかったので、さしもの私も呆あっ気けにとられてしまった。

しかも、

「……ロード・エルメロイの件は、ボクにも、責任がある」

などと言い出したときは、失礼ながら大笑してしまいそうになったものだ。

「へえ。どうして? 一体どんな責任かな?」

意地悪い問いかけだったと、自分でも思う。

なおかつ、今思い出してもにやけてしまうのだから救われない。

視線を落とした彼が唇を嚙かんで肩を震わせていた光景は、なぜ記録していなかったのかと悔やまれるほどだ。もちろん魔術回路を使えばちょっとした記録や再現は脳内でできるのだが、他人と共有する楽しみというのも世界にはある。──まあ、残念ながら、共有すべき友達はいないのだけど。

「あなたの義兄であるロード・エルメロイを──ボクの師でもあるケイネス・エルメロイ・アーチボルトを死に追いやったのは、ボクの 愚かな暴走によるものだからだ」

「うんうん。君が敵対しなければ、我が義兄と婚約者ももう少し長生きできたかもねえ」

大おお嘘うそだ。

都合がよいから相づちを打っているだけで、私はちっとも賛同していない。

なるほど、この男はかの第四次聖杯戦争において、義兄ケイネス の最初のつまずきとなった。かの大儀式において、我が義兄から貴重な聖遺物を盗み出し、聖杯戦争の参加者として騎うのイ英ダ霊ーとともに義兄と対立したという。

(.....でも、それだけだ)

とも、当時の私は考える。

調書を見る限り、どうやってもあの義兄は死ぬのだ。

義兄は極めて強大な魔術師であったが、戦闘の専門家というわけではない。

対して、儀式に集められた参加者のうち、何人かはどうしようもないほどの殺し屋だった。結果として言えば、『彼』がやったことは川の流れに石を投げ込んだ程度のもので、なるほどいささか大きな石であったかもしれないが流れを変えてしまうようなものではない―というのが、私の結論だった。

早々に悟って逃げ帰っていれば命を長らえられたかもしれないが、あの性格ではそうはいくまい。つまるところ参加してしまった段階で我が義兄は詰んでおり、まあ死ぬべくして死んだのだ。さすがに君主ロードでは珍しいとしても、魔術師ならしばしば起こり得る程度の悲劇だろう。

だけど、呻うめくようにして、『彼』は口を開いた。

「ボクの罪は認める。……だから、命だけは勘弁してほしい」

「おや、そこは気がすまないなら殺してくれてもいいとか言うところじゃ。確か、君が儀式を行ってきた極東はハラキリとか得意な土地柄なんだろう? ここで命乞いはちょっとばかり情けなくないかい?」

「やるべきことがあるからだ」

あまりにきっぱりというものだから、また啞あ然ぜんとしてしまった。

一体、どんな教育を受ければ、こんな風に育つのだ。時計塔を出 奔する前の『彼』はとにかく偏屈で、自分の未熟さも省みないろく でなしだったと聞いているが、ほとんど別人にしか思えない。

こほん、と咳せき払いした。

「……ではせっかくだし、私からいくつか要求してみようか」

と、肝心なところを口にしてみる。

屋内に『彼』が唾を飲み込む音が響き、うっとりと微ほほ笑えみながら私は言葉を続けた。

「今、エルメロイ派の借金は大変なことになっていてね。私が次代 当主に選ばれた段階で、アーチゾルテ家が負担することになったん だが、これがちょっと利息を払うのも難しい。責任をとるというな ら、まずはこの借金からどうにかしてほしい」

この段階で、不可能だ。

個人の魔術師がどうにかするには、失われた資産は大きすぎる。 仮にも時計塔を支えてきた十二の名家である。現代の額に換算すれ ば、それこそハリウッドの映画ぐらいはつくれるだろう。

「……分かった。可能な限り対処する」

どんなお人ひと好よしだ。

全力でツッコミかけた私の気持ちを、どうか分かってほしい。

いや、多分お人好しというよりも、これは覚悟をすませているというべきだろうか。今にも泣き出しそうに唇をへの字にしたままこちらを見つめてくる『彼』の顔は、ついつい踏みつけてしまいたくなるいじらしさだった。

ぞくぞくとこみあがる衝動をこらえつつ、続く要求を口にする。

「協会で、義兄の魔術刻印──エルメロイの源流刻印を回収したんだけどね。残念ながら回収できたのは一割程度だった。お抱えの調律師では修復までに最低三世代以上はかかってしまう。これも君の責任でなんとかできないかな」

「……受けよう」

思わず、こいつ頭が沸いているんじゃないかと私は疑ってしまった。

実は第四次聖杯戦争というのは、脳のう味み噌そに蛆うじか蟲む しでも埋め込む儀式だったんじゃないか。それは我が義兄には耐え られまい。

「では、一番大事なところにいこう。残ったエルメロイ派はなんとか君主ロードの地位だけは守り抜くと懸命でね。さきほど説明したように、派閥の意見が一致している候補は私なんだがなにぶん若すぎるだろう? どうか私が適齢期になるまで、エルメロイの君主ロードの席を維持してもらえないかな」

「......それは......かまわないが、具体的にはどうすれば?」

「分かりやすく言うと、私が成人するまで誰かに君主ロードの仕事 をしてもらう、ということだよ」

ここで、初めて『彼』は目を見張った。

ほかの要求は覚悟していたが、ここで初めて想定を超えたということだろう。喉の奥から低い唸うなりが発せられるのが、初めて蛙かえるの足をもいだときのようにたまらなかった。

「待ってくれ。それはつまり―」

「そういうことだ。ほかの君主ロードどもとの折衝は心底つまらないと思うが、頼んだぞロード・エルメロイII世。それともこう呼ぼうか? 親愛なるお兄様、と」

くら、と『彼』が目め眩まいを起こして倒れかかる。

かろうじてとどまりはしたが、ほとんど気絶しかかっていた。

「そうだ。四つ目の要求も加えておこう。私の家庭教師になること。うん、血の繋つながらない兄に指導を受けるというのは倒錯していて実にいい」

笑って、とどめをさしてやる。

この後、逃げられないように『彼』からちょっとした担保を預かったりもしたのだけど、また別の話ということでいいだろう。

私と『彼』のなれそめは以上だ。

なかなか素敵で、心温まるエピソードだと認めてもらえるだろうか。

......ああ、ひとつだけ言い忘れていた。

私の名前は、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。

『彼』──ウェイバー・ベルベットという名前だった未熟な魔術師を、ロード・エルメロイII世に封じた女である。



馬車の呼び鈴で、眠気を覚まされた。

瞼を擦りつつ、御者に礼を伝えてから、トリムマウと一緒にステップを下りる。

我がイギリスではいまだ馬車文化がしぶとく生き残っているが、 さすがに四頭立ての箱馬車となれば、王室のそれでもない限り見る 頻度はぐっと下がる。わざわざ寄よ越こしてくれたトランベリオ派 の意図は明確で、うちとお前の差は分かってるだろうなと、暗黙に 脅しをかけているのであった。

ともあれ自分の街に戻って、いつもの目薬をさしてから、私は大きく伸びをした。

現ノ代-魔リ術ッ科ジの街―スラーは、どこかツギハギめいた通りだ。

西側にはそれなりの歴史を経た街並みが広がっているのだが、倫口ン敦ドンとほど近い東側にはやたらと近代的な建物が顔を覗のぞかせる。統一感がないというよりも、大手術を行った後、包帯で傷口を覆い隠しているような風景だった。

「……まあ、つまるところ、金がないんだがな」

と、私は述懐する。

魔術協会・現代魔術科がこのあたりの通りを買い上げたとき、周囲を建て直さなくてよいのかとは、確かに打診された。というのも、周辺環境は大いに魔術と関係するからであって、かなうならば古式の建築物で統一するのが望ましい―のだが、いかんせん現代魔術科には金がなかった。

そも、このあたりの土地を買い上げる以前から借金まみれなの だ。 世界のすべてとは言わないが、七割ぐらいは予算によって決定される。これは魔術の世界においてすら変わらない。 哀かなしいかな、そもそも世界の価値を数字に換算しうるという金銭の概念が神秘的なのだから仕方あるまい。 常にインフレーションし続ける地球上の資産はそれ自体が集合的無意識のつくりだす幻想だ。

実際、金銭にまつわる魔術は洋の東西を問わず一定の需要があるそうなのだが、我が兄のような理屈はこのへんでやめておこう。

「さてさて。まずは─と」

呟つぶやきつつ、歩き出す。

蔦つたの絡まる煉れん瓦がの塀を曲がって、坂道から十字路を直進。

遅からず、目的の建築物が見えてくる。

時計塔十二科中、本部としては最も小さな学術棟であった。

周囲には、とある大学の付属施設という名目になっていた。ちなみに第一科―全体基礎ミスティールの学術棟は大学そのものを偽装しているのだが、さすがに我が現代魔術科の規模ではその言い訳は難しい。

玄関ホールに足を踏み入れると、ひんやりした空気が私を出迎えた。

せめてここだけは、とノーリッジ卿きょうからの融資を重点的にかけた玄関ホールだけに、それなりの落ち着きと品位を保っている。

Г......

わずか十秒で、その品位は破られた。

ヒャッホーというかけ声とともに、ホールの螺ら旋せん階段の手すりを、とある人影が滑り下りてきたのである。短い金髪に青色の瞳。あまりにも楽しそうな笑顔であったが、ちょうど同じ螺旋階段へ足をかけようとしていた私を見て、その表情が反転した。

「わ、わわわ! ライネスちゃん!」

急制動も虚むなしく、ずるっと尻から滑って少年が加速する。

ジェットコースターかという勢いで滑落する金髪の少年が、涙目で訴えた。

「ご、ごめ、ごめんなさいいいい!」

「.....トリム」

呟いた私の後ろからすうと、水銀色の─いや水銀そのもののメイドが歩みでたのだ。

正式な名を、トリムマウ。かつてアーチボルト家が所持していた魔術礼装ヴォールメン・月霊髄液ハイドラグラムに、私が擬似的な人格付与と機能限定を施したものだ。つまるところは、自律性のゴーレムに極めて近しい存在である。現在は私のボディガードと日頃の召使いを兼ねた存在となっており—

彼女が振り上げた手が、さきほどの金髪少年を軽々と受け止めていた。

「ご無事ですか、ごマ主ス人タ様ー」

「うん、まったく問題ない。ありがとう」

トリムマウの問いかけに、私は小さくうなずいた。

ただ、ぽすんと当たったときの衝撃がやたらに軽かったのと、直前に少年が「浮フいロてウ!」だとか一小節ワンカウントの詠唱を口にしていたのも認識していた。

おそらくは慣性制御の魔術か何かだろう。一小節ワンカウントで起動したあたりは何かの護符アミュレットも併用しているのだろうが、よくもまあ落下しながら使えるものだと感心する。元来魔術には極度の集中を必要とするわけで、よほど高位の魔術師であっても、同じことができるかというと首を横に振るだろう。『天才馬鹿』とも『天恵の忌み子』とも呼ばれる少年の瞳を見つめ、私は唇をほころばせた。

「で、何か言い訳があるかな?」

「いや、だって、そこに螺旋階段があるなら滑らなきゃ失礼じゃな

いですか! こんなにも綺き麗れいに磨かれた手すりが俺のことを 待ってるんだから、それはもうふらふらっといくのがマナーで す!」

「……その言い訳も、これで三十七度目だぞ。フラット」

最後は、私ではない。

螺旋階段の上から、咎とがめる声がかかったのだ。

さきほど、フラットと呼ばれた少年が滑り降りた手すりに頰を寄せていたのは、目の醒さめるような美形だった。

すん……と手すりのそばで鼻を鳴らす。

「相変わらずの、無闇にペかペか光ってとらえどころのない匂い だ。真っ先に教室を出て行ったと思えば、またこれか」

年齢はフラットと呼ばれた少年と同じく、十五歳ぐらい。

ふんわりとカールした金髪は、昼下がりの陽光を受けて飴あめ細工のごとく見えた。物憂げに伏せられた瞳の色は翠みどりと群青の間を揺らめいている。ほっそりとした指先から鎖骨までのバランス。そして、ギリシャの石像ならばかくあらんと想起してしまう、ほとんど奇跡的なまでの五体の造形。

その美少年が、刺とげ々とげしい語り口で話しかけてきたのだ。

「エルメロイ先生に何度怒られて、宿題を三倍増しにされた?」



「え? だって、宿題増やすのは先生なりの励ましでしょう! ル・シアンくんだって、先生にレポート増やされたら嬉うれしそう にしてるでしょ!」

「人をル・シアン犬とか言うな! スヴィンだ! スヴィン・グラシュエート! 何年経たったら、そのすかすかの頭に入る!!

眦まなじりを吊つり上げ、びしいと人差し指をつきつける。

その人差し指から、ぞくっとこちらの首筋を冷やす何かが照射された。

ガンドと呼ばれる北欧の魔術は指さしただけで人を病に陥れるというが、こちらは獣のごとき獰どう猛もうな殺意が凝集したものだ。濃縮された殺意はそれ自体が呪のろいに等しい。これはたとえば、東洋で使われる蠱こ毒どくなどの事例を考えれば分かるだろう。

ああ、念のために付け加えると、これは魔術じゃない。

彼にとっての生態だ。

「だって、ル・シアンくんはル・シアンくんだよ! プロフェッサー・カリスマとかマスター・Vとかグレートビッグベン☆ロンドンスターとかマギカ・ディスクロージャーとかと一緒で!」

もっとも、直撃しているはずのフラットは吞のん気きに気づいて もいない。生まれもっての強きょう靭じんな魔術回路が半端な呪い を弾はじき返してしまうのだ。

「……全部エルメロイ先生だろうそれ! しかも、グレートビッグ ベン☆ロンドンスターはお前がつけた名前だ!」

「プロフェッサー・カリスマは、ル・シアンくんだよ!」

フラットの抗弁に、む、と少年─スヴィンが呻く。

まあ、私までル・シアンに乗っかるより、ここはスヴィンと呼んだ方がいいだろう。ややこしくなるし。

はっ、とフラットが息を止めた。

「ひょっとして、ル・シアンくんの育った環境には、『ニックネーム』っていう概念が.....ない.....?」

「そんなわけあるか!」

怒鳴り声は、魔力のこもった咆ほう哮こうとして階下を叩たた く。

半ば物理的な威力さえ持った一喝の直前、やれやれと私もトリムマウの手を取っていた。

「一調えよadjust」

ふっ、と息を吹きかける。

つまるところは、水銀であるトリムマウの身体からだを、霧状にして吹き広げたのだ。薄い灰色のヴェールがスヴィンの咆哮を受け止め、分子レベルで乱反射させながら、無害なところまで呪いを散らす。

そこで、ようやっとスヴィンも私のことに気づいたらしかった。

「……あ、と、ライネス様」

綺麗な目を大きく見開き、今にも自害しそうな申し訳なさたっぷりに、こちらへ頭を下げたのだ。

「失礼しました! 姫様にかような無礼を働くつもりは!」

「いやいや、面白い見せ物だったよ」

正直な感想を述べる。

こんな場面を見せつけられれば、なるほど魔術とは楽しそうなものだなどと、余人が錯覚に溺れてしまいそうだ。魔術については二流まるだしな我が兄がこんな風景を毎日見せられている苦悩を思うと、つい嬉しくなってしまう。

スヴィンとフラット。

彼らこそは、エルメロイ教室の双璧だった。いいや、時計塔全体を見渡しても、この年代でという条件付きならば、相当な上位に食い込むはずだ。

もっとも、そんな能力があったからこそ──とりわけフラットは時計塔の各教室をめぐりめぐって、兄のもとへ預けられることとなったのだが。

「ところで、我が兄とグレイはどこかな?」

「グレイたん.....いえ、グレイさんに用事が?」

一瞬、美少年の語尾によどみが生じたが、あえて無視しておく。

この少年がひたすらストーカーじみた行動の暁に、とある少女の数メートル内に入らないよう兄に厳命されてしょげていたとは想像しにくいだろう。

うむ、なかなか倒錯していてよい。

すん、と鼻を鳴らしてから、スヴィンは口を開いた。

「学術棟を出た匂いはないので、多分先生の私室だと思いますが」

「ありがとう」

礼を言って、フラットの額をつんと押す。

「ライネスちゃん」

「ちゃん付けは嫌じゃないが、君ももう少し落ち着きを覚えたま え。一応、現役では最古参なんだろう?」

「……お言葉ですが、ライネス様。フラットよりは僕の方が一ヶ月早いです」

不服そうなスヴィンに、思わず笑ってしまった。

「じゃあ、なおさらだ。君たち同期のようなものだろ。助け合いた まえ」

そう言って、螺旋階段をあがっていく。

ちょうど教室を出ていくのは、おおよそ新世代ニューエイジの生徒たちだ。ほかの十二科では滅多に受け容れられない生徒たちがこの教室でだけは大手を振っている。それが良いことかどうか、実のところ私には分からない。

ともあれ、彼らを横目に、私は大理石の床を歩いていく。

やがて、小さな声が耳に届いた。

鼻歌だった。

ひどくささやかな──遠慮深げな歌声。

奥まった部屋の扉を開くと、かすかに油の匂いが鼻をついた。

兄の私室は、手前と奥とで区切られており、入り口そばに靴棚が置いてある。もちろん構内は土足が普通なので、ここで靴を脱ぐわけではないのだが、義兄はそれなりのこだわりがあるのか、学術棟の私室にも何足かの靴や着替えを持ち込んでいる。その入り口に、ごく小さな丸椅子が置いてあって、ちょこんと灰色の妖精みたいなのが座っていた。

灰色のフードをかぶった少女が、小さな布で靴を擦っていたので ある。

汚れ落としのリムーバーと靴クリームの壜びんを隣に置き、それぞれ別の布を使って、楽しそうに全体を磨いている。少々指先が汚れるぐらいはおかまいなしで、革の入り組んだ部分まで入念に擦り続けていた。

「靴磨きとはまた」

「.....ライネスさん」

びくんとフードをかぶった肩を震わせて、少女がこちらを振り 返った。

正直、わりと苛いじめたくなるシチュエーションなのだが、不思議とこの少女の場合はそんな気が起こらなかった。本命が奥に控えているせいかもしれない。まず前菜オードブルで楽しむのも私なのだが、まあフラットとスヴィンで満足したのだろう。

どうやら磨き終わったらしい靴が三足仲良く並んでいるのを見て、口を開く。

「ずいぶん楽しそうに磨くものだな。靴磨きがそんなに楽しいとは 思わなかった。今度私にもやらせてくれたまえ」

「……拙の仕事ですから」

遠慮深げに、少女──グレイは汚れた布とクリームを押し隠す。

「取り上げようというんじゃないよ」

いじらしい仕草だったので、つい微笑がこぼれてしまった。

これも、私にしては珍しいことだった。おそらく、彼女が魔術に近しいとはいえ魔術師ではないせいだろう。利害関係のない相手ならば、鎧よろいを着込む必要もない。いや正直なところ、幼少期から着慣れた鎧と肌の区別は、自分でもあまりつけられてないのだが。

「単に、君が楽しそうだったから、一度共有してみたいと思っただけだ!

「……楽しそう、でしたか?」

少女の灰色の瞳が、不思議な言葉を聞いたみたいに揺れた。

まるで、この少女はモノクロの世界からやってきたようだと思う。肌も髪も瞳も衣服もすべてが白黒で切り分けられている。色なき世界の、冬の妖精のようだ。真っ白な雪に埋もれた景色の中で、彼女ひとりは哀しいまでの灰色グレイでありつづけるのだろう。

「さっきの歌は、故ふる郷さとのかな? なんだか遠い国の理想郷でも歌ってるようだったが」

「.....え、と」

自分が磨いた靴を見つめながら、少女はしばらく考えてから口を 開いた。

「......そうかも、しれません」

「歌ってたのに?」

「故郷で知った歌ですけれど、いわれも何も聞いたことがないんで……もともと故郷にまつわる歌なのかどうかも、拙せつには分からないんです」

「ははあ」

そういえば、彼女を拾ってきたときの話は、あまり兄から聞いていなかった。

まあ、だいたい過去の話は御法度というのが、魔術師の暗黙の了解でもある。懐を探られれば痛いところしかないのがお約束だ。

口ごもってしまって、少女はまた靴に視線を落とした。

けして迅速ではなかったが、ひとつずつ丁寧に磨く手を休めず、 ぽつりと口を開く。

「……ライネスさんは、故郷の思い出とかあるんですか?」

「ん、私かい」

ついその様子を興味深く眺めていたのだが、質問の内容に瞬まば たきしてしまう。

「そうだねえ。私の場合、なにしろエルメロイ派の端っことはいえ、アーチゾルテ家の正統ではあったからね。ありきたりな魔術師の話になるよ? ああ、時計塔の近くに住んでるせいで、ちょっとばかり生臭い陰謀が増えてしまうかな? まあ、この十年は綱渡りばかりが多かったよ。時計塔のあっちもこっちも、人のことを幼くて都合のいい駒としか思ってなかったのは、いや今考えてもなかなか愉快な光景だった」

もっとも、その大部分は私にエルメロイ派の権力が固定されたと き、相応の報いを与えてやったのだが。

すると、思いきったようにグレイが口を開いた。

「……それは、師匠がロード・エルメロイII世になった理由ですか?」

おや、と思った。

つい一、二ヶ月前の彼女ならば、尋ねそうになかった質問だからだ。

実際、そんな問いかけをしてしまった自分を恥じるように、少女 は灰色のフードを深くかぶって、ますます俯うつむいてしまってい た。

「気になるかな?」

「......そう、かもしれません」

困ったように、グレイは靴を磨くきりだった。

薄くクリームを擦りつけた靴を、今度はブラシで磨き出す。柔らかな馬毛が何度も何度も黒い革の表面を行き来して、人の顔が映りそうなぐらいに仕上げていく。実際、爪先にはぼやけたグレイの顔が映り込み、こんな風に口を開いたのだ。

「……師匠は、やりたくて君主ロードをやっているようには見えないですから」

うん、いい着眼点だ。

そういう野心がちらりとでもあったなら、私も選ばなかったろう。結局のところ、あれは魔術とその先にしか興味のない、魔術師らしい魔術師だ。時計塔の権力闘争も、もとを辿たどれば魔術研究のために有利な環境を確保するのが目的だったはずだが、さて今の魔術師の何割がその大前提を覚えているものか。

「私が、いろいろ縛っているのは確かだがね」

おっと、意地悪い笑みになってしまった。

この子はあまり苛めないようにと思っていたのに、ちょっと気を抜くとこれだ。

「……また、師匠に何か依頼をしにきたんですか?」

いつもの実直な語り口で、グレイは尋ねた。

おどおどと人に触れることを怖がっているのに、それでも懸命に 手を伸ばそうとするその態度に、少し気が抜けてしまう。

「君は本当にいい内弟子だな」

ぽん、とフードの上から、頭に手を置いた。

グレイの方も、「……ぅ」と小さく呻いたものの、身を引くこと はなかった。よしよし存分に撫なでさすってやろう。

「というか、君は室内でもずっとフードをかぶってるが、暑苦しくないのかね。我が兄が五う月る蠅さいんだったら、私が説教して やってもいいが」

「.....あの、それは」

困ったように、少女がフードの端を押さえて、恥ずかしそうに口にしたのだ。

「あの人は、拙が顔を隠していてもいいって言ってくれてますから」

「はて」

これまた、よく分からない心理だ。

とはいえ、私は兄と違って、理解できないところはとりあえず追及するといった悪癖はない。分からないならば放置しておけばいいのだ。人生は短い。やるべきことは多すぎる。放り投げられた宿題なんていつも山積みで当たり前なのだから。

とりあえず、今回は用事を優先することにした。

「我が兄は奥でいいのかな」

「はい」

ちょいちょいと人差し指を振ると、こくんと少女はうなずいた。

「じゃあ、また後で」

ウィンクひとつ送って、私は奥の瀟しょう洒しゃな扉に手をかけた。

開くと、整った部屋が広がった。

最初に目につくのは、隙間なく置かれた本棚だろう。

几き帳ちょう面めんなぐらいにジャンルとサイズとで区分けされ、かつ日差しに焼かれないよう窓からの角度も配慮されている。 スライド式の本棚にはざっくりと二千冊ほどの蔵書があるはずだが、もちろんコレクションのごく一部である。

机に置かれた純銀軸の万年筆やギロチン式のシガーカッターも実に洒しゃ落れており、ここだけ切り取ればデキる男の仕事部屋といっても遜色ない。……いやまあ、気晴らしらしい最新世代携帯ゲーム機が隅に置かれているのは、仮にも時計塔に連なる学術棟の一室としてはいささかの違和感を禁じ得ないのだが。

「アパートはあんななのに、どうして時計塔ではこうなのかね。猫 でもかぶっているつもりか、我が兄よ」

「……仕事場は整理しておくのが当然だろう」

どちらも挨拶なしだが、我が兄はちょうど読書中だったらしい。 部屋の奥でアンティークの椅子に座り、肘掛けに手をもたせかけた まま、憂鬱そうにページを見つめている。時計塔の教授たちがあり がたがるような古書ではなく、比較的新しい書籍だった。

ついてきたトリムマウが扉を閉めるのを確認してから、私はちらと書名を確かめた。

「その本は初めて見るな」

「カリフォルニアのコンベンションで今年話題になっていた、原子力と五大要素についての魔術論文でね。ごく身内用にだが、限定で数十部ほどつくられたものを送ってもらった。まあ、最近は電子書籍として会員に販売もしてるようだが」

面倒臭そうに、兄が説明する。確か現代魔術が盛んなのはカリフォルニアを中心としたアメリカの西海岸地域だということで、毎年現代科学を下敷きにした最新魔術論文が発表されているらしい。もっとも、そのほとんどは実際の魔術とは関係の薄い――要するに、オカルトや神秘学の範はん疇ちゅうとなってしまうため、時計塔でもこのあたりの論文を逐ーチェックしているのは我が兄と後数名ぐらいなものだろう。

長い黒髪と、眉間に浅く刻まれた皺。

苦労性ゆえにいささか年上に映るが、まだ青年の印象も残した面差しをしていた。

ロード・エルメロイII世。

その名を思い浮かべるだけで、ついおかしくなってしまう。

私の与えた名前。封じた地位。

「……で、なんだ? また何か文句でもあるのか」

書籍から視線を離さず、兄がつっけんどんに口にした。

ああ、これは忙しいというよりも、目も合わせたくないということだろう。嫌われたものだと思うと、またぞくぞくと背筋に愉悦が走ってしまう。

だから、ついからかいたくなってしまった。

「剝ア離ド城ラの件は苦労をかけたな」

「つ.....!」

兄の顔が、思い切りしかめられる。

ぎり、と歯ぎしりの音が聞こえそうだ。早々に入れ歯になってしまうのではないかと心配してしまうが、それはそれで楽しめそうだ。

「……苦労どころじゃなかったぞ」

「いやあ失敬。とはいえ、それなりの事情があるのは我が兄も分かっていただろう」

肩を揺らして、私は近くの椅子の背を撫でる。

まあ、あそこの遺産が手に入れられるならそうしたかったのは本音なのだ。

エルメロイの魔術刻印修復に使えたかというと難しいが、かなり の値段で売り払えたのは間違いない。結局のところ、あの事件で得 をしたのは残った遺産を没収できた法政科になってしまうのだけ ど。

「そういえば、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトに会ったんだって? 君を指導役チューターにご指名とか、私みたいなことをやったそうじゃないか」

「あの娘なら、早速三つの学部に志望届を出してきたぞ……」

書籍片手に、こめかみを揉もみながら、兄が言う。

通常なら、時計塔に入門した魔術師は全体基礎ミスティールで五年ほどを過ごしてから、各学部へ移行していく流れである。ただし、これは成文化されたものでもなんでもなく、優秀な魔術師ほど早くから掛け持ちや移籍を繰り返すのも常だ。

さらに言えば、兄は各学部で助すけっ人とのように講義をやらされているため、エルメロイ教室といえば現代魔術学部にとどまらぬ 影響力を保持しているのだった。

「ほうほう。さすがは名にしおうエーデルフェルト。どうするつも りかな?」

「ふん。何はともあれ宝石魔術だからな。面倒は鉱石学部に見てもらうさ。その上で、私の推薦状もつけておこう。彼女にそんなものがいるかどうかは別としてな」

「これはまた」

感心すべきか呆あきれるべきか。

なんだかんだで面倒見の良いことではある。自分の苦労を引き寄せてるのが、そうした最後の部分での面倒見の良さだと、どこまでこの兄は分かっているものか。

おまけに、

「.....別に世間話をしにきたわけじゃないだろう」

と、向こうから切り出してくれる懇切丁寧さだった。

「さっさと今回の用件を言え。わざわざ私のところまでやってくる

んだ。どうせ、それなり以上にろくでもない案件なんだろう」

「ああ、簡単だとも」

と、私は苦笑しつつうなずいた。

デスクに両肘をついて、ぐいと兄に迫る。こいつ何をトチ狂った という視線をあえて無視しながら、肝心の用件を口にしたのであ る。

「そこのグレイを、数日私に貸してくれないかな?」

Г......

この言葉は想定していなかったのか、兄の返事は数秒遅れた。ただでさえあまりよくない目つきをさらに細め、やっと手元の書籍をぱたんと閉じてから、私へと視線を移した。

「どうして、グレイを?」

「おお。初めて、私の方を向いてくれたな? そんなに内弟子は大事かい?」

「……レディ」

兄の声音に、ひどく真剣なものが混じった。まあこういう兄だ。 自分のことには無頓着でも、一旦弟子のこととなればどうしようも なく変貌する。

「契約がある以上、君の願い事は可能な限り善処しよう。だが、そこには弟子の采配まで含まれていない。もしも、エルメロイ教室の生徒が自分の手勢とでも思っているなら、それは私にとっても君にとってもあまり喜ばしくない誤解だぞ」

やれやれ。

あの弟子にしてこの師ありだ。いや逆か。まあ、からかうのもこ こまでだろう。 肩をすくめて、正直なところを私は告げたのだ。

「実は、社交会に誘われてしまってね」

「……社交会?」

「ああ、トランベリオ派からのお誘いさ。普通なら遠慮するところだが、うちに融資してくれてるノーリッジ卿を介してるとあっては、さすがに無視できないだろう?」

「……トランベリオ派から、だと?」

兄の視線から、急速に温度が下がっていくのが実感できた。

.....ああ。

戻ってきた、感じがする。この冷たい緊張感。フラットたちのあまりに破天荒な在り方とは違う、私の知っている魔術の世界。さきほどグレイにも似たことを問われたものの、その実態は倫口ン敦ドンの影を啜すすってきた者でなければ分かるまい。

ここが、私の故郷だ。私が生まれ育ってきた場所だ。

兄が、低い声で尋ねる。

「社交会の趣旨は?」

「その前に、我が家庭教師にひとつ尋ねてもかまわないかな?」

人差し指をあげた私が、はたして兄の答えを待たず、即座に続けた。

「我が師に問う。──美しさとは、そもいかなるものか」

突然、禅問答に話題をすりかえたとしか思えぬ私の発言に、しか し兄はひどく重苦しく顔をしかめた。

ため息をひとつつき、デスクへと手を伸ばしたのだ。

「魔術における美を定義するなら、一般的な例は黄金比だろう」

言いながら、兄は卓上に置いてあった三角定規とコンパスを取り出す。

近くのメモ用紙を引き寄せ、まずは三角定規を使って、手慣れた 仕草で正方形を描いてから、その一辺にすうとコンパスで円を描い た。

実際、この手の技術は魔法円を描くには必須であり、優れた魔術師には優れた測量士の技術も求められる。古い魔術師たちが大工たちの互助組合フリーメーソンに参画していたという説も、あながち眉唾というわけではないのだった。

正方形の一辺を延長し、円との接点を使って、とある長方形を兄はつくりあげた。

「これが黄金比だ。フィボナッチ数列の隣り合う二項の比──つまり、おおよそは短辺を1として長辺を1・618とする長方形。地域や時代を問わず、人類が美しさを見み出いだす比率だな。伝承では古代ギリシャの建築家ペイディアスが発見して各種建築に応用したとも、それより二千年以上前、エジプト第三王朝の祭儀文朗読神官長イムホテプがピラミッドの建設に使っていたとも言われている。

もちろん黄金比以外でも、トンボの羽や蜂の巣といったハニカム 構造、オウムガイや竜巻、銀河の星雲が形成する対数螺旋などに、 調和の美を見出すものは多い。当たり前だが、多くの魔法円や工房 も数字上の調和抜きで安定することなんて不可能だ。美しきもの、 汝なんじの名は数字なりとでもいうところか」

つらつらと、兄が話す。

すでに、兄の口調は講師としてのそれに切り替わっている。つくづく天職なのだろう。だったら、その天職を与えてやった私に、もう少しぐらい感謝しても罰はあたらないと思うのだが。

「ははあ。ペイディアスの名前はなんとなく覚えてるぞ。確か、数学でφの記号のもとになった人だろう」

「半端な覚え方をしたもんだな。というより、φ自体が黄金比をあらわす記号だ。ほかにもオイラー関数や波動関数にも使われている

がねぃ

つまらなそうに、兄が答える。

「ペイディアスはパルテノン神殿の総監督を請け負った建築家で、世界の七不思議にも数えられるオリンピアのゼウス像をつくった人物だ。……ふん、それこそひとつ間違えば英霊にでもなりかねない人材だな」

ぽそりと呟いた言葉には、極力無視を貫く。

まあ、なんとも無様に未練の抜けない兄だこと。

少し間をおいて、兄の手が懐から葉巻を取り出した。シガーカッターで先端を切り落とし、マッチで炙あぶるようにして火をつける。

「……が、こうした美とは別に、時代や地域によって変異する美しさがある。つまり、『流行』というやつだ」

言って、ゆっくりと煙を吸い込んだ。

一応私の好みを考慮してか、比較的香りの淡い銘柄だった。

「この『流行』とは、何もファッションや音楽だけに属するもの じゃない。おおよそありとあらゆる人間の文化に表出する」

「ほう。我が兄よ、あらゆる文化とは大きくでたな?」

「事実だからな」

と、兄は葉巻をくゆらせる。

「古典の再評価だとか再発見だとか、いくらでも聞くだろう。そうした『流行』は、現代魔術的に考えるなら集合的無意識―いささか語弊を含むが、東洋の言葉で阿あ頼ら耶や識しきといってもいいだろう―から、定期的に浮上するものだ。深い海の底から、時折顔を覗かせる氷山の一角に譬たとえてもいい」

目の前の煙を、ぐるぐると兄の指が掻かき回した。

その煙が海で、突き出た指先が氷山の一角ということなのだろ

う。あるいは、人類の集合的無意識なんて、それぐらい曖昧なもの だよと言いたいのかもしれない。

「つまり、単純に、個人が好きになったり嫌いになったりしているだけの現象とは異なるんだ。我々の嗜し好こうは純粋に内発的なものではなく、さまざまな外的環境に影響されつづけている。この路線だと、宗教も分かりやすく美しさが絡む例だな」

「宗教?」

「ああ。宗教はその理念が美しいと認められるからこそ一般に浸透する。あれだけ偶像崇拝を禁じているキリスト教が、マリア像などの宗教芸術には熱心なのはそういう理由だよ。理念としての美しさと芸術としての美しさをセットで提供することで、過去の多くの宗教はその時代の信者を確保してきたわけだ」

宗教を、美しさに起因するものと我が兄は言う。

当時の多くの人間がそうした規律を美しいと思えばこそ、宗教はひとりの人間からひとつの地域へと、場合によっては世界の隅々まで広がっていくのだと。

「そして、この美しさもまた定期的な『流行』と無関係じゃない。 なにしろ、ミトラ教とマニ教が同じ地域で入れ違いに勃興して衰退 する繰り返しに、限定された集合的無意識の変遷を見出す論文もあ るぐらいだ」

「ちょっと待ってくれ。つまり、私たちがどんな宗教に帰依するか も『流行』だって?」

「そうだとも」

聖堂教会あたりが聞けば、即座に始末されそうな結論に、兄がうなずく。

「要するに、どういう宗教が好まれるかも『流行』によって変わるんだ。おおよそメジャーな宗教は複数の路線を持っていて、時代の『流行』に応じて切り替えることで、対処できるようにしているがね。ブッディズムだと大乗と小乗、キリスト教なら旧教と新教、一見対立しているように見えるが、つまるところはそのときの人々の『流行』にうまく応えてきた結果だよ」

「……なるほど、壮大な話だな」

と、私も片目をつむった。葉巻の煙が目にしみたのかもしれない。

ファッションや音楽の『流行』が十年や二十年ごとに循環するように、宗教に表れるような文化集団の美意識でさえも、数百年や千年の時を経て衰退や復興を繰り返すものだと、兄は説明しているのだ。

۲ ا

同時に、時計塔に伝えられているもうひとつの歴史も、私は思い 返していた。

パラダイムシフト。

もはや二度とは戻らない、不可逆の変化。

神しん代だいが終わり、妖精の時代が終わり、やがて人類の時代へと移り変わっていった。そしてきっと、その先に連なっていくのだろう新たな時代は──

「さて、レディ。君が言う美しさとは、今のどちらかな?」

不意に、葉巻を持ち上げて、兄が突きつけた。

瞳は、こちらに真まっ直すぐ据えられていた。

「ふうむ」

「私が思うには──君が言いたいのは、そうした『流行』や、数学的に証明されたような代物ではない。いいや、そうした常識を超越した美を、もしも人間が体現できるとしたらじゃないか?」

核心へと、兄が話を進める。

ちょっと、ヒントをばらまきすぎたかもしれない。

「ふふふ? まあ、我が兄にはいささか簡単すぎたかな?」

素直に受け容れて、ちろりと舌を出す。

世に、美女の伝説は数あま多たある。

クレオパトラ。

楊よう貴き妃ひ。

ヘレネ。

もっとも、三大美女に限らず、こんな美の定義はいい加減だ。

歴史や地域によって、首や足の指が長いことに美を見出す者もいれば、ひたすら長い髪に美を見出す者もいる。これはさきほど兄が言っていた『流行』によるものだろう。単に一定年月で繰り返し浮上するようなものだけではなく、地域的な美的感覚も含めて、ロード・エルメロイII世は『流行』と定義していたのだから。

だが、そんな常識からも隔絶した存在があるとしたら?

それは、まさしく魔法の領域に手をかけたことにはなるまいか。

長い黒髪に煙を纏まとい付かせ、兄は静かに看破する。

「……なるほど。社交会とは、黄おう金ごん姫き、白はく銀ぎん姫 きのお披露目か」 しばらく、兄は黙り込んでいた。

窓からの日差しが、昼下がりの憂鬱さを湛たたえて、彼の横顔を 斜めに通り過ぎていく。滞留した葉巻の煙は、そうした光の帯を くっきりと浮かび上がらせていた。

「……そうか。今代の黄金姫、白銀姫もそろそろだったか」

と、もう一度口にする。

白い指先がとんとんとさきほどのメモ用紙を叩いた。

「うん。そうなるとトリムだけではいかにも心細い。だけど、時計塔の社交会に連れて行けるようなボディガードに心当たりがなくてね。我が兄も探偵はともかく護衛役向きとはいいがたいし、ここは内弟子の力をお借りしたいと思ってね」

「だったら、お前からグレイに頼め」

۱ (¢ ۲

意外な返事に、私も一瞬戸惑った。

「さっきも言ったが、私の生徒だからといって自由に使えると思わないでほしい。だいたい、お前とグレイは私の生徒という意味では同輩に違いないだろう。そういう要望があるなら、私を通さずに自分で依頼すべきだ」

「つまり……個人で依頼する分にはかまわないと?」

「そう言ってるだろう」

「う、うむ……」

考え込んだ私を、なんだか妙な目つきで兄は見つめた。

「前から思ってるのだが」

「む?」

眉をひそめた私に、鋭く切り込んだのだ。

「お前、友人に何か頼んだことないだろう。というか友達いるのか?」

「.....むむ」

思わず、唸ってしまった。

図星ではあるのだ。これが正式な依頼だとか、多額の報酬を要求されたとかなら何の問題もないのだが、おそらくそういう類でないぐらいは私にも分かる。あ、いや、もちろん私なりの友人はいるのだが、こういう状況に応じた訓練はしていないわけで。

「.....あの」

と、扉が開いたのだ。

小柄な身体をますます縮めるようにして、灰色のフードをかぶった少女がそこに佇たたずんでいたのである。

「……そのお話、拙は受けてもかまいません」

「グレイ」

兄が、瞬まばたきする。

すると、少女は肩をすぼめて、頭を下げたのだ。

「......すいません。聞くつもりじゃなかったんですが」

おどおどと言ったところで、新たな声が部屋に響いた。

「イッヒヒヒ! 俺の耳には届くもんだからさ! みっしり告げ口したぜ! そりゃもう『告げ口心臓テル・テール・ハート』ってなもんでね!」

少女の右手のあたりから、奇怪な声がしたのだ。

ふわ、とフードが舞い上がった。固フ定ッ具クの外れる硬い音をたて、その右袖から鳥かごのような『檻おり』に封じられた──目と口を刻印された奇怪な匣はこが現れたのである。

「.....アッド」

苦々しげに、兄が呟く。

一応、私も既知の身ではある。単に人格付与された魔術礼装というだけならトリムマウもそうなのだが、このアッドの場合はずいぶんと洗練されていた。もっとも、グレイとアッドの秘密が、その先にあることも知ってはいるのだが。

小さくため息をついてから、兄は尋ねた。

「グレイ。本当にいいのかね? たいていの上流社会でそうだろうが、とりわけ時計塔の社交会は華やかなだけの代物じゃないぞ」

「は、はい」

と、灰色グレイの少女はうなずいた。

「……拙も、時計塔ここのことをもっと知っておかないといけない 気がするんです」

「……なるほど」

なんとなく、兄はいつもより複雑に顔をしかめた。この少女の口から発せられた言葉として、何かしら思うところがあったのかもしれない。

その手を、横から私がかっさらったのだ。

「……だったら決まりだな。感謝するぞグレイ」

「は、はい」

突然手を握られて、フードの少女が赤面したままうつむき、それからやっとぼそぼそと言葉を付け加えたのである。

「あの、それで、黄金姫と白銀姫というのは?」

「まあ、そこは行き道ででもおいおい話すよ」

ここでうっかり逃げられてはかなわないと、説明を後に持ち越 す。

詐欺師のやり口だなとばかりに兄が見つめているが、それは気に すまい。手の綺麗さなんて気にできるのは、生き残った後のこと だ。

手を握ったまま、ふと思い出して振り返った。

「ああそうだ。我が兄にひとつお願いしておくこともあったんだ」

「もう、ひとつじゃないだろう」

嫌気を隠そうともしない兄へ、私は話題を切り出した。

「ほら、第五次聖杯戦争の協会枠について、まだ諦めてないんだろう?」

「.....そのつもりだ」

びくん、とグレイが反応する。

聖杯戦争という言葉に、何かしら思うところがあったのかもしれない。

「いや、今回に絡んで少しトランベリオから聞いたんだが、協会側の意図はほぼ決まりだよ。現状の封印指定執行者では最強の一角と名高いバゼット・フラガ・マクレミッツ。聖杯戦争の特性を考えても彼女はもってこいだし穏当な人選だろうね。――応、もう一枠あるようだが、これがなんともきな臭い。抜ばっ擢てきされた魔術師が、新参者に金を積まれて譲り渡しそうだとか」

Г......

数瞬黙り込み、兄はただかぶりを振った。

「協会枠だけが、聖杯戦争に出る手段じゃないだろう。......なんに せよ、お前とエルメロイへの補塡の目め処どがついてからだ」 重く、呟いた。

葉巻の先端を灰皿に滑らせると、ことんと塊で落ちた。少しだけ 首に似ていた。

補塡とは、つまり借金だったり魔術刻印だったりの話である。どちらも数ヶ月でどうにかなるようなものではなかった。

「残り期間はとっくに絶望的なのに、なんとも涙ぐましいことだね。まあ担保も取ってるんだけどさ 」

肩をすくめて、私は肝心のお願いを切り出す。

「──だったら兄上。万が一間に合った際の保険なんだが」

「h?」

「死ぬ前に、私と子作りしていかないか? なんならトリム相手で もいいぞ」

今度こそ。

思い切り、ロード・エルメロイII世は噴き出した。

うん楽しい。ここまで破壊力があるなら、何か飲み食いしてると きにすべきだった。横合いでグレイまでかちんこちんに固まってい るのだが、まあ巻き添えは内弟子の義務と諦めていただきたい。

「私の魔術回路を血筋に組み込んでどうする気だ」

手の甲で口元を擦って、憎々しげに兄が言う。

「いや、組み込む気はないよ。魔術刻印をあげるつもりもない。しかし、君の人望と権威はなかなかのものなんだし、魔力の使い方自体には見るべきものもある。残念ながらエルメロイの結束が固いわけでもないんだから、この際子種をもらっておいて、分家に投げるのは悪い考えではないだろう」

「……レ、レディ」

やっとのことで平常心を取り戻したのか、兄が嗄かれた声でこちらを睨にらみつける。

「……そういう法政科的な考えは、私の好まないところだが」

「おっと気分を損ねたかな」

これは分が悪いと、踵きびすを返す。

もちろん、グレイの手を握ったままだ。

小柄な少女を引っ張って、私はひとつウィンクしてみせた。

「では、内弟子を貸してもらう。兄の差配には感謝しておくぞ?」

扉が閉じられる際、我が兄がこぼしたため息のなんと重そうだったことか。

翌朝、私たちは倫敦からの電車に乗っていた。

待ち合わせはホームでと話していたのだけど、まだ電車に慣れていなかったらしく、改札のあたりでまごついているグレイを発見した。さすがに切符は分かるが、最近採用されたばかりの非接触型ICカードの改札機を見つけてしまってフリーズしていたらしい。

グレイの荷物はいつもと変わらなかった。

こちらもスーツケースひとつを転がしているきりだ。トリムマウ も街中で見せびらかせるような代物ではないので、こちらに収納し てある。なお水銀製の彼女の質量からして重量軽減の魔術は欠かせ ない寸法だ。

「すまないね。付き合わせてしまって」

「い、いえ」

と、遠慮深げにグレイは一礼した。

四人がけのコンパートメント席で、私と彼女は向かい合わせになっていた。隣同士ならともかく、こうして向かい合ってしまえば無言というのは難しい。とはいえ、彼女が倫敦に来てからこうしてふたりきりになる機会はあまりなかったので、話題の切り出し方にはいささか迷ってしまう。

(.....うん、まずは食事といこう)

というわけで、用意していた木箱をスーツケースから取り出す。

しゅるしゅると赤いリボンをほどき蓋を開くと、かぐわしいカカオの匂いが鼻び腔こうをくすぐった。

可か憐れんに並んでいたのは、さまざまな花の形を模したチョコ レートだ。表面には、丁寧に砂糖漬けされた本物の花びらも飾り付 けられていて、まず見た目から楽しい。

手元のチョコレートをつまみ、ぱくりと口に入れる。

舌の上で溶けていく甘みとかすかな苦み。さきほどの花びらの甘みが複層的に重なって、ついつい二個三個と手が伸びてしまう。倫敦で贔ひい屓きにしているショコラティエの作品で、普段はチョコレートドリンクを堪能させてもらっているのだが、こうした詰め合わせも侮れなかった。

「むむう。今月はビターにまとめたな。くそ、私にカロリーで挑戦する気か」

もちろん魔術にはやせ薬も多々あるが、おいそれと実験台になる うとは思えない。

少し考えて、目の前の少女へ差し出した。

「ひとつどうだい?」

「……あ、ありがとうございます」

礼を言われたので、適当にひとつ渡す。

あまりお菓子の習慣はないものか、薔ば薇らの形で砂糖漬けの花びらの添えられたチョコレートをしばし手の平においたまま戸惑っていたが、思いきって口に放り込むと、目を丸くしたまま数秒ほど硬直した。

「……美お味いしいです」

「ふふふ。気に入ったなら、ほかのもどうぞ?」

小動物みたいな反応に嗜虐心も満足して、スーツケースへもう一 度手を入れる。

「じゃん」

と、今度はボトルを取り出したのだ。

「……お酒、ですか?」

「ふふふ、ここのチョコレートセットはシャンパンがセットなのが

売りでね。もっとも、今回はアルコール分を蒸発させたノンアルコールワインなんだが、ちょっとばかりいかがかな?」

なお、我が英国では、父母の許可があれば自宅に限り五歳から飲酒OKである。なのでノンアルコールとかいっても今更感が溢れてるのだが、これもTPOだった。

携帯用のグラスもふたつ取り出し、グレイと自分の分を注ついで渡した。

チョコを一口。

舌の上に濃厚な甘さが残っている内に、ワインも一口。

とろりと広がった甘みが、清涼な葡ぶ萄どうの風味と渾こん然ぜん一体となって喉元まで広がっていくのを堪能する。

「ああ、遠慮せずもう少しつまんでもいいぞ」

ちぴちぴとノンアルコールワインを吞のんでいるグレイへ、まだ 半分以上残ってるチョコレートの箱を差し出した。

「あ、いえ……これで十分です」

「おや小食なんだな」

「……師匠にも言われてます」

なんとなく申し訳なさそうに、少女が肩をすくめた。

もっとも、美味しいという言葉は嘘でないようで、しばらく嬉し そうに両手でグラスを持っていた。

「ところで……あの」

「ん?」

遠慮深げに、グレイは視線を落として話しかけてきた。

「どうして、目の色が違うんですか?」

グレイの指摘は、普段の私の瞳が燃え立つような焰ほむら色であることを示唆していた。

今は、鮮やかな青色のはずだ。

そっと自分で瞼のあたりに触れて、微笑する。

「ああ、こっちが地と言えば地の色だよ。──おっと、そろそろ足し ておかないと」

懐から出した目薬を差す。

しばらく目をつむって、薬が浸潤するのを待ってから瞼を開く。

「私のは一種の魔眼でね。副作用で、魔力に触れると赤く染まるん だよ」

これも魔術師の家系に生まれたおまけではあった。

もっとも、もともとアーチボルトの分家に過ぎないわけだから、 中途半端な出来なのは仕方ない。正直邪魔になる方が多いのだが、 これでも時計塔ではそれなりのステータスになるのだった。

「時計塔は魔力だらけなんで気にしてないが、さすがにアカイロの 瞳は公共機関向きじゃないだろう? 魔術師の本懐としてはいささ か目立ちすぎる」

くつくつと笑う。つまるところはよそ行きだ。葬儀ならなるべく 黒い色を纏っていくようにとか、そんなのと変わらない。魔術師な ればこそTPOは大切にすべきなのである。

風景が過ぎていく。

倫敦の外に出ると、途端に田園や森林が増えてくる。電車の揺れとともに、こちらの緊張が溶けていくようにも思えた。どうせ向こうに着いたら嫌でも緊張するはめになる。今ぐらいは気持ちを休めておくのがベターだろう。

しばらくして、思いきったようにグレイが顔をあげた。

「……今回のこと、聞いて、いいですか?」

「黄金姫、白銀姫だね」

「はい」

と、少女はうなずいた。

「さて、何から話したものか」

席に深く腰掛け、私は少し考えてから言葉を紡いだ。

「まあ、創造科バリュエの君主ロードバリュエレータの係累なんだがね。もともと創造科ではほとんどの魔術師が何らかのかたちで芸術家なんだ。どういう芸術を指向しているかは千差万別だが、イゼルマという家は代々『最も美しいヒト』をつくることにご熱心なのさ」

手元のチョコレートを、もうひとつ口にする。

今度は百ゆ合りの形をしたチョコだった。苦み控えめで、上品な 甘さが舌の上で優しくほどけていった。

「最も美しいヒト.....ですか?」

「我々はなぜ美を認識するか」

兄と話したようなことを、つらつらと口にする。

「まあ、認識は魔術に影響するというのはよく言われていることだからね。新しい代の黄金姫と白銀姫ができあがったと判断されたとき、お披露目するのが恒例になっているのさ。私が目にするのはこれが初めてだがね」

「それが……黄金姫、白銀姫」

自分の脳細胞に刻みつけるみたいに、何度か少女は呟いた。

それから、こう切り出した。

「何か……起こりそうな心当たりがあるんですか?」

「どうしてだい?」

意外な質問に訊きき返すと、グレイは一拍おいてから答えた。

「……剝離城アドラのときも……ライネスさんは何らかの事件が起こるまでは予期していたように思えました。……今回も……拙を誘おうとしたのは、そういう理由じゃないでしょうか?」

「これは参った。勘がいいんだな」

ぴしゃり、と私は額を叩く。

この少女のことを甘く見ていたつもりはないが、いつのまにか人間の機微にも気づくようになっていたらしい。いや興味が出てきたというべきか。兄の顔をしかめさせた「時計塔のことをもっと知っておかないといけない気がする」という一言も、そうした変化から生じたものだろう。

「冠位グランドのひとりが、お披露目に来るという噂うわさが立っ ているのさ」

隠しておくことでもなかったので、素直に打ち明けた。

「冠位グランド……魔術師の最高位ですか?」

「その通り」

と、私はうなずいた。

冠位グランド。

色位ブランド。

典位プライド。

祭位フェス。

開位コーズ。

長子カウント。

末子フレーム。

以上が、時計塔における主要な階位だ。

見ての通り、最高位が冠位グランドであり末子フレームが最低位ということになる。

「もっとも、事実上の最高位は色位ブランドでね。大半の君主ロードですらそこどまりだ。私の義兄だったケイネス・エルメロイ・アーチボルトをしても、その先にはついに辿り着かなかった。……まあ、長生きできていれば、ひょっとすると目がなくはなかったかもしれんが」

「……師匠の、先代ですか」

グレイが、その名前にぴくりと反応した。

何かしら、思うところがあるのかもしれない。

もしくは、兄が何かしら悩んでいるところを見ているか、だ。

あれがロード・エルメロイII世なんて、私の気まぐれを頑なに名乗り続けているのは、もちろん先代の死になんらかの引け目なり罪悪感なりを感じているからだろうが、私としてはご馳ち走そう様としか言えない。ただ、そのことに内弟子まで煩はん悶もんを感じているようなら、もう少し配慮の余地はあるんじゃないかと、思わないではない。

......いや、それも美味しいのだけどね?

ともあれ、もともとの説明を続行する。

「まあ、そういうわけで冠位グランドというのは時計塔ですら滅多にお目にかかれない相手なのさ。そんな最奥に辿り着くような連中は、魔術師同士ですらほとんど関わろうとしないからね」

「.....分かりました」

グレイも納得したようだった。

「……そういえば、師匠の祭位フェスはどうなんですか?」

「そちらはまた特殊でね」

思わず、苦笑してしまった。

普通に数えれば第四階位ということになるのだが、この称号には 特殊な条件が付与されている。つまるところ、通常の魔術師の能力 とは別に、評価せざるを得ない特殊な技能や実績に対して与えられ る名誉階級なのだ。カバラの生命の樹セフィロトでは美をあらわす ティフェレト──美しければよし、というところか。

「美しければ、よし」

グレイが繰り返す。

今回の黄金姫の話題にも似ているのは、単なる偶然とも言えない。つまり、美を希求する性質は、魔術師にとってある程度一般化できることなのだ。兄みたいに言えば、人間の認識を測定することは魔術師の基本性能のひとつだ、とでもなるだろうか。

「まあ、そういう性質から、祭位フェスにはほかとは異なる意味が まとわりつきがちでね」

魔術師としての能力はピンからキリまで。場合によっては、色位 ブランドを越える魔術師がこの階位に据えられていることさえあ る。

たとえば、伝承保菌者ゴッズホルダーとして神代より伝わる礼装を振るう執行者。

たとえば、傷ついた魔術刻印をいともたやすく再生しうる修復 師。

単なる魔術師の域にとどまらぬ、絶大な異能に対する畏怖。

もしくは。

「……もちろん、兄上の場合、生徒の能力が評価されてということになるな」

つい浮かんでしまう意地悪い笑みを自覚しつつ、私は言葉をつな げる。

「講師なのだから生徒が評価されるのは素晴らしいことだ。しかし、そこを評価してなんとか祭位フェスというのは、仮にも君主ロードとしては前代未聞と言ってもいいんじゃないかな」

評価されなければ、開位コーズや長子カウントでもおかしくないわけだからな、ととどめまで刺してしまう。ちなみに私個人の評価では我が兄の魔術師としての能力は開位コーズのかなり下の方だ。

さすがに入門したての新世代ニューエイジよりはずっとマシだが、 個人の技ぎ倆りょうとして見るべきものはない。平凡オブ平凡であ る。

より厳密に言えば、家系につく階位と個人につく階位は別だったりして、この落差が大きいとまた悲劇につながったりするのだが、ややこしいし割愛しておこう。

「......す、すいません。ちょっと混乱してきました」

一度に情報をいれすぎたせいか、グレイの表情はなんとなく胡う 乱ろんになっている。

今にも熱を出してしまいそうに目をぐるぐるさせて、うーんうーんとこめかみを押さえていた。本人が思っているように頭が悪いわけではないが、大量の情報を順序よく整理するのに慣れてないのだろう。なにもかもいっぺんに抱え込んでしまうタイプだ。一夜漬けには向いていまい。

そういうところも、ついからかいたくなってしまうのだけど。

「まあ、あとはぶっつけ本番でどうにでもなるさ」

と、唇の端をつりあげたのだった。



倫敦からウェスト・コースト本線に乗っておおよそ三時間半、途中のオクセンホルム駅で乗り換えてしばらくするとウィンダミアへ到着する。

湖水地方。

イングランド有数のリゾート地として知られる、風ふう光こう明めい媚びな土地だった。ピーターラビットの故郷と言えば分かる者もいるだろうか。作者であるビアトリクス・ポターが愛し、山と湖に囲まれた景色とその牧草地に住まう兎うさぎたちを切り取った絵本は、いまでも世界中で読み継がれている。

駅から降りてすぐのところに一台の馬車が待っており、私たちの姿を認めると、御者と思おぼしい人物が帽子を取って一礼したのである。

「お待ちしておりました。ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ様ですね」

と、御者は問うた。

「バイロンより申しつかっております。どうぞお乗りください」

「では遠慮なく」

きょろきょろとグレイがこちらを見つめていたが、鷹おう揚ように私はうなずいた。ここで遠慮しても何の意味もない。スーツケース片手にさっさと乗り込んで、後ろのグレイにも続くように促した。

鞭むちの一当てで、鳴き声とともに馬が歩き出す。

平地はもちろん、かなりの険しい山道も、馬車は優美に進んでいった。

動物に牽ひかせているのに、ほとんど上下動を感じないのは、何らかの魔術によるものだろう。私がスーツケースにかけているような重量操作の魔術か、はたまた車体にちょっとした浮遊魔術をかけているのかもしれない。

やがて、

「……どうやら、見えてきたね」

と、窓の方を、私は顎でしゃくった。

ふたつの塔が、湖畔に佇んでいたのだ。

現代の基準で言えば、さほど巨大な建物ではない。せいぜいのところ四階建てのビル程度のものだろう。ただ異様に傾いてそそりたったカタチが、どちらの塔も酷似していた。

「ふたつの塔をさして、双貌塔と呼んでいるらしい。あるいはこの 土地を管理している家の名を足して、双貌塔イゼルマとも」

「双貌塔イゼルマ……」

鸚おう鵡む返しに、グレイが呟いた。

「東側を陽ようの塔、西側を月の塔と申します」

聞いていたのかどうか、御者の声が馬車の内側に届いた。

陽の塔。

月の塔。

つまりは、太陽と月ということだろう。もっとも、私個人として は、獲物を待ち構えているアリジゴクのようなイメージの方が強 かったのだが。

工房は当然のこととして、魔術師の領地はまずその家に最適化されている。つまるところは要塞のようなもので、一握の砂、一呼吸の空気すらもが、自分たちの敵にいつまわるかしれぬのだ。ただならぬ緊張感に、私の唇はついほころんでしまっていた。

今回は、月の塔のすぐそばで、馬車が停まった。

「こちらでございます。──では、お楽しみくださいませ」

と、御者が会釈した。

私たちが降りて、少しすると、その御者と馬車がどろりと溶けた のだ。

まるでおとぎ話みたいに、後に残っているのは小さな玩具おも ちゃの兵隊と馬車がひとつずつであった。

「さすがは創造科バリュエの正統な分家。この手の細工はお手の物か」

思わず私が唸りをあげると、

「一お褒めにあずかって光栄ですな」

と、低いバリトンがかかった。

「いらっしゃいませ。エルメロイの姫」

塔の入り口で、慇いん懃ぎんに身を屈かがめたのは、口くち髭ひげをたくわえた四十半ばの紳士であった。ブラウンの髪で朱色のスーツを纏い、足が不自由なのか、片手に杖つえをついている。

「バイロン・バリュエレータ・イゼルマと申します。遠路はるばる お越しいただき感謝いたします」

「イゼルマの当主であられたか。これはご挨拶が遅れました」

できるかぎり丁寧に一礼する。

こちらも十二の君主ロードに名を連ねた当主候補とはいえ、今は 我が兄にその席を譲っている。もともとアーチゾルテが末端も末端 なのを考えれば、家格だけでいえば六分四分で向こうが上といった ところだろう。

微笑とともにうなずき、バイロン卿は片手で塔の入り口を指し示したのだ。

「お入りください。すでに宴うたげは始まっておりますゆえ」

ホールの天井は高く、厳かな光に満ちていた。

くるぶしまで沈みそうな絨じゅう毯たんが敷かれており、冷たい 空気が心地よい。笑いさざめく人々の影は、どこかしら幻想の風景 を思わせる。実際、集まっている者たちのほとんどが魔術師なのだ から、これは夢の世界以外の何物でもなかった。

夢よ、躍れ。

汝、夜の言葉を紡ぐ者なれば。

「トリム。自己判断を許可する」

「イエス、マスター」

短く囁ささやくと、無機質な声が応えた。

先んじてスーツケースから取り出していた水銀は、すでに私の後ろでメイドの形をとっていたが、念のため自律行動ができるように命令コマンドを下しておく。

すると、広間を見やった我が魔術礼装は、澄ました顔で口にした ものであった。

「.....まるでそびえたつクソだI didn't know they stacked shit that high!」

妙に胸をはった姿で言うものだから、思わず殴りかけてしまった。うん、間違いなくフラットが教え込んだB級映画か何かだろう。他人が聞いてなかったのは幸いだが、後でフラット殺す。

突然の発言に、隣のグレイが面食らっていたが、フードを深く下ろして用心深く周囲を観察し始める。こちらはこちらで心配していたのだが、まあトリムマウのようなトンデモ発言が出なそうな分、少しは安心できるというものだ。

華やかな音楽が聞こえた。

遠く、遠く、遥はるかな海を思わせる響きであった。

吹き鳴らされるトランペットは高らかに。繊細なメロディラインを紡ぐピアノに、底流を支えているコントラバスの雄々しさ。優美な音楽は、タップダンスでも踊り出したくなりそうな軽妙さを兼ね備えていた。

「バイロン卿の趣味はジャズか。てっきりクラシックかと思ったが」

それも一九三○年代。イン・ザ・ムード。

カーネギーホールでの演奏も伝説的なナンバーだが、兄が時折ア パートの方で古めかしいレコードを聴く習慣がなければ、私も知る ことはなかったろう。アナログにもほどがある黒い円盤へゆっくり と針を落とす兄の姿は、私もわりと気に入っていた。

ただ今回の場合、注目すべきはその楽団だった。

(.....絡から繰くり仕掛けの楽団か)

トランペットもピアノもコントラバスも、最奥のあたりで人間の半分ほどの背丈しかない絡繰り人形たちが演奏していたのである。こうした創造科の側面は現代科学と似ているが、決定的に異なるのは、彼らがマイクロチップや電源の代わりに、月光にさらした絹糸や幻想種の骨を組み込んだ歯車で動いていることだった。人体模造の概念が衰退しきった今、これほどの精度で人形を創造できる魔術師は数少ないだろう。

彼らが音楽を再生するだけの機械ではなく、演奏に特化した新たな『生物』である証拠に、絡繰り人形たちは汗を掻き、誇らしげに音楽を奏で続けている。

Г......

ふと、その様子が自分たちと重なった。

いや。

実際、この自動人形たちと自分たちで、一体何が違うだろう。

私たちもまた、何百年もかけて自分たちを改造し、神秘に特化してしまった生物なのだから。俗世を離れ超人として叡えい智ちを得たつもりでいても、やはり誰かのつくりあげた舞台で、決まりきった歯車を回し続けていることには変わらないのではあるまいか。

(.....いかんね。あの兄といると、よけいな思考が伝染する)

小さくかぶりを振って、ぼんやりと周囲へ視線をやる。

広間に、多くの人々が集まっていた。

おおよそ数十人ほどで、この全員が魔術師なのだった。あるいは 緋ひ色のワインを手に取り、あるいは華やかな音楽を堪能し、穏や かに談笑している。

.....少なくとも、一見では。

「.....ライネスさん」

と、こちらの裾をつままれた。

「何かな? グレイ」

「いえ、どうするんですか。会場にお知り合いでも?」

「いいや」

ひそひそと囁きかけてきた少女に、私は淡く笑った。

「まずは見ケンさ」

と、気配を殺しつつ、会場の広間をゆっくり巡っていく。

それとなく漏れ聞こえる会話や単語を検索しつつ、人物の地位や 立ち位置もふまえた関係図を頭で組み立てていった。

「……あっちがトランベリオ、トランベリオ、メルアステア、トランベリオ、メルアステア、トランベリオ、メルアステア、トランベリオ……うわあ、さすがトランベリオ派の社交会。バルトメロイ派の系列ほぼゼロだよ。四面楚歌にもほどがある」

中国の故事を思い出しつつ、私は嘆息する。

魔術師の社交会の性質からして、まず派閥の割合を確かめるのが 先決なのだ。

初めての地域の会合だけに、おおよそは知らない顔なのだが、なにしろ社交会には幼少から慣らされている。身なりや立ち居振る舞いを見ていれば、おおざっぱな派閥は区別できる程度の自信があった。ああ、ちなみにこの点でも兄は失格である。新世代ニューエイジからの成り上がりの悲しさで、魔術師の立場の機微には大変疎いのであった。

「……ふうむ。総計すると、トランベリオ 6、バルトメロイ 1、メルアステア 3 ぐらいの比率か」

「派閥の、名前ですか?」

「まあね。民主主義の代表トランベリオに、貴族主義の代表バルトメロイ。どうでもいいから研究させろなメルアステアってところさ」

グレイの質問に、なるだけ平易に私は答えた。

──今のように、時計塔の派閥はおおよそ三つに分かれる。

バルトメロイを筆頭として、エルメロイも属している貴族主 義派閥。

トランベリオを中心に、バリュエレータも含む民主主義派閥。

メルアステアを代表とする中立派閥。

ざっくり片づけてしまえば、時計塔を運営するのはより優れた貴族の血統に任せるべきか、血統はイマイチでももっと多くの才能ある若者から募るべきかということだ。

もっとも、結局は魔術師のことだから、貴族だの民主だの言って も大きな違いがあるわけではない。魔術師というふるいにかけられ た者たちの中から、さらにもう一度ふるいにかけることをよしとす るかどうかである。

「……なんとなく、分かりました。エルメロイは貴族主義派なんですね」

「一応ね。だけどまあ、ここも近年ややこしくなってきてるのさ」

エルメロイが貴族主義なのは、我が義兄──つまり先代のロード・ エルメロイが亡くなる以前は、時計塔でも指折りの大貴族だったこ とに起因している。だが、大変残念なことにそれほどの権威も財力 も今のエルメロイには残っていないのだ。

むしろ、新世代ニューエイジを率いてエルメロイ教室を開いている現在、実質的にはトランベリオたちの民主主義に近かったりする。くわえてエルメロイ派閥はともかく我が兄自体の振る舞いは保守にも革新にも阿おもねっておらず、貴族主義首しゅ魁かいであるバルトメロイからすれば、お前うちの派閥で飯食ってるんじゃないの何考えてんの、な状態というわけだ。

あ、もちろん、うっかり本当に転べばマストダイである。

十二君主どころか、三大貴族でも最大とされるバルトメロイは伊 だ達てではない。隠然とどころか公然とエルメロイは握りつぶされ ることだろう。

「なにせ、法政科を握ってるバルトメロイ相手じゃ、魔術はもちろ ん権力的にも一切の勝ち目がないからね」

「あれ? バルトメロイは法政科なんですか」

グレイがことりと首を傾かしげた。

「ん。何か不思議かな?」

「いえ……十二の君主ロードと聞いていたので、てっきりメインである十二学科をひとつずつ押さえているのかと……。法政科は十二の学科の外だと聞いていましたし……」

なるほど、そういう理解をしていたのか。

というよりも普通であるとは思う。時計塔に通っている内に覚え そうなものではあるのだが、おそらく交流の少なさによるものだろ う。

「そこはちょっと事情があってね。現代魔術科は確かにメインの学科だが、君主ロードがついたのはごく最近のことで.....」

話しかけたところで、私の視線が横に流れた。

険悪な話し声が、耳に届いたのだ。

「ほう。君らはそんな薄い血統で、魔術の誇り高い歴史に何かが残 せるなどと妄想を抱いているのか」

「あなたがたは、ここまで魔術が衰退した今も、自分たちだけで魔術を維持できると思っているのか。いつになったらそれが取り返せぬ夢であると目覚めるのか」

「……ほら、早速だ」

素知らぬ顔で、私は呟く。

老ろう獪かいな魔術師ならばもう少し表沙汰にしない形でやりあうのだろうが、若い者にはこらえていられまい。各自が酒気を帯びているならなおさらだ。今日の社交会の集まり方だと、年齢層はいささか若い方に偏っていた。

「いまの時計塔が新世代ニューエイジなしに持つとでも?」

「ははは。もともと時計塔は貴族ロードのためにつくられたもの だ。そのおこぼれを与えられたからといって、何事かを成したつも りだったのかね?」

ふたりを中心に、それぞれの派閥がゆるりと緊張をみなぎらせた。

エルメロイ教室の馬鹿どもみたいにすぐさま魔術合戦となることはないが、険悪な空気はすぐさま会場に広がっていき―

「ったたたた、しゅ、しゅいましぇん!」

その間を割り込むようにして、と、と、と、と千鳥足の人影が横切ったのだ。

どちらの派閥も予想してなかった割り込みに、魔術師たちが瞬き したところで、酔っぱらったらしい若者は大きく手を振って回転し た。

ワイングラスが放物線を描き、宙を舞った。

「あぃ

私の声で、小さくグレイが呟き。

どたん、と若者が大の字に倒れたのだ。

うっぷうと酒臭い吐息がこぼれ、ちょっとたまらないほどの体臭が周囲を陵りょう辱じょくした。宴が始まって間もないと思われるのに、一体どれほど吞みまくったのか。

「しゅ、しゅ、しゅいません。このお詫わびは―」

ろれつの回らない口調で芋虫みたいに這いずり、うっぷうとまた 口元を押さえる。

あまりのことに、周囲もどっちらけとなったらしい。互いを一いち瞥べつしつつ、深々とため息をついて魔術師たちが散っていく。まるで世界最悪の汚物から遠ざかるような有様で、取り残された若者がひとりで気持ち悪そうに腹部を押さえていた。

「.....ほう」

と、私は小さく感心の吐息をついた。

「あの」

後ろから、声がする。

さきほど宙を舞ったワイングラスを、グレイが受け止めていたの だ。 ー滴余さず─かどうかは知らないが、中身もそのまま残っている。たとえアッドのことがなくても、この少女の反射神経も並大抵のものではなかった。

「ちょうどいい」

そのグラスを譲り受け、ふらふらと立ち上がった若者へと差し出 した。

「どうぞ」

「す、すいません」

青ざめた顔色と震える指で、若者がグラスを取り落とさないよう にぎゅっとつかむ。

興ざめとなった魔術師たちはすでに散り散りになっており、グラスを渡しながら、私は彼の耳元にそっと囁いた。

「いやいや。──静いを止めるにはなかなか効果的な手段だったよ」 と言うと、若者はあう、と呻きをあげた。

「……わざとらしかったですか?」

「いや問題ないさ。だいたいの魔術師はプライドが高いからね。 みっともない自分をさらけだすなんて発想はしない。確かに大根役 者だったが、それでも問題ない舞台だってある」

つい、唇をほころばせてしまう。

方法論の魔術師らしくなさが、どこぞの誰かと似ていたせいかも しれない。

「それに、酔ってるのは本当だろう? どうやったのかな?」

「……これ、一瞬で酒に酔える薬でして」

スーツの懐から、若者が小さな丸薬を取り出した。

「で、こちらは酔い止め」

くるりと裏返した人差し指と中指の間には、別の丸薬を挟んでい

た。

先のワインと一緒にその丸薬を飲み込むと、おおよそ十秒足らず で、毛穴という毛穴から発散していた酒の臭いが止まったのだ。

「……大したものだ」

掛け値なしに口にすると、若者ははにかんで頰を搔いた。

「一応、薬師なんです」

「ほう。では植ユ物ミ科ナの?」

「いえ」

けほ……と咳を袖で押さえて、青白い顔の若者はにこりと笑った。

「伝承科ブリシサンです。マイオ・ブリシサン・クライネルスと言います」

「ほう。ブリシサンの」

名門だった。

バルトメロイのような権力こそないが、歴史と研究実績ではひけをとらない家門であり、典型的な中立派である。伝承というだけあって多様な魔術性質ではほかに抜きんでており、時計塔でも最も希少な文献を残しているのは、この学科であろうと目されている。

ミドルネームにブリシサンが入っているということは、家系の一員ないし庇護下にあるということだ。おそらくは分家だろうが、ブリシサンの人間が来ているというだけでも、この双貌塔のお披露目の注目度が窺うかがわれる。

(……それとも、こちらも冠位グランド目当てか?)

と、考えたときだった。

若者が、こちらの背後をまじまじと見つめていたのである。

「その、魔術礼装―ひょっとしてエルメロイの?」

指さしているのがトリムマウだと気づいて、私も意外な気分になった。

「おや、ご存じで」

「は、はい!」

勢い込んで、マイオと名乗った若者がうなずいたのだ。

「その名も高きロード・エルメロイが完成させた月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラム! 『流体操作』の機能美! ああ、まさかこんなところで出会えるなんて! す、すいません! 少しだけ触らせてもらってもかまわないですか!」

「.....や、それはかまわないが」

言うが早いか、マイオは早くも水銀メイドの身体に指を滑らせ、 わああああると玩具コーナーを前にした子供みたいな声をあげはじ めた。

「ああ……すごい。衰退した人体模造の概念じゃなくて、あくまで 『流体操作』と『人格付与』の結果、最もふさわしい形態をとらせ ているだけなんだ。器が中身に沿うのは逆説的だけど魔術として正 しい。魔力自体も最低限で維持できるように、全体を循環する仕組 みになっている。これ、あなたの仕事ですか?」

「……あ、ああ。兄のアドバイスは受けたが」

「兄! じゃあ、あなたは─」

言いかけたところで、新たな声が降り落ちた。

「マイオ」

優しい声だった。

「──研究熱心なのはいいけれど、他家の魔術礼装に触れるときはもう少し気をつけた方がいいわ。殺されても文句言えないわよ?」

その言葉に、マイオが振り返ったのである。

眼鏡をかけた女性だった。

柔和な雰囲気で、どうやら東洋人らしかった。日本人だろうかと とりとめなく思う。かの極東地域では別の組織と魔術が根を張って いるのだが、同じ島国ということもあってか、妙に時計塔でも姿を 見ることが多かった。

「や、すいません。ミス・アオザキ」

「いいえ? さっきの仲裁はなかなかの手際だったと思うわよ」

それから、こちらを振り向いたのだ。

「はじめまして。蒼あお崎ざき橙とう子こと言います」

女は、くすんだ赤色の髪をしていた。

それこそ東洋人には珍しい色だったが、染めたのではないだろうと思った。自分の瞳とは違うが、この女の本質に寄り添っているような色だったからだ。

ただ、それはけして口にしてはならないような気もした。

いや。

それ以前に、女の名前に私は戦慄していたのだから。

「……蒼崎……橙子……?!」

声はみっともなく掠かすれた。

おそらく、私の表情も記録には残したくない有様だったに違いない。

「あなたは、封印指定の……」

「封印指定?」

小首を傾げたグレイをよそに、私はカカシのごとく立ち尽くしていた。

それは特別な才を持った魔術師に与えられる称号であり、協会から下される勅令である。

単なる学問や研けん鑽さんでは修得できない魔術。その血、その

体質のみが可能とする一代限りの魔術保有者を惜しんで、協会が手ずから永久に保存してしまおうとする令状。だからこそ封印指定とは、魔術師にとって最大の栄誉であり、致命的な烙らく印いんでもあった。

なにしろ保存されてしまっては研究が続けられない。封印指定されるほどの魔術師なら、まず自分の命など惜しむことはないが、逆に研究を手放すこともありえない。だから、封印指定された魔術師の多くは野に下り、ひっそりと身を隠すか、自らの領地に立てこもるかだった。

この、蒼崎橙子の場合は─

「封印指定でしたら、数年前に解かれてますから」

柔らかく微笑んで、女が囁いたのだ。

まさしくそれは私が絶叫しかねないタイミングで、認識から衝撃、行動に移る時間までを見越していたとしか思えなかった。もしも女が暗殺者であったなら、こちらの首を掻ききるのもたやすかったろう。

大きく、息を吞み込む。

人前にあるまじき深呼吸で、やっと正気を取り戻した。

「……そうか、あなたがそのひとりだったか」

と、口にする。

本来、一度下された封印指定は絶対だ。

だが数年前、封印指定を発令する時計塔最古の教室に大きな異変があったのだ。

秘ひ儀ぎ裁さい示じ局きょく・天文台カリオン。世紀末にふさわしい大事変は、時計塔全体にも凄まじい──それこそ我が義兄であったロード・エルメロイが亡くなったとき以上の──衝撃を引き起こし、その際何人かの封印指定が解かれたと聞いていた。

まさしく、目の前の女がその当事者であったか。

そして、その事実は自分が聞いてきたもうひとつの噂をも裏付け した。

「一グレイ。この方が、話していた冠位グランドだ」

びくん、と灰色の少女が肩を震わせた。

そう。

彼女こそが封印指定を受けた、幻の冠位グランドなのだ。

まずはゆっくり戦場を拝見と思っていたら、徘はい徊かいしていたラスボスといきなりエンカウントという状況である。我が兄であれば「やってられるかこのクソゲー!」とコントローラーを放り投げるに違いない。

「はじめまして。ライネス・エルメロイ・アーチゾルテと言います」

震しん撼かんを抑え込み慇懃に一礼した私へ、橙子は淡く微笑した。

「存じてますわ。エルメロイの先代には、昔ちょっとした仕事をさせてもらいましたものですから」

「先代……? ケイネス・エルメロイ・アーチボルトに?」

「ええ」

細かいところはまた、とばかりに女は唇に人差し指をあてて見せた。

そういえば、この女は実際のところ何歳なのだろう。外見からは 二十代半ばとしか思われないが、封印指定を受けた時期を考えれ ば、いささかのズレが生じているはずだ。無論魔術師の外見年齢な どさしてあてになるものでもないし、冠位グランドかつ封印指定な どという規格外には時間の制約など遠い話だろう。

ただ、先代の名前が出たところから、少しだけ惜しく思った。

我が兄に出会わせれば、どんな苦渋の顔が見られただろうと思ったからだ。

「あら」

と、橙子がグレイの方に視線を向けた。

^г.....? ₁

「あなた、面白い貌かおをしてるのね?」

まじまじと見つめ、女がその手を伸ばしかけたときだった。

広間の奥から歓声があがったのだ。

「一どうやら、黄金姫の登場ね」

橙子も、振り返った。

奥は、二階部分に続く螺旋階段になっていた。その二階部分のバルコニーのように張り出した部分に、双子らしきメイドが佇んでいたのである。互いに生き写しともいうべき姿で、整った容貌はともすればこちらが黄金姫、白銀姫であるかと勘違いするほどだった。

スカートをつまみ、お辞儀カーテシーをしてから、ふたりのメイドは背後へ呼びかけた。

「どうぞ、ディアドラ様」

「どうぞ、エステラ様」

「お入りください」

最後を、ふたりのメイドは同時に言った。

バルコニーの陰から、ゆっくりと紫のドレスが分離していった。

 $\Gamma \square \square \square \square$



時間が、引きちぎれた。

ありとあらゆる感覚が、この刹那で失われた。いいや、刹那なん ていう陳腐な語彙ごと弾け飛んだ。

こちらを見下ろす瞳は神話の宝石のごとく。理想的な鼻び梁りょうは天上の彫刻家が魂を賭して削り上げたに違いない。閉ざされた楽園の花弁を思わせる唇には、けして失われない青春の輝きが宿っていた。そんなひとつずつの表現が馬鹿らしくなるほどに、その女はその女であるだけで■しかった。

すべての形容詞を失った果ての、何か。

仮にも魔術師たるもの、おいそれと口にしてはならぬ──「 としか表現できない結末の地点。

「黄金姫を襲名いたしました、ディアドラ・バリュエレータ・イゼルマと申します」

その声を認識しても、居並ぶ魔術師たちが正気に戻るまではまだ 数分が必要だった。

何人かの魔術師が手に持ったグラスを取り落とし、自らの靴に葡萄色の染みをつくったことにさえ気づかなかった。完全に呼吸を止めてしまい酸欠に陥るまで立ち尽くす者もいれば、その場に跪ひざまずき滂ぼう沱だと涙する者すらいた。

これが魔術による精神攻撃ならば、誰も歯牙にもかけなかったろう。ここに集まった者はそれなり以上の魔術師であり、魔術師たる者まず自分の精神を鎧よろうことこそが最初に教えられる事項だったからだ。ただただ純粋なる■であったからこそ、彼らの培ってきた精神防衛の術式は紙よりたやすく引き破られた。

恥ずかしながら、私も例外ではなかった。

自分の意識が断絶していたことにさえ、気づくことはなかった。

「白銀姫を襲名いたしました、エステラ・バリュエレータ・イゼルマです」

正直、ふたり目はもはや認識の外であった。

ヴェールで顔を隠していたのもあるが、とっくに私たちの認識能力はパンクしていた。

周囲を見回せば、ほとんどの者はいまだ意識を回復していなかった。主しゅの到来を目視した信者ならば同じような反応になるかもしれない。何人かが目を押さえているのは、この景色を最後に眼球を潰してしまいたいという衝動に駆られたからだろう。その衝動を抑え込めたのも、もう一度同じ■を見られるのではという浅ましい欲望からだろう。

「……なるほど」

隣からあがった声で、私はやっと現状に復帰した。

「……あれが黄金姫か。噂は聞いていたがよもやあそこまで至るとは、イゼルマの歴史を賞賛せざるを得ないな」

と、橙子が囁いたのだった。

いささかならず変化した口ぶりに、一瞬疑念が掠めて、女の顔に 変化が生じていることに気づいた。

眼鏡を手に持って、橙子は目を伏せていたのである。

「ああ。私も何分ショックだったのでね。ちょっと切り替えさせて もらった」

「切り替え?」

「少し、性格をね?」

眼鏡をかけなおして、橙子が会釈する。

そのときには、もうさきほどの雰囲気を取り戻していた。魔術師

には研究のため意図的な人格変異を起こしている者も多い。特定の 技術の習得に際して有利な人格というものは存在するからだ。そう した一例だろうと、私もそれ以上は気にしなかった。

「すいません。少し離席しますね。いい? マイオ」

「あ、あ.....はい」

いまだ周囲が茫ぼう然ぜんとしている内に、橙子と薬師のマイオが離れていった。

私もうっかり黄金姫の方を見ないようにしつつ、ひとまずグレイ を揺さぶろうとしたときだった。

乾いた拍手が、会場にこだましたのだ。

「──お見事、バイロン卿」

皺深い手を打ち合わせているのは、おそらく七十は超えていよう 老女だった。

狼おおかみのごとく気高い銀髪。緑の洒落たドレスに身を包み、 びしりと背筋を正して、その老女が心地よい拍手を送ったのだ。毅 き然ぜんとした態度とあいまって、それは自失していた魔術師たち さえも立ち直らせる清涼なる響きであった。

「ロード・バリュエレータ」

誰かが言った。

その名とともに、黄金姫と白銀姫が、再びふたりのメイドに連れられてバルコニーの陰へと舞い戻る。時間よ止まれと念じていた魔術師たちから呻きが生じた。一体何人がこのまま死んでしまいたいと願ったことか。

音楽も新たにかかる。ムーンライト・セレナーデ。

それから、踵を返した老女が、こちらに歩いてきたのである。

「先さっきまで、オレの馬鹿弟子がいたような気がしたんだが」

意味ありげな微笑を浮かべ、ウィスキーのグラスをくるくると楽

しげに回す。

私も、この相手には居住まいを正さずにいられなかった。

「ご無沙汰しております。ロード・バリュエレータ。まさか、あな たまでいらっしゃっていたとは」

「おいおい。分家の大事な日だ。オレがいくら多忙でも来ないわけ にはいくまいよ」

くくっ、と軽く笑う。

皺だらけの顔をますます皺くちゃにして、これだけ生命力に満ちあふれている老女も珍しい。一口でウィスキーを飲み干し、ちょうどやってきたホムンクルスのトレイから新たなグラスを受け取って、またくるくると回し始める。

「……ロード・バリュエレータ? じゃあ創造科バリュエの」 グレイが、ぼそぼそと尋ねる。

そうか。兄以外で、実際に出会うのは初めてだったかもしれない。

「ああ。我が兄と同じ──時計塔における十二人のひとり。創造科バ リュエの君主ロードだ」

「──君がトリムマウ以外の従者を伴っているのは久しぶりに見る な」

興味深げに、老女が口にする。

にんまりと笑ったまま、

「イノライ・バリュエレータ・アトロホルムだ。よろしく頼む」

と、右手を持ち上げたのだ。

おどおどと、灰色の少女もその手を握った。

「……墓はか守もりのグレイです」

ちょこんと、フードを上下させて会釈する。

正式な礼儀にはかなってないが、イノライは気にする風もなく、 私が説明を加えることとなった。

「兄の内弟子でね」

「ほう。それは有能そうだ」

「え、えっと、その.....ですが、魔術師というわけでは」

グレイが言い訳をしはじめるが、そこの説明をするとさらにややこしくなるので、あえて私は無視しておいた。幸い、イノライの方もつっこまずにおいてくれて、ひとつ大きくうなずいたきりだった。

すうと視線をこちらに戻して、

「で、どうだ? そろそろ派閥を変える気分にはなったか?」

にんまりと笑った老女に、私は心臓を摑つかまれた気分になった。

さきほども語ったが、エルメロイはまがりなりにも貴族主義の一派である。バリュエレータは民主主義のトランベリオ派であり、これに乗っかるようならエルメロイなど瞬時に握りつぶされる。

「や、勘弁していただけますか。弱小としては生き延びるだけで精 一杯なんで」

「ふむ。誘うぐらいだから、こちらでエルメロイを庇護する気もあるぞ。かのロード・エルメロイII世に優先的に教きょう鞭べんをとっていただけるなら、教室のひとつふたつは譲ってもいいぐらいだが」

「つ……!」

思わず、口ごもってしまった。

破格といっていい条件だ。確かに教室の利権はそれほど大きいものではないが、バリュエレータの抱えてる教室は時計塔でも指折りの霊地ばかりであり、いずれを譲られたとしても大いに箔はくがつくだろう。

「……あいにく、それほどの霊地を扱う器がありませんので」

と返すのに、数秒ほどの時間が必要になった。

「それは残念」

「お誘い感謝します。ですが、我が兄のどこがそんなに気に入って るんです?」

「それは君に言うべき言葉じゃないかな? もちろんロード・エル メロイII世の手腕には大いに期待しているが、もともとエルメロイ 教室の様子を見て、彼を君主ロードに抜擢したのは君だろう」

「半分は成り行きですよ」

イノライの台詞せりふに、私が微苦笑する。

これだから事情通はやりにくい。貴族主義の多くの連中みたい に、侮ってくれていた方がずっとマシなのだが。

そこで、

「.....あの」

と、遠慮しいしい声があがったのだ。

相手がグレイだと知って、イノライは先を促した。

「ん、なんだね?」

「……どうして、バリュエレータは貴族主義じゃないんですか?」

「――っ」

グレイの質問に、ぽかんと私は口を開いてしまった。

ある意味で、トリムマウ以上に空気を読まない──あたかも傷口に 指を突き込むかのような問いだった。

「グ、グレイ……」

「創造科バリュエの魔術師はほとんどが芸術家だと聞きました。芸術は貴族に寄り添うものじゃないんですか?」

実に、素朴な質問ではある。素朴で致命的な、毒塗りの竹たけ槍やりにも似た問いかけだ。丹念に積み重ねたブロックの、最もやばいところを一撃で突き崩しかねない。

対して、イノライは快笑したのだ。

「いや、いいな君! そんな質問をオレにしてきたのは数十年ぶりだ!」

快活な笑い声のあまり、何人かの魔術師がこちらを振り返るぐら いだった。

もっとも、それが時計塔でも名だたる女傑──ロード・バリュエレータとくれば、誰も視線を向けたままではいられなかった。

そそくさと顔をそむけた魔術師たちを意に介さず、イノライは口を開く。

「芸術は、まずその時代の人間の心を震わせるためのものだからさ」

「その時代の人間、ですか?」

ことりと首を傾げたグレイに、老女は鷹揚にうなずいた。

「そうとも。よく、真の芸術は時代の洗礼を受けたものだとか言うがね。それはもはや芸術じゃない。歴史と言うんだよ。無論、歴史は歴史で頭を垂れるべき価値があるし、貴族主義の連中はありがたがってるようだが、オレたちの追い求めているものじゃない」

老女の目が細められた。

価値という言葉がけして現実や歴史だけに依拠するものではなく、遥か彼方かなたの理想を見つめているのだと、はっきり分かる口ぶりであった。

「美しいということは素晴らしい。たとえほんの瞬きであっても、存在したというだけで価値がある。オレたちはただこの刹那を走り抜ける以外にやることなどありはしない。──同様に、今の時代は今の人間が過去の血統になどかかわらずに運営すべきだ、というのがオレたちの信念なのさ」

朗々たる演説は、確かに一派を率いる筆頭魔術師としての誇りに満ちていた。

「……なんとなくですが、分かりました」

グレイがうなずく。

なんとなくという言葉面こそあやふやだったが、真面目に考え込んでいたことだけはその表情から伝わった。

「おお。嬉しいな。君もエルメロイII世の内弟子だというなら、いつでもうちを訪ねてきてくれてかまわないぞ」

イノライも陽気に言ってくるのだが、こちらの目も真剣だ。

この老女の性質からすれば、どこから搦からめ手でやってくるか知れたものではなく、私も改めて緊張せざるを得なかった。

(.....ああ、嫌だ嫌だ)

さしもの私も、自分が巻き込まれるとあっては、兄の苦悩を笑っていられない。

ほぞを嚙んでいるところで、別の人影が差した。

杖を突きつつ、足早にやってきたのはさきほどの紳士であった。

バイロン・バリュエレータ・イゼルマ。

「こちらにおられましたか、イノライ様」

「おや、バイロン卿。楽しませてもらってるよ」

ぐい、とまた一口でウィスキーを飲み干した老女に、紳士は顔を 近づけ囁いたのだ。

「少し、お話ししたいことが」

「ほう」

続く耳打ちに、イノライが淡く表情を動かした。

それから、

「では、ひとまず失礼を。──また会おう。エルメロイの姫に内弟子」

いまだ白い歯を剝むき出して、老女が笑ったのであった。

結局、それからはいつも通りの挨拶回りをこなして社交会が終わった。

てっきり黄金姫、白銀姫も広間に下りてきての紹介があるかと思われたが、そういう行事はないままだった。もっとも、あれほどの ■に直面すれば、それこそ居合わせた魔術師たちが正気でいられなかったかもしれない。

多くの魔術師たちはそのまま帰路につき、財政的にも明日の電車 を待つ必要のある私は、向かいの陽の塔に部屋を借りていた。

どうやら月の塔が家人、陽の塔が客人の場所という割り振りらしい。

さすがに上質のベッドであり、横たわるだけで無重力空間の気分にさせられる。逆に、身体の内側にこびりついた重さを自覚させられて、思わず大きく息をついてしまった。

「.....やれやれ」

そっと瞼に触れる。

すっかり、眼球が熱くなっていた。この体質があるために社交会はあまり得意ではなかった。魔術師ごとに魔力の波長は違うため、いちいちチャンネルを合わせていた眼球が軽い熱暴走のような状態に陥っているのだ。

このあたり、私も魔術師としてあまり優秀でない証拠だと思うのだけど、我が兄に言わせると歳を取れば落ち着くタイプの体質らしい。個人的には、魔眼持ちというだけで、ほんの少し羨ましそうにしてた兄の表情だけがご馳走である。

(.....にしても)

顔全体を覆い、ため息をつく。

「冠位グランドの上に、君主ロードまで登場とは」

さすがにイベントが多すぎた。

眼球だけでなく、脳の方も熱暴走しそうだ。おおよその状況は想定していたつもりだったが、いささか甘すぎた。いやロード・バリュエレータが出てくるのはまだしも、よりによって噂されていた冠位グランドが蒼崎橙子とは。

考えるべきことが山積みで、どこから整理したものかもさっぱり だ。

「……ですけど、襲われるようなことはなくて、よかったです」 ぽつり、と隣から声がこぼれた。

こちらはまだベッドに横たわらず、ソファに座っているグレイだった。

長いこと気を張っていたせいか、まだ落ち着かないようにそわそわしている。組み合わされた指がちまちま動いているのが、ブッディズムの結印か、アフリカのあやとりのようではあった。そういえば、兄の講義ではマオリのあやとりは神話の語り部によるものだとか、イヌイットのあやとりには呪術との関連性も見られるとか言ってたな……うん、こんな連想してる段階で、相当疲れている証拠ではある。

要は、脳をまともに制御できてないということだ。

「ちょっかいかけたそうなヤツらはちょこまかいたがね。だいたいは、今回のお披露目で毒気を抜かれたんだろう。あそこまで来ると、一種の兵器みたいなもんだ」

「……どうして、あんなに美しい人をつくったんでしょう」

深く、グレイが言った。

朴ぼく訥とつなこの少女にしてからが感銘を受けるだけの衝撃が、あの黄金姫にはあったらしい。いや、本当によく分かるけどね。

「兄とも話していたが、美しさが魔術の領域だからさ」

目薬をさしてから、私は答えた。

ほんのかすかに、熱が和らいでいくのが分かる。目が落ち着くと、次第に気持ちも落ち着いてくるあたり、我が身体ながら現金なものだ。まあ魔術師とはいえ、セルフコントロールにはそれなりの時間や手順が必要なのだ。

「美しさが、ですか?」

「そうさ。兄は数学的な調和が魔法円や工房に必要だからと話していたが、確かイゼルマというかバリュエレータはもっと根幹的な部分で、美しさを評価してるんだよ」

こちらも、半ば忘れかけていたようなことを、あの衝撃で思い起こされた。

「魔術師とは何を目指すものか知っているかな?」

一瞬、きょとんとしてから、グレイは悩みつつ口を開く。

「ええと……授業で聞きました。根源の渦……でしたっけ」

「ああ。根源の渦とも、単に根源とも、はたまた言及などできないものとして「」と称されることもあるね。すべての原因であり、すべての現象・事象を流れさせたゼロ。うん、こうして口にしてみると言葉は本当によくないな。ゼロも根源にも余分な色がついていて、せっかくの意味を閉ざしてしまう」

言葉を選びつつ、私は目を細める。

「なんにせよ、魔術というのは結局そこに至るためのおまけだよ。 一ああ、もちろん超常に触れることも、超人に至ることも、それ自 体が悦楽さ。私たちは弱いからこそそんな逸脱を求めてしまう。だ けど、究極の目標はやはりそこじゃないんだ」

ひとつずつ、私は言葉を重ねていった。

現代の魔術師となれば、おおよそは根源になど辿り着けぬと分かっている。そもそも神代から魔術は衰える一方で、過去に向けて逆走しているような集団が報いられるはずもない。おそらく最後になるだろうと言われた五人目の魔法使いも極東に現れてしまった今、そこに至るための門はほぼ閉ざされたも同然だ。

だけど、それでも諦められぬのだ。

諦められるようなら、最初から魔術師などになりはしない。

「バリュエレータはそこに至るために、美という道を選んだ家門だ」

「.....道」

「うん。これは聞いたことがあるだろう。もともと美的感覚とは人間にとって生き延びるための機能だったんだ」

こめかみに指をあて、もっと以前に受けた兄の講義を思い出す。

あれでやはり講師として有能なのは確かで、最初の糸口さえ見つかると、後はするすると講義の内容が浮揚してきた。

「たとえば毒を避けるために嗅覚・味覚は発達してきたわけだし、 危険を避けるために視覚や聴覚は鍛えられてきた。だけどね、こう いう五感とは別に、我々が人類として思考を確立する以前から、 『快をもたらす』感覚としての美は存在していた」

たとえば、フランスはラスコー洞窟に描かれた壁画。

たとえば、ウィレンドルフ遺跡で発掘された旧石器時代の裸像たち。

原始美術とも言われるこれらの作品群は、人類と美術とが切り離せない関係にあることを明示している。

「美の作用について、魔術はこう考えるそうだ。──美しいものを見ることは、自らを美しくすることだと」

「……自分が、美しくなるですか?」

さすがに理解を越えたらしく、グレイが灰色の眉を可憐に寄せる。

「ふふふ。おかしな話だろう。だけど、美術や文芸は魂の食事だなんて言いぐさなら、そこらの雑誌でも見かけるんじゃないか?」

「.....あ、はい。それなら」

「根本的には同じことらしくてね。兄の言葉によれば、美術とは一種の共感呪術らしい。その美術を鑑賞することによって、本人の魂や霊性が浄化される感覚──これこそが我々の感じる美しさの正体なんだとさ」

私の言葉に小動物みたいにうなずき、少し考えてからグレイが口 を開いた。

「じゃあ、もしも究極の美があるとしたら……」

「我々の魂を一気に高次元に引き上げるかもしれない、ということだ。どうかな? ちょっとマシな人間になった気はするかな? まあグレイはもともと綺麗な顔してるか」

「一、拙の顔のことは、やめてください」

少しだけ、妙な間があった。地雷だったかもしれない。

こういうのは引っ張ると面倒なので、さっさと流すことにしよう。

「……ま、実のところ、こうして美についての話をひとくさり始めてしまうということも、まさしく彼女という魔術の作用なんだろうさ」

ほとほと感心してしまう。

たとえばそれは、一冊の本、一篇ぺんの詩に胸を打たれて人生を変えられてしまうようなものだ。よほどの名作と波長のあった読者の間でさえ、滅多に起こりえないその現象を、もしも必ず引き出せるのならば―それは間違いなくひとつの魔術だろう。あるいは、魔法の域と形容しても過言ではないほどに。

「.....はあ」

深く、グレイがため息をついた。

「創造科バリュエってみんなそうなんですか? なんだか、とても 遠い旅をしてるみたいです」

「まあ、イゼルマ家を含むバリュエレータは、時計塔でも最も由緒 正しい家のひとつだからね。なにしろ、三大貴族のひとつにあたる ぐらいだ」

バルトメロイ。

トランベリオ。

バリュエレータ。

この三つをさして、時計塔では三大貴族と呼ぶ。

少し脱線するが、時計塔においてロードという名称は大と小の意味にわかれている。大きな意味を持つ十二の君主ロードはもはや説明不要だろう。対して、小さい方の意味──貴族ロードの意味で呼ぶ場合、多くは三大貴族の縁者をさすぐらいに、この三家は特別視されているのだった。

もちろん正式なものではない。

君主制度が固まるより以前の、慣例的なものである。ただし、古いものにはひたすら敬意を払うのが魔術師の本能でもあるので、こうした慣例を背景にした権力抗争や嫌がらせは実に根気強く続いている。うん、魔術師って早く滅びた方がいいんじゃないだろうか。

ちなみに、ロード・エルメロイも本来そうした意味を含んでいた のだが、今となっては遠い過去の物語だ。

「……また、頭が破裂しそうです」

こめかみのあたりを押さえて、グレイが告白する。

「ふふ、ちょっと詰め込みすぎたか」

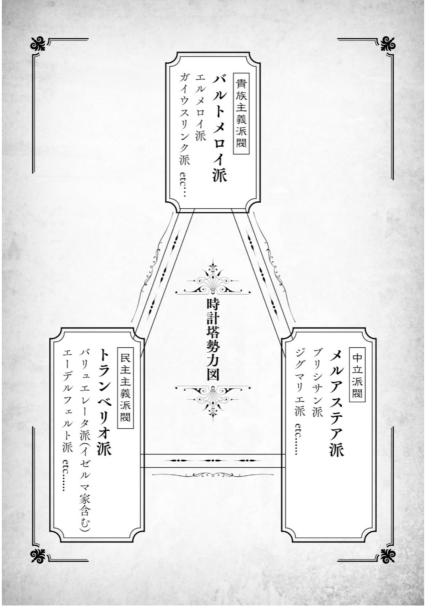
微笑して、私は毛布を撫でる。

すると、グレイのマントの右手あたりで、もぞもぞと動きがあったのだ。

「つうか、ずっとこもってたせいで、黄金姫とやらを見損ねたぜ!」

びよん、と固フ定ッ具クの外れる音がしてそこから鳥かごにも似た『檻』が飛び跳ねた。『檻』の内側から、アッドが表情豊かに主

張したのである。



「あの姉ちゃん怖いしさ! きちんと引っ込んでるのに見つけられ そうになったの初めてだぞおい!」

匣に刻印された目と口が忙しく変化する。

時々思うが、こうしているアッドは映画のCGか何かみたいだ。 目まぐるしく形態変化モーフィングする表情は、主あるじの代わり をしていると主張するかのように、必要以上に豊かであった。

「蒼崎橙子のことか」

「それそれ。なんだよあれ。バケモノか」

「だったら、見つからなかっただけで大したものだ」

アッドの隠匿が魔術的なものでなかったせいだろう。もっとも、では手品のような細工だけで、この鳥かごがグレイのマントに仕込めるかというと疑問符がつくのだが、そこについては少女もアッドも口をつぐんだままであった。

「……あれは、私も気になってるんだよ」

「あん?! あの眼鏡女が?」

「ああ。よりにもよって、蒼崎橙子がどうしてこの社交会に──」

と、さらに言いかけたときだった。

不意に、横合いで気配が生じた。

「トリム?」

そろそろスーツケースに戻そうかと思っていた我が水銀メイドが、じっと部屋の扉を見つめていたのである。

「不確定対象二名の接近を確認しました」

私と─グレイの全身に、緊張が漲みなぎった。

はたして、十秒ほどだった。

こんこん、と部屋の扉がノックされたのだ。

グレイと一瞬目を見合わせ、小さく唾を飲み込んでからうなずいた。

少女の手がテーブルに置かれていたアッドの『檻』を捕まえ、す うとマントの内側へと戻す。何度見ても異次元に吸い込まれている ようにしか思えないが、今のところ、焦眉の急は扉の向こう側だっ た。

トリム以外の魔術礼装も入ったスーツケースへ手を伸ばしたところで、

「―よろしいでしょうか」

と、声があったのだ。

どこかで、聞き覚えのあるような声だった。

「一どうぞ。鍵はかけてません」

と、返した。

どうせ他人の家の鍵なんて信用できないのだから、開けていても おなじだろう。他人の領地にいるかぎり、罠わなだらけの迷宮に閉 じ込められているのとさして変わりはない。

すぐ、反応はあった。

糸のように開いた隙間がたちまち押し広げられ、外側の廊下を露 あらわにした。

立っていたのは、黄金姫、白銀姫のお披露目に付き従っていたメイドであった。

「カリーナと申します」

片手にカンテラを持っていたため、略式のお辞儀カーテシーをしてから、メイドは改めて挨拶した。

「これはご丁寧に。ライネス・エルメロイ・アーチゾルテだ。何の 御用かな?」

率直に尋ねると、メイドは背後へと視線をやった。

どうやら、もうひとりいたらしい。

双子の片割れだろうか。

「どうぞ、こちらへ」

その言葉と手招きとともに、もうひとりの影がメイドに寄り添った。

目がつぶれるかと思った。

時に、認識は現実の物理法則を凌りょう駕がする。それこそ魔術に等しい深刻さで、私は自らの視神経とそれらの情報を司つかさどる後頭葉が、同時に破裂するのを実感していた。

「黄金……姫……!」

*

正直、頭がどうにかなるかと思った。

同性とは言っても、これほどの美しさになれば性差など越えてしまう。打ちのめされた精神が立ち直るのに、もう数秒ほどの時間が必要となった。蠟ろう燭そくの明かりに揺れる美貌は、あまりにも現実離れしていて、自分の立っている場所が異界にすりかわったと言われても、信じてしまいそうだった。

「はじめまして」

と、声が聞こえた。

その響きさえも、脳を直接揺さぶるようだった。

「……あ、ああ」

私も、大きく喉を鳴らしてしまった。

さすがに二度目とあって、前回ほどの衝撃はなかったが、そうでなければ気絶していたかもしれない。美しさとは暴力なのだと思い

知らされる。

「ディアドラ様が、あなたとお話ししたいと仰おっしゃられていま して」

カリーナと名乗ったメイドが、改めて口を開いた。

「私たちに?」

「いえ。失礼ですが、そちらの方は外していただいてもかまいませんか」

蠟燭の明かりが照らしたのは、灰色のフードをかぶったグレイだった。

「……その、拙は」

「グレイは信用できる人間です」

すぐさま、私が口を挟んだ。

こういうときのためのボディガードなのに、肝心なときにいなくなられては困る。トリムマウだけで対処できるとは限らないのだから。

すると、様子を見ていたディアドラが言葉を添えたのだ。

「……そういうことでしたら、カリーナだけ外させましょう。いい わね?」

「仰る通りに」

ひとつうなずくと、素直にカリーナは部屋を出ていった。付き人 としての基本だとばかりに、気配を感じさせない相手だった。

後には、私たちとディアドラが残った。

「突然、お時間をいただき、申し訳ありません」

「.....いえ」

その声にいまだくらくらきながらも、かろうじて返事をする。

だが、これだけ近づいたことで、とある発見もあった。

「……ひょっとして、お耳に不自由が?」

「お気づきになられましたか」

と、黄金姫─ディアドラは微笑して耳を押さえた。

「遺伝的な問題で、聴覚を失っております。それでも唇を読めばおおよその会話はできますし、発話については魔術での学習が容易でしたから」

「……ああ、なるほど」

現代科学の後塵を拝しつつある魔術だが、まだまだ魔術ならでは の強みも多い。

今黄金姫が話したような内容──聾ろう者しゃに正しい発音を教え込むなんてのは、まさしくそうした例だった。つまるところ脳に直接発音の情報を叩き込めばいいわけで、ある程度高等魔術にはなるが、念話などが可能な術者を連れてくればあっさり問題は解決する。仮にもバリュエレータの分家であれば、その程度はたやすいことだったろう。

まあ、これとて後十年、二十年もすれば、現代科学も直接脳に電極を埋め込むぐらいはやってのけそうなのだが。

ひとつ、息を吸う。

頭を切り替え、いつもの自分で言葉を紡ぐ。

「今夜は楽しませていただきました。こうしているだけでも、光栄 と眼福で倒れてしまいそうです」

お世辞でなく、正直な感想を口にした。

ディアドラが淡く微笑する。

花よりも、花らしく。

「ありがとうございます。──エルメロイについては父からうかがっております。新しい魔術の構築で、時計塔中から注目されている方

だと話しておりました。新世代ニューエイジの魔術師たちにとって は、まるで救世主だと」

やれやれ、また兄の話だ。

退屈はしないのだが、辟へき易えきはする。バリュエレータほどの名門がわざわざ新世代ニューエイジのと付け加えるのは、つまり私たちには関係ないですねと言ってるのと同じだからだ。

だが、今回は違った。

「ひとつ、お願いがあるのです」

と、彼女は切り出したのだ。

「ほう。これほどお美しい方の頼みでしたら、微力の範囲内であれば」

「お言葉に甘えて」

うなずき、黄金姫はこう続けた。

「......亡命を、お願いしたいのです」

「......亡、命?」

思わず、目を見開いてしまった。

「はい。私たちの身柄を、エルメロイ派に匿かくまっていただきたく思います」

Г......

派閥の移動。

それは、確かに亡命という名前に値する。エルメロイ私たちはと もかくとして、エルメロイの属する貴族主義派は小国に匹敵する資 産と戦力を備えているからだ。それは同時に、バリュエレータの属 する民主主義派も同様の戦力を備えているという意味でもある。 だからこそ、私は音を立てて唾を飲み込んでしまった。

事情の分かっていないグレイがきょとんとしていたのが、この場合は救いだったかもしれない。

「……ひとまず、理由をお伺いしていいですか?」

「私は、自分と妹を──このたび白銀姫を襲名したエステラを守りたいのです」

はっきりと、ディアドラは言った。

「守る、ですか? しかし、あのバイロン卿があなた方を大切にしてないわけではないでしょう」

Г......

しばし、沈黙が流れた。

けして頑かたくなに答えまいとするのではなく、あまりにも重すぎる何かが、美しい女の唇を閉ざしているのだった。私もグレイも黙り込んだ。あえて促すことはせず、重すぎる何かをそれでも彼女自らが振り払うときを待った。

やがて、

「……少し、疲れました」

と、ディアドラは囁いたのだ。

薔薇の刺し繡しゅうを凝らされた紫のドレスの胸へと手をあてて、こう続けた。

「私たちの身体をつくりあげるのに、どれほどの苦痛が強いられた かは、ご想像できるかと思います」

魔術による肉体改造は、たいていの流派で基本である。

幼少期からの厳しい修行や魔術刻印の移植はもちろんのこと、ほとんどが薬物投与を行うし、時には脳や臓器をいじることも珍しくない。風の噂には、何らかの魔術で作られた虫をいれかわりで何十匹、何百匹と体内に潜り込ませることもあったという。

まして、黄金姫と白銀姫。

これほどの完成度に至ったのならば、その代償にどれほどの苦痛が払われたとしても、あらゆる魔術師が納得するだろう。どれほど煌きらびやかに見えたとしても、イゼルマも魔術の徒だ。その原理に従って駆動するのが、魔術師の家というものだった。

だが、必ずしも家の方針に個人が殉ずるとは限らない―

「一誤解なさらないでください。私たちも魔術師です。自分たちの身を捧ささげる覚悟はできています。しかし、父のやり方は現状非効率的です。いいえ、父のやり方が効率的だった段階が終わってしまったのです。ならば、私たちには自衛の義務があると思います」

Г......

今度は、私が黙り込む番だった。

彼女が言っているようなことは、稀まれにあるのだ。

魔術が一定の段階に達して、それまでの方法論がまるで無駄になってしまう瞬間。それを見間違えて、数百年を閲けみした家が断絶するなどということも聞く。

「つまり、自衛が必要なほどバイロン卿の術式が危険──かつ、バイロン卿はあなた方の意見をお聞きにならないと?」

「ええ」

はっきりと、ディアドラは肯定する。

「現状のままなら、早晩私か白銀姫のいずれかが、死に至るでしょう」

おいおい何を言ってるんだ、と叫びたくなった。

もしも、芸術にランクをつけるなどという冒ぼう瀆とく的な行為をやるのなら、このふたりは間違いなく頂点に君臨する。それも二位以下が地下どころかマントルに沈みかねないほどの圧倒的な差をつけてだ。人類の損失という言葉があるが、彼女たちが失われるくらいなら大英博物館を破壊した方がマシと断言する人間は少なくないだろう。

ため息とともに、私は口を開いた。

「しかし、それはまずロード・バリュエレータに訴えるべき案件じゃないですか?」

「イノライ様はお優しい方ですが、創造科バリュエの魔術師の長おさには違いありません。父がイゼルマ家の当主であり、十分な功績をおさめている以上、それを覆してまで私たちに手をさしのべてはくれないでしょう」

その通りだ。

たとえ人格者だとしても、魔術師である時点で何の意味も持たぬ。人間的な在り方が魔術としての正しさを凌しのぐなどと言い張る者が、一派の長となるはずもない。同様に、業績をあげている者から何かを奪うような真ま似ねもまた、一派の長が許されるものではない。

「しかし、あなた方はバルトメロイの派閥です。利益になると思えば、父上やロード・バリュエレータの意向など関係なく動くでしょう。──私たちには、その程度の価値はあると思います」

ディアドラの言葉に、私はただうなずくしかなかった。

魔術師ならずとも──そして魔術師ならばのどから手がでるほどに彼女を求めることだろう。いわば、彼女たち自身が創造科バリュエの至宝なのだから。

「それでは、結局あなた方の身体を探ることになりますよ? ここで過ごすよりも楽だなどと、口が裂けても言えません」

「……ですが、取引は可能なはずです」

黄金姫は、きっぱりと言い切った。

たとえば、条件をつけることはできるだろうと。

司法取引で、テロリストが情報提供の代価を受け取るように。

「……なるほど」

一瞬、こちらの言葉が途切れそうになってしまった。

甘く見ていた、とほぞを嚙む。確かに、この美しい女は私に話しかけるだけの覚悟を固めていた。自らの言葉がいかに大それたことかを十分分かった上で、なおも必要な果実をもぎとりに来ている。

Г......

息を吸う。

意識を切り替え、目の前の相手を盤上の駒に設定する。

自分もまた駒のひとつ。時計塔という名の遊戯盤チェスボードに、いくつも載せられた平凡な兵卒ポーンなのだと認識する。畢ひっ竟きょう、派閥抗争とはこの駒の位置関係にほかならない。時と場合によって、駒の所属陣営までくるくる変わるあたり、チェスというよりは極東の将棋に近いだろうか。

「ですが、知っての通り、私は貴族主義派では末端に過ぎません。 仮に申し出を引き受けたとしても、何も保証することはできません よ?」

「ええ、それで十分です。名高きエルメロイが私たちを受け入れた のならば、どなたも無視することはできないでしょう」

(……ああ。それで、まず我が兄を褒めたわけか)

まいった。

ディアドラは、きちんと布石を打っていた。

ごく当たり前の挨拶と見せかけて、肝心なところでこちらが逃げ 込む場を潰していたのである。もちろん交渉事では基本中の基本だ が、この美しさでやられると当たり前のことが何倍もの威力を持 つ。

言葉の重みを、私は感じていた。

「微力を尽くすとは言いました」

と、私は口にする。

迂う闊かつな言質を取られれば、この場で破滅が決定しかねない。

「ですが、そういうことであれば、あなただけでなく白銀姫──エステラ様にもお話を伺わねばなりません。魔術の世界の秩序を重んじているのは、私たちだって同じです。確かにバリュエレータとは属している派閥が違うが、だからこそ全面抗争になりそうな行動は慎んでますよ」

ディアドラの申し出を、柔らかくはねつける。

だが、こちらの返答に、彼女はもう一枚手札を切ったのだ。

「……それに足るだけの、報酬があるとすればいかがですか?」

「報酬?」

鸚鵡返しに言った私へ、ディアドラはうなずき、ゆっくりと立ち上がった。

それこそ黄金の輝きに、目を奪われるしかなかった。

最後に、彼女はこう言い残したのである。

「……明日、早朝に私の部屋にお越しください。裏口は開けておきますし、部屋は魔術錠ミスティックロックになっておりますので、他人に立ち入られる心配はありません。白銀姫についても、そのときに話しましょう」

それきりで、ディアドラは部屋を去った。

実に恥ずかしいことだが、つい引き留めそうになってしまった。部屋を照らす淡い光でさえも、彼女との別れを惜しむようだった。

必死の思いで手を抑え、後に残された私はため息をついた。

「.....ライネスさん」

と、呼びかけられた。

グレイだった。

先の交渉ではずっと黙って見ていた少女が、改めてこちらへ口を 開いたのだ。

「ん?」

視線をやると、ぽすんと自分のベッドに座っていた少女はこう尋ねた。

「どうするつもりです?」

「はてさて」

グレイの問いに、私は肩をすくめた。

正直、このまま倒れ込みたくて仕方なかった。ただでさえ社交会で疲れていたところにこれである。いっそ殺してくれと願っても、 誰が私を責められるだろう。

「……黄金姫の亡命、本気だと思いますか?」

「微妙なところだね」

普通なら、一笑に付すところだ。

だけど、彼女の追いつめられている感じは本物に思えた。一応、 眼力ひとつでこの業界を生き残ってきたという自負は、私にもあ る。小学校プライマリースクールからまがりなりにもエルメロイ派 を運営してこれたのは、結局のところ人の底を見抜いてこれたから にほかならない。

性格が悪かったおかげだろう。

人の苦しんでいる姿が好きなどという私の公言しにくい性癖は、「その相手が結局何をどう思っているか」という心理を見極めることに、能力を研ぎ澄ませてくれた。好きこそものの上手なれ。たいていの魔術師は自分の欲望に正直すぎるので、実践での勉強には事欠かなかったのも大きかった。

「というか、ずいぶん周到に追いつめてくれたもんだよ」

と、鼻を鳴らす。

ここではっきり断っても、おそらく彼女は、次の機会にまたバルトメロイ派に持ちかけるつもりだろう。もしも、それで受け容れられた場合、今度はろくにつなぎもとらなかった私が咎められるというわけだ。

逆に、こちらからバイロン卿に密告するには立場が弱すぎる。エルメロイ派が黄金姫を誘惑したのだろうなどと言いがかりをつけられれば、これはこれでお家の危機である。

もしも、私が彼女を拒絶しようと思ったのなら、そもそも扉の ノックなど聞かなかったふりをするぐらいしかなかったのだ。

「本当に面倒臭いことだ。―トリム」

「はい」

振り向いた水銀メイドへ、

「休眠に入る。警戒態勢を維持したまま待機」

「了解しました」

こちらがこつんとスーツケースを叩くと、トリムマウはしゅるんと吸い込まれていった。この状態なら魔力の消費はほぼゼロである。もともとトリムマウの維持には最低限しか魔力を使わないよう組んであるが、他家での休息となれば万全を期しておきたい。くたくたに疲れた頭で、またあんな女と交渉事なんて考えたくもない。

「……ひとまず、報酬とやらを確かめてみるさ」

そう言って、今度こそ瞼を閉じた。

泥のように、意識はベッドの底へと沈んでいった。

一同じ頃。

湖水地方の風は、しっとりと水気を帯びていた。

夜闇もどこか濡ぬれそぼっているようで、近くの森も草原もただ白い霧に包まれている。このあたりは湿度と著しい気温差が濃霧を生み出すことでも有名で、そのためかマンカスター城をはじめとした幽霊屋敷が多かった。

イギリス人の幽霊好きは今更言うまでもないだろう。各地の幽霊 ファンサークルや幽霊見学ツアーはもちろん、幽霊の出るといわく つきのホーンテッドマンションなら、かえって高く売れるなどとい う有様だ。

ならば。

塔の近くで笑いさざめく声も、やはり幽霊ファントムのものだったかもしれない。

「ええ、今夜はありがとうございました。バイロン卿」

と、眼鏡の女が口にした。

くすんだ緋色の髪をした女──蒼崎橙子は、月の塔の入り口で談笑 していたのである。

相手は、バイロン卿。

黄金姫と白銀姫の父親にして、イゼルマの当主。

その隣には、確かマイオとか呼ばれていた薬師が佇んでいた。

「送ります。ミス・アオザキ」

「結構よマイオ。あなたもずいぶん飲んでいたでしょう?」

申し出を穏やかに断ってから、橙子は身を翻す。

外部には、ゆるゆると憂鬱げな霧がたちこめていた。

彼女の部屋は、ほかの客人たちと同じく陽の塔に用意されている。マイオが月の塔に詰めているのは、もともとがイゼルマ御ご用よう達たしの薬師だからであった。

しばし霧の内側を彷徨さまようようにして、露草を踏んでいくの は気持ちよかった。

その途中、

۲.....? ۱

と、眼鏡の奥の目が細められた。

霧に遮られていたものの、突然足下の砂が動いたように見えたからだ。まるで、こちらの位置を探るコンパスのごとき、奇怪な流れだった。

すぐ、その瞳にぼんやりとした人影が映り込む。

「オレの馬鹿弟子がこんなところにいたか」

皺だらけの顔を歪ゆがめて、銀髪の老女が夜霧を割って現れたのである。

「……これは、イノライ先生」

声を潜めて、橙子は会釈した。

それから、老女の耳にかかっている機械に触れた。

「音楽ですか?」

「なかなかいいぜ、iPod」

イヤホンを抜いて、老女がウィンクする。ドレスの懐から取り出したのは、最新型が発売されたばかりの音楽端末であった。うるさがたの魔術師は現代科学を忌避することが多く、いまだに電話回線

すら引いていない者も見かける中で、創造科バリュエを代表するこの老女はむしろ率先して現代科学の恩恵を楽しんでいるのだった。

「音楽は?」

「もちろんロックさ」

ご機嫌な顔で、老女の手が揺れてリズムを刻む。

そんな様子に、橙子は笑みを嚙み殺したような顔で、低くこぼしたのであった。

「お変わりないようで。......ひょっとして、待ちかまえてました?」

「そうともさ。社交会では逃げられたからな」

「偶然でしょう」

その言葉はさらりとかわして、橙子は自らの師を仰ぐ。

こうして出会うのは何年ぶりになるだろう。

葉擦れの音が聞こえた。

霧と混じり合ってひどくくぐもったそれは、遠く時計塔で研究していた時代を思い起こさせた。もはや意識にのぼることは滅多にないが、脳のどこかでひっかき傷みたいに残った過去。とりわけ、一いち途ずすぎて地獄に似てしまった台密の僧侶と、ひどくお喋しゃべりな赤いコートの魔術師は、影のようにまとわりついていた。

必ずしも専門は一致しなかったが、ルーンを学んだ頃に知り合い、研鑽しあったふたりだった。

同時に、どちらも自分が死に追いやった影であった。

感傷を数秒で追いやり、橙子は師へと口を開いた。

「一君主ロードとはご出世されましたね」

「くだらん世辞はよせ」

と、老女が白い歯を剝いた。

それから、

「封印指定を外されたのは聞いていたが……まさか、イゼルマの披露に出てくるとは思わなかったぞ」

イノライがくつくつと笑う。

「仙人のように生きるのが目的とか言ってなかったか」

「先生に話すべきじゃありませんでしたね」

と、橙子は片目をつむる。

「いまだにそうですよ。ですが、どうも才能が足りないようで、なかなか俗世から離れられません」

「極東では仙人になる素質や運命もひっくるめて、仙人骨と言うそうだな」

「ええ」

「だったら才能が足りない同士だ。オレも君主ロードなどという堅苦しい地位よりは、市井の売れない絵描きにでもなりたかった」

ひゅんひゅんと虚空に筆を振るうような老女の仕草に、橙子はなんとも味のある表情を浮かべたのである。

「先生の絵ばかりはご勘弁を」

言ってから、なんとなく懐をまさぐろうとした。

その前に、安っぽい煙草たばこの箱がつきつけられたのだ。太極 の紋様が描かれ、くしゃくしゃになった紙の箱である。

「吸いたいなら吸え」

「.....よく、こんなの持ってらっしゃいましたね」

どこか困ったように橙子が言ったのは、その煙草の銘柄が自分の 愛好しているものと一致していたからだ。台湾の好事家が自分のた めだけにダンボール一箱分だけつくったという代物で、今となって はもはや手に入らないものと諦めていた。 「お前が研究室に忘れていったんだ。湿し気けないように魔術をかけておいた師の親心を理解しておけ」

「そうでしたか」

素直に手を伸ばした橙子へ、老女は一旦引っ込めてからにやりと 笑ったのだ。

「返してやる代わりに一本よこせ」

「......まあ、先生ならいいでしょう」

うなずいてから箱を受け取り、懐から取り出したジッポーで火を つける。

紫煙をくゆらせ、軽く眉をひそめた。

「懐かしい味です」

「こちらももらおう」

遠慮なく引き抜いた煙草をくわえ、老女はそのまま橙子へと顔を 近づけた。

橙子の煙草と老女のそれが先端で接触し、やがて火が灯ともる。 ゆっくりと離れてから、深く煙を吸い込み、残りを吐き出しながら イノライが言った。

「おいおいなんだこれ。クソ不味いぞ。拷問か」

「ええ。そう話していたと思いますが」

「ハッ、謙遜か好物隠しだと思うだろう普通」

それでもひねり潰さず、律儀に吸い続けながら、イノライは煙を 目で追った。

街中にあらず、地方の闇は塗りつぶされたように暗い。しかし、 魔術師である彼女たちからすれば些さ細さいな目の『強化』で十分 に見通せた。だからこそ、古くから魔術師は夜の闇を好んだのでも あった。

しばし、その煙を堪能してから、老女が切り出した。

「少し、気になることがあってな。──どうして、お前がここに来てるんだ?」

「まあ、いろいろありまして」

「隠すなよ、トウコ」

「昔の呼び方はよしてください」

はにかむように、橙子が笑う。

この女にとって微笑が何を意味するのか、ほかの者ならば戦慄で 震え上がったやもしれぬ。とりわけ、彼女の時計塔時代を知る者な らば。

彼女の一『色』を知るものならば。

「それに、あの仕上がりはちょっと異常だ。もともとこの国でも湖水地方は一種の穴場だからな。ひょっとすればひょっとするぞ?」

「……ええ。まかりまちがえると、つながりかねません」

どこに、とは言うまでもないだろう。

魔術師たちがその生涯を賭して目指す場所などひとつしかない。 どれほど望みが薄かろうが、何百年、何千年の時間を彼らはそのために費やしてきた。とりわけ神代が終わってからの挑戦は、ほんのわずかな例外さえ除けばただ虚しく消えゆくのみであったが、それでも総体としての魔術師が諦めることなどなかった。

片眉をあげて、イノライが肩をすくめる。

「まるで、問題があるような言いぐさじゃないか」

「いいえ。……ですけど」

一拍おいて、橙子は口にした。

「至ってしまう可能性を感じたなら……黄金姫を狙うような不ふ逞 ていの輩がでてきてもおかしくないでしょう?」

「……相変わらず、不穏なことばかり言うヤツだ」

大きく、イノライが煙を吐き出した。

すっと橙子の差し出した携帯灰皿に、残った煙草を押し入れる。

「ふん。てっきり、お前は噂の秘宝でも狙っているかと思っていた んだがね」

「何のことです?」

その言葉に興味を惹ひかれたのか、橙子の方から訊き返した。

「おや。まさか、お前が知らなかったとは。少し前に裏のオークションで出てな。イゼルマが買い上げたことで話題になってたやつさ。とある幻想種の血を帯びた──」

「……なるほど。確かに上物ですね」

続くイノライの言葉に、橙子が小さくうなずく。

「おや、こちらももっと食いつくと思ったんだが。しばらく会わない内に、ずいぶん変わったかね」

「いえ? とりあえず押さえておく、ということもしますよ。必要なら妹の名前で時計塔から借金もしますし。ただ、今回のはあまり好奇心を刺激されなかっただけで」

「ふん。まあ芸術家なんてそんなもんだ」

肩をすくめたイノライに、橙子が尋ね返す。

「イノライ先生も、社交会でバイロン卿に呼び止められていたよう ですが」

「.....やっぱり見てやがったじゃないか」

ちぇ、ちぇ、と舌打ちする。

この老女がそうすると、まるで童女のようだった。不思議と似つかわしいのは、彼女が経てきた年月はその本質をいささかも曇らせなかったということなのだろう。

「大したことじゃないさ。それに、社交会だともうひとり目当てが いたんだが、そちらは会えなくて残念だ」 「どなたです?」

「現ノ代ー魔リ術ッ科ジの君主ロードさ」 それきりで、老女は手を振った。

霧と夜闇に恩師の背中が吞まれてから、

「……さて」

と、橙子はひとりごちた。

眼鏡を外して、こめかみのあたりを揉む。

「どうしたものかな。やはりノリが良くない」 そして、ぽつりと付け加えた。

「……何か、忘れているのかね?」

早朝、塔の外は軽く身震いするぐらいに冷えていた。

もともと湖水地方は寒暖差が激しい。十月ならば日中は二十度近くに至るのに、夜から早朝ときたら氷点下に達する。

しっとりとした霧に陽光が乱反射して、あちこちに小さな虹と奇怪な影が浮かび上がっていた。確かドッペルゲンガーのもととされるブロッケンの怪物とは、ドイツのブロッケン山山頂付近で観みられる―似たような虹の散乱現象と、それに伴って霧に映り込む巨大な人影ではなかったか。それがこんな低地で観られるとなれば、なるほど魔術師の住すみ処かにはふさわしく、かつては様々な幽霊騒ぎで人々を驚かしたのだろうと思われた。

ひっ、と背後で息を止める声が聞こえた。

「ん、どうかしたか?」

「.....いえ、その」

と、グレイが口ごもった。

フードを深くかぶり直し、恥ずかしそうに視線をそむけるのだが、

「イッヒヒヒ! またぞろいつもの恐怖症フォビアだろ!」

右手のあたりから、わざわざアッドが告げ口を働いたのであった。

(そういえば、幽霊が嫌いだったか)

昨夜は霧が出ていなかったので気づかなかったが、こういう景色

は彼女の苦手だったかもしれない。……うん、いかにも辛つらそうな横顔にちょっぴり興奮してしまったことは伏せておこう。誰しもに自分の趣味を告白する必要はあるまい。

塔と塔の間は、おおよそ十分かそこら。

昨夜の社交会が嘘のように、月の塔は静まりかえっていた。

茨いばらが絡まり、そこかしこに罅ひびが入った壁は、近づいて みると、なおさら昨夜の建物とは別物のように見える。

教えてもらった裏口から、内側に入った。

言っていた通りそちらの扉は鍵がかかっておらず、私たちはたや すく侵入できた。

こっそりと廊下を渡っていく。バイロン卿の意図が隅々まで届いている証拠に、塔の内側は創造科バリュエらしいさまざまな絵画がかかっていた。これが怪談なら醜く笑った絵画が、こちらへと呪いをかけてくるところだろう。──実際、何らかの魔術がかかっているのは確かなようで、私の目は軽く熱を持っていた。

(.....やれやれ)

我ながら面倒な体質だ。これだけ制御できないのでは、魔眼などという格好良い名称よりも花粉症じゃないかと思ってしまう。なおイギリスでの花粉症は芝がメインになっていて、ピークを迎えるのも六月から七月である。兄の言葉によれば、極東では花粉症対策にマスクをするのが常態らしく、それはちょっと変わった風景だなとつらつら思い描いたことがあった。

そのまま裏手の螺旋階段を上る。

黄金姫の部屋は三階にあり、いくつか並んだ扉から、これまた教えられた通りのものをノックした。

「.....ディアドラさん、いらっしゃいますか?」

声をひそめて、問いかける。

返事はなかった。

いや、そもそも人の気配を感じなかった。さきほどと逆に、今度 の扉には鍵がかかったままで、押しても引いてもびくともしなかっ た。

ひどく、嫌な予感がした。

「トリム。砕け!」

「イエス、マスター」

持参してきていたスーツケースから、しゅるりと水銀がこぼれてメイドの姿に変化する。そのまま右手だけが戦せん槌ついを生み出し、たやすく木製の扉を打ち砕いた。

破片を踏まぬよう、しかし急いで内側へと踏みいった。

広い部屋ではあった。

よく片づけられており、天蓋付きのベッドのほか、品のよい調度が並んでいる。そっと置かれた海月くらげみたいなランプはエミール・ガレだろうか。一同時に、最も意外なのは鏡の類がなかったことだ。女の部屋に鏡がないとは考えがたいが、彼女たちの魔術にとっては必然の理由があるのかもしれない。

だが、私はすぐにすべての思考を放棄した。

とあるアカイロを、発見してしまったためだ。

ベッドである。よく清められた真っ白な布の上で、そのアカイロは薔薇に似ていた。それこそ芸術家なら、そのアカイロの配置に感激しただろう。こんな事態にあってすら、彼女にまつわるすべては■しかった。

Г......

アカイロの中心に、黄金姫はいた。

まるで花のようだった。もとより花とは虫を惹きつけるために高 じた生態だと言う。大きく広げた花弁も、一息に散っていく在り方 も、ほかの生物の心を搦め捕るためにある。 だとすれば。

だとすれば。

だとすれば。

だとすれば。

.....ああ。

だとすれば、今の彼女をどう形容すべきだろう。

Г......

私は、完全に言葉を失っていた。

脳細胞のすべてが停止してしまっていた。少なくとも、この瞬間 はその方が遥かにマシだと心底から思ったのだ。たかだか人間の認 識で受け入れるのに、その光景はあまりにも■しすぎた。

「ディアドラ……さん……」

グレイの切れ切れな声さえ、意識の外だった。

彼女は瞼を閉じていた。

彼女は唇を閉じていた。

彼女は息をしていなかった。

彼女の首から下は、胴体とつながっていなかった。

身体中のパーツをバラバラに引き裂かれ、黄金姫の生首は柔らかなシーツの上に置かれていたのであった。



黄金姫の死の知らせは、たちまち双貌塔を駆け巡った。

現場保存のため、私が居合わせたまま、グレイに伝言を頼んだのだ。事態が事態だけあって、すぐさま人々は黄金姫の部屋へと集まって、その現場を目にすることとなった。

あまりにも、無残な死体だった。

美しさだけそのままなのが、かえって凄まじい。生きていることと死んでいることの双方を、その生首は表現していた。実際、他人への連絡や事件性の問題がなければ、丸一日死体の前で茫然としていたかもしれない。

ともあれ、社交会の後に残っていた人々がひととおり集まるまで、三十分とかからなかったはずだ。

「……ライネス、さん」

まず、薬師のマイオが息せき切って駆けつけ、現場の状態に目を 見開いた。

もともと気弱な顔つきをしているのだが、このまま昏こん倒とうしてしまいそうだった。むしろ、そうならなかったことに、意外な気骨を見出すべきだったかもしれない。

次に、

「おいおい。厄介な話になってんな」

と頭を搔いたのは、確か社交会で見かけた肌黒の男だった。

「君は?」

「ミック・グラジリエだよ。呪詛科ジグに世話になってる」

呪詛科ジグマリエは、メルアステアと同じ中立派だ。

短く刈り上げた髪型で、何かのスポーツをやっているのか、やたらに筋肉質であった。無論、あの兄ですら『強化』の魔術を使えば、片手でフラットを持ち上げるぐらいのことはやるのだが、土台が強きょう靱じんであるほど『強化』が効果を増すことは言うまでもない。

「は、はははは。なんだこれは」

三人目は、部屋に入った途端、乾いた声で床にへたりこんだ。

「……ありえない。まさか、僕の衣装がこんなことになるなんて」

慨嘆したのは、やたらと目立つ髪型の男だった。

大量の三つ編みをほどこしたその髪型は、確かブレイズとか言っただろうか。偏見では黒人の女歌手とかがよくやってるやつだが、この男の場合はさらに複雑に編み重なっており、もはや髪による織物の様相を呈していた。

言いぐさからしても、まるで人間よりドレスのことを気にしているようだった。

「君は?」

「イスロー……セブナンです。……黄金姫、白銀姫のドレスを作らせていただきました」

後から聞けば、この三人が最初にやってきたのは、ちょうどすぐ近くを歩いていたかららしい。社交会から帰る前に、黄金姫たちを朝食などに誘うつもりだったというのだから、なんとものんきなものである。

共通しているのは、一応中立主義派ということだ。

ただ、貴族主義派や民主主義派と異なり、この中立主義派は派閥内での意思統一ができていない。主義主張よりも研究を優先したいという思考の結果、いくつかの家が集っているだけだ。最大勢力の名でメルアステア派とまとめられることもあるが、つまり中立というだけでいつ内ゲバを始めてもおかしくない仲なのだ。

かつ、と石畳に杖をつく音が聞こえた。

世界が滅びたかのごとき呻きが、部屋の床に落ちたのだ。

「なんて……ことだ……ディアドラ……」

「.....お姉様」

震える声が、悲劇を追認するように思えた。

血まみれの部屋で、このふたりの到来こそが最も残酷であったや もしれない。

「……バイロン卿、白銀姫」

白銀姫は最初に出会ったときと同様、ヴェールをかぶっていた。

淡いヴェールの向こうに、黄金姫とほぼ同じと思しい風貌が透けていたが、その表情までは分からなかった。

ただ、白いシーツの上に真っ赤な池を広げた生首を、じっと見つめているようだった。

もしも、ヴェールの下が本当に黄金姫に劣らぬ美貌であったなら、それは天上にさえ存在せぬ、倒錯した空間だったろう。実際、こんな状況にも拘かかわらず、想像した私の脳裏は数秒ほどその妄想で沸騰しかけたほどだった。

そして、

「なるほど。大騒動だ」

と、もうひとり、女が現れたのである。

今は眼鏡をかけていなかった。くすんだ緋色の髪を片手で押さえ、打って変わって冷たい──とも思われる口調で、橙子は室内の様子を見回したのである。

「いやはや」

と、かぶりを振った。

「これはひょっとして、残った我々が容疑者、なんてことになるん じゃないか?」

「ミス・アオザキ」

とがめるようなマイオの言葉も気にせず、橙子は笑みを崩さずに 言葉を続けた。

「探偵小説は嫌いじゃない。容疑者の立場になるとは想像もしなかったけどね。 どちらかというと、被害者向きだろう私は」

くくく、と肩を震わせる。

どう見ても犯人向きとしか思えない態度だが、彼女は黄金姫の生首に続いて、部屋の状況を数秒ほど見つめた後、ますます愉快そうに笑い出したのだ。

「というか、これは凄い。さすがにやり過ぎていて笑ってしまう。 魔術師がこれだけ揃そろった現場で、一体何の意味があるというん だ?」

「……何が、ですか?」

たまらず、グレイが尋ねた。

「いいかい? ここに来る前に聞いたのだけど、君らが押し入ったとき、黄金姫の部屋には鍵がかかっていたのだろう? 私も少しの間厄介になってたので知ってるがね。黄金姫と白銀姫の部屋には魔術錠ミスティック・ロックがかかっていた。個々人の魔力の波長に対応するタイプで、時計塔でも宝物庫なんかに使われている代物だ。つまるところ、黄金姫の部屋の扉は黄金姫にしか開けない」

魔術錠ミスティック・ロック。

同じことを、私もディアドラから聞いていた。形式にはさまざまなパターンがあるが、おおよそ個人の魔オカドの波長そのものを鍵とする魔術礼装だ。かなり高価だとか、魔術師にしか使えないとか、使用者を柔軟に変えられないとか種々の欠陥はあるが、その堅牢性の高さから様々な場所で用いられている。

その魔術錠ミスティック・ロックが黄金姫の部屋にも使われてい て。

室内で黄金姫が死んでいるにも拘わらず、魔術錠ミスティック・ ロックがかかっていたのなら。 「だったらさ。......つまり、これは『密室』じゃあないか」

一瞬、沈黙が流れた。

誰にも、そんな観点はなかったからだ。魔術師にとっても非現実的な──彼女が言った通り、何の意味があるのか分からない現象だったからだ。

「まあ、私たち魔術師にしてみれば、密室の被害者を外部から殺すのはさほど難しくないがね。たとえば、君の魔術礼装──月霊髄液 ヴォールメン・ハイドラグラムならたやすいことだろう」

つらつらと喋って、橙子は私の隣にたたずんだ水銀メイドを見や る。

「原則としては第一発見者を疑うところなんだが......くわえて、黄 金姫と最後に会っていたのは君たちじゃないのかな?」

どきり、と胸が跳ねた。

表情に出さなかったことを褒めてほしい。高鳴る胸をひそやかに 抑え、つとめて平静な声音で、私は問いただした。

「......どうしてです?」

「バイロン卿」

橙子が促すと、紳士がひとつうなずいた。

身体を固定し、杖を手首に絡めたまま、バイロン卿はその手を打ち鳴らしたのだ。

その音に誘いざなわれ、部屋の入り口から入ってきたふたつの影は――黄金姫、白銀姫に付き従っていた双子のメイドのものであった。

「カリーナさん、だったね」

その片方。

黄金姫専属であったメイドの名を呼んで、橙子は質問を紡いだ。

「カリーナさん。ディアドラとエルメロイの姫は、何を話していた

のかな?」

「わ、私は、ディアドラ様が用件を話しているときには席を外していましたから.....」

何も存ぜぬと、カリーナがうつむく。

だが、そのようなことが許されるはずもなかった。眼鏡をかけていない橙子は、ごく冷ややかにしたたかに、うら若きメイドを追い詰める。

「ああ。席を外していたのは知っている。だけど、君にはディアドラがどんな用件で彼女と接触したか、ある程度の予想ができているのではないかな?」

Г......

うつむいたままのカリーナは、しばらく沈黙していた。

「カリーナ」

これは、バイロンが続きを促したのだ。

主人の命とあっては抵抗できるはずもなく、カリーナは切れ切れ に言葉を紡いだ。

「……ディアドラ様は……エルメロイへの亡命を希望してらっしゃいました」

「な……っ!」

その言葉に、告白したカリーナ自身と橙子を除く全員がざわめき たったのだ。

(しまった.....!)

と、私は唇を嚙んだ。

完全にはめられた。亡命を受けるつもりはなかったなどと、そんな弁明が通用する余地はあるまい。また、社交会にのこのこやってきていたバルトメロイ派が私たちだけであった以上、擁護する者もいるはずがなかった。

「カリーナ姉さん……どうして……」

「レジーナ」

双子の片割れの名を、メイドが呼んだ。

カリーナと、レジーナ。そういう名前らしかった。

何にせよ、あまりにも今の言葉は致命的に過ぎた。

「……これは……さすがに、見過ごしがたいな」

芝居がかった様子で、バイロン卿が視線を向ける。

無論、今初めて知ったということはあるまい。こうもきっちり追い詰めてくるということは、少なくとも、事件の露見後―黄金姫の死を知ってここに来るまでの間には、おおよその状況は摑んでいたはずだ。

「どういうことか説明願いたい。エルメロイの姫」

「確かに……そういった相談はディアドラ様から受けていました」

一瞬の躊ちゅう躇ちょとともに、私が口を開く。

ここで沈黙すれば、相手の言うことをすべて認めたことになる。 何らかの抗弁があるとしても、話しながら考えをまとめるほかな かった。

「ですが、誓ってディアドラ様を手にかけてなどいません。そもそ も亡命を持ちかけてきた相手を殺す意味などないでしょう」

「そうかな? 亡命の余地が折り合わなくて、争いになったとかは ありえるんじゃないか?」

これは、いままで聞いていた肌黒──ミックが口にしたのだ。

余計なことを、と怒りに奥歯を嚙みしめるより早く、周囲の魔術師たちの視線がこちらの一挙手一投足を縛り付けるのを感じた。迂闊な行為に出れば、彼らは瞬く間に私を殺害し、ただでさえ衰退したエルメロイから残る利権をすべて奪い取ろうとするに違いない。

四面楚歌。

社交会で口にしたのは、私自身ではなかったか。

「.....ライネスさん」

グレイが、小さく囁く。

その右手が、臨戦態勢へ―マントの内側に隠れつつあった。

「……駄目だ、グレイ」

と、私は制止した。

「ですが」

「使えば、ここは逃げられるかもしれない。だけど、エルメロイは 致命的に追いつめられる。それは私ひとりの命よりも重いことだ」

苦渋とともに、呟く。

ああ、ひどく残念なことに、私の価値観ではそうなのだ。

あの兄だったらあっさり売り飛ばすかもしれない。今生きている 人間よりも派閥や家が大事なんてことがあるかと、だから君は二流 なんだと言わざるを得ないような結論を口にするかもしれない。

だけど、私は兄じゃないのだ。

ほんの少しだけ、残念なことに。

血なまぐさい部屋で、一歩バイロン卿が進み出て、こちらへと口 を開いた。

「何にせよ、詳しく調べさせていただく必要がありそうです」

「そうだね」

と、私もうなずいた。

できるかぎり平静を装って、くるりと手の平を翻す。

「丁寧にもてなしていただきたいな。とりわけ朝食は美味しい紅茶とスコーンがセットでないと胃が受け付けないんだ。──でないと、せっかく協力するつもりなのが台無しになってしまう」

「協力? どうなさるつもりだ? ライネス・エルメロイ・アーチ ゾルテ」

「ええ。決まってますとも」

フルネームでこちらに呼びかけたバイロン卿へ、わざとらしくおどけた声で持ちかけたのだ。

「犯人を捜し出してみせましょう。私たち、エルメロイの名誉にかけて」

私の言葉に、一同の反応はばらついた。

メルアステア派の三人の魔術師たちは軽く瞬きして、双子のメイドは自分たちに発言権などないと言うかのように、ただただ沈黙していた。

白銀姫は.....分からない。

そして、

「はははは」

と、蒼崎橙子は高らかに笑ったのである。

「いいな。これがエルメロイの姫か。正直最初は気乗りしない社交会だったんだが、なかなかどうして愉快じゃないか。どうかなバイロン卿、私は一理あると思ったんだが」

「……一理は、認めよう」

重く、バイロン卿は言った。

娘の死体を前にしながら、しかしイゼルマの当主は紳士然とした 態度を崩さなかった。あるいは、魔術師としてならば誇るべき父親 と言えたかもしれない。

「だが、君たちの自由にさせておくわけにはいくまい。一応容疑者 なんだからね」

「私ならどうかな? バイロン卿」

と、橙子が自らの胸に手をおいた。

「私が彼女たちの監視を行う。これならどうだ」

「残念だが、ミス・アオザキ。あなたも容疑者のひとりであること

を忘れてないか?」

「……確かに。これは困った」

肩をすくめて、くすんだ緋色の髪の女はあっさりと深入りを諦める。

彼女にしてみれば、ちょっとした思いつき以上の意味はないのかもしれなかった。少なくとも、冠位グランドという階級を盾に、ごり押しするつもりはないようだった。

「―だったら、オレならどうだ?」

足音が響いた。

そう。

もうひとりだけ、この場には人物が足りなかった。

この凄惨な場にあって、なおほかの誰にも抗弁させないだけの権 威を持つ女であった。

「遅れて申し訳ない。おおよそ事情は聞こえていたが、そういうことならオレが見張っているのなら問題はないんじゃないか?」

「.....ロード・バリュエレータ」

イノライ・バリュエレータ・アトロホルム。

三大貴族の一角。バリュエレータ派の頂点に位置する老女。

確かに、この中で最も信頼に値する者といえば、ほかにいまい。 後から時計塔が調査するとしても、彼女の証言ならばほぼ疑われま い。

「文句はあるまい? 各々方」

悠々と言って、老女は周囲を見回した。

白銀姫とそのメイドであるレジーナ。父親であるバイロン卿。居 合わせたメルアステア派の三人の魔術師たち。冠位グランドたる蒼 崎橙子。もちろん、私とグレイも。 あるいは、生首となった黄金姫を。

満足げにうなずき、手を叩いて老女は解散を促したのである。

「さあ、だったら解散だ。―ここから先は探偵の出番だろうよ」

*

結果として、残されたのは私たちとイノライであった。

さすがにロード・バリュエレータの言葉とあってはほかの魔術師 たちも否やはなく、早々に退出したものである。

先まで緊張のせいで半ば麻ま痺ひしていたが、べったりとこびりついた血の臭いは吐き出してしまいそうなほどに濃厚だった。黒魔術ウィッチクラフトの授業である程度慣れてはいるが、人間ひとり分の血ともなれば、これほど濃厚に臭うものか。

まだ触れたわけでもないのに、自分の口腔から胃の腑ふまでが鉄 錆さびた臭いで満たされてしまいそうだった。

「さて、どこから調べるつもりかね?」

「……できたら、部屋の間取りと死体から」

胸に手を当てて吐き気をこらえながら、イノライに答える。

「なるほど。なら好きにしたまえよ」

と、老女は顎をしゃくった。

ちくりとも反論してこないのが、どうにも居心地悪い。

いや、もちろん協力的なのはありがたいのだが、この相手はなんとも相性が悪かった。率直な相手には迂遠に、迂遠な相手には率直に突き込むのが私の流儀だが、どちらでも綺麗に返し技を取られる気しかしない。単なる年の功というよりも、もっと始まりのところから相性が悪いのではなかろうか。

案外、同じ歳だったら友達になれたかもしれないが。

ともあれ、可能な限り注意深く、私は部屋の様子を探り始めた。

Г......

部屋の広さは、ちょっとした喫茶店ほど。

主な調度は天蓋付きのベッドに、海月くらげに似たランプが置かれた机。印象派らしき絵画がいくつか。ごくつつましやかな本棚には初歩の魔術書グリモアと思しい書籍が並んでいる。いずれも黄金姫の名にふさわしい贅ぜいを尽くした品だが、種類としては最低限のみを集めたという感じだった。

窓はひとつ、扉はひとつ。天窓も一応あるが、まあ人間が出入りできるようなものじゃない。これを考慮にいれるなら、そもそも壁抜けできる魔術ってなんだったっけと思いを巡らせた方がマシだ。

そして、肝心の死体は......

「……これはまた徹底的な」

改めて呟いてしまうほど、この死体は完全にバラバラだった。

胴体も四肢も綺麗に切り分けられており、断面は思わず目を剝いてしまうほどの鮮やかさだった。抵抗の跡は見られない─断面の具合からしても、抵抗などする間もなく殺されたということだろうか。それこそ死霊魔術ネクロマンシーに長たけた者なら、警察なみの検死ができるのかもしれないが、私にはとんと縁のない魔術である。

......せいぜい、いささかの事件から、死体に慣れているだけだ。

「トリム、パーツを集められるか?」

「分かりました」

私の言葉に従って、てきぱきとトリムマウが動き始める。

その様子を見つつ、イノライが軽く目を細める。

「まあ……これだけバラバラにされては凶器も分からんな」

そもそも凶器に魔術を含んだ途端、ありとあらゆる死因が可能となる。橙子が示唆していたように、トリムマウひとつでおおよその物理的な武器は模倣できるだろう。『密室』が意味をもたないように、『凶器』の概念もほとんど無意味だ。

「……だとすれば、どうして『密室』になってしまったのかが、手がかりになります」

「なるほど」

と、老女がうなずいた。

「つまり、君は偶然『密室』が完成してしまったと見てるわけだ」「はい」

と、肯定する。

「推理小説なんかでいう『密室』は、犯人への手がかりをなくすためのものです。理屈では誰も殺せないんだから犯人なんて捕まえられるわけがない―そういう無言の主張を込めたものでしょう。ですが、容疑者が全員魔術師ではそんな主張に何の意味もありません」

そう。

そもそも『密室』なんてつくり放題なのだ。遠隔からの呪いひとつとっても、さまざまな種類がある。たとえば水の要素で血液を滞らせて脳梗塞を引き起こさせてもよいし、火の要素を過剰にして心筋梗塞を起こさせることだってさして難しくはない。もちろん、この場合相手も魔術のたしなみがあるのだから、今言ったほど容易に呪いが成立したりはしないが、『密室』という概念が本来持つ不可能性は遥かに遠い。

だとすれば、この『密室』は偶然であろうと、私は推測する。

狙ったわけではなく、たまたま『密室』になった。

それこそが、何らかの手がかりにつながるのではないかと一

「一駄目、か」

うむ。まったく思いつかない。

だいたい、私はこういうせせこましいことを考えるガラではないのだ。推理小説とか後ろの方から読んで、「ふふふ私だけは犯人を知ってるぞ」という優越感とともに読み進めるタイプだし。

ただ、今回については別のことが気にかかった。

女性ならば確実に部屋にあるはずの品が、一切見あたらなかった からだ。

「......どうして、鏡がないんでしょうね」

呟いた私に、イノライが口を開いた。

「今更、自分の顔など見たくもないのでは?」

「普通は、あれだけ美しければ、ナルシストになるものじゃないでしょうか」

非難はできまい。

芸術もあそこまで突き詰めれば飽きることなどありえない。一生その顔だけを見つめて死んでいくことを切望する者は、瞬く間に長大な列をつくるだろう。人によっては、その列こそを天国への階段と称するかもしれない。

あるいは、十三階段かもしれないが。

「ははは、理屈は分かるが若さゆえの傲慢さだな。オレぐらいの歳になると、鏡なんて見たくもなくなるぞ。こんな風になってしまうなら、いっそもっと若いときに整形手術でも励んでおくべきだったかと」

「……ロード・バリュエレータ」

思わず口を挟むと、老女は愉快そうに唇の端を歪めた。

「くく、嘘だ。実は、今でも毎日三十分鏡に見み惚とれているといえば信じるか。─いやすまん。ついついからかいたくなるものでな」

Г.....

いつもと逆の立場なわけで、大変座りが悪かった。

いや、正直それもうっすらと興奮したのだが、おかしなものに目 覚めそうなので封印しておこう。

「ところで、もう少し尋ねてかまわないかな」

「なんなりと。ロード・バリュエレータの問いを拒絶するような舌は持ち合わせておりませんので」

「ふふ、嬉しいことを言ってくれる」

皺だらけの顔を歪めて、老女は遠慮せずに質問をぶつけてきた。

日常会話のような、しかし本質をついた問いであった。

「そこまで、エルメロイを復興させたいのかね?」

「別に、エルメロイの家自体に大した執着があるわけじゃないです よ。こんなのは結局なりゆきです」

と、私は答えた。

「もともと、エルメロイ派では底辺でしたからね。私のところに回ってきたのも、上位の家が残らず離反したり遠ざかったりしたあげく、血縁の子弟でまだ魔術刻印の移植を受けてない候補連中では、源流刻印の適応率がたまたま突出して高かったから……とかそういう理由です。まあ、エルメロイ派のおおよそは源流刻印の株分けを受けてきたわけですから、そこそこの適応率があるのも当然のことですしね」

株分けとは、本家となる魔術師から、魔術刻印のごく一部を移植 してもらうことだ。

もともと、初代となる魔術刻印は、失われた幻想種や魔術礼装の 欠片かけらなどを核として身体に埋め込むことによって造られる。 当然異物を埋め込むことになるため、普通に親から魔術刻印を譲り 受ける場合よりも遥かに拒絶反応は強い。何代にも渡ってこの拒絶 反応に耐え、核となった異物を自らの魔術に染めていくことによっ て、ようやっと魔術刻印は完成するのだ。

しかし、この手段をとる魔術師は現代ではほとんどいない。

そういう家系でもないのに魔術師になろうなんて物好きがいないこともあるが、そうした者でも、ほとんどの場合は有力な家系から株分けしてもらうからだ。もちろん、他人からの移植である以上、本来の魔術刻印の機能──固定された神秘としての役割はほぼ切り捨てることとなる。それでも一から魔術刻印をつくりあげるのに比べれば、ずっと若い世代で使い物になることを期待できるし、その方向性もよりコントロールしやすいのだ。

もちろん、親となる刻印にも傷はつくが、この程度であれば調律師の施術を受ければ数ヶ月から一年ほどの期間で回復可能だし、株分けされた家からは絶大な忠誠を期待できることとなる。結果として、多くの派閥では株分けによる分家設立が基本となり、大元となる本家の魔術刻印を源流刻印と呼び習わしているわけだ。

(……まあ、そういう忠誠度の構築も、肝心の源流刻印を持った本家当主が死んでしまえば、何の意味も持たなかったんだが)

こっそりと、胸の内で毒づく。

いやあ、先代のロード・エルメロイの聖杯戦争参加は、若さゆえの暴走などとよく言われているが、本当に遊びのつもりだったのだろうなあ。それとも、誰か、自分の優秀さを見せつけたい相手でもいたのだろうか。

「なるほど。だが、エルメロイに執着がないというなら、もうよいのではないか? 君も君の兄も十分によくやった。いまなら、かなりの値段でエルメロイを売り払うことだってできるだろう。どこの派閥が買い上げても、そう悪いことにはならないんじゃないかな?」

「.....ああ」

もちろん、それを考えなかったかと言えば嘘になる。

はっきり言って派閥抗争とかクソだ。研究のためにガツガツしてるメルアステア派はまだしも、貴族主義だの民主主義だので鎬しのぎを削りあってる両派閥はさっさと目を覚ませと背中を蹴飛ばしたくなる。お前等、俗世を超越したとか言ってるくせに、なんで権力争いに目の色変えてるのかと。

だけど、

「目の前に敵がいる。やりあうための手段がある。だったら戦わな い理由なんて、私には見いだせません」

と、私の口は告げていた。

うん、まあごめん。ぶっちゃけ私もクソのひとりには違いないのだった。これが兄だったら、もうちょっとマシな理由があるかもしれないけど。

「なるほど。筋金入りのファイターだ」

賞賛というよりも、何かのデータを分析するような口調でイノライが言う。

あくまで世間話の範疇だったのか、老女はそこで話題を切り替えた。

「では、黄金姫が亡命を希望していたというのは本当かな?」

「残念ながら、本当ですね」

ここは、素直に認めておく。

事実を固めずに迂闊な嘘をつけば、かえって状況が悪化するのはよく分かっている。まあ、かつてのエルメロイ派ではかなりの頻度で見受けられた光景なのだけど。

「ふむ。理由は?」

「バイロン卿が自分たち──黄金姫たちを練り上げるための術式がもはや非効率的になってしまったからだと。だとすれば、自分たちの身を守るために亡命するのも、義務のひとつだと言ってました」

そう、義務だと言った。

権利ではなく。

つまるところ、自分の身体も根源の渦に至るための手段としか考えてない──彼女もまた、魔術師として当然の意識を持ち合わせていたということか。

「……なるほど。ありそうな話ではあるな」

と、イノライもうなずいた。

「オレから見ても、黄金姫の仕上がりは飛び抜けていた。段階が変われば、以前の方法論が使えなくなるのはよくあることだ。バイロン卿も頭が柔らかい方とは言えんしな」

思いあたりがあるのか、銀髪の老女はとんとんと自らのこめかみをつついた。

「だったら、白銀姫は何らかの情報を知っている可能性はあるが」

「ひとりずつ事情聴取をするのを手伝ってもらえます?」

「残念ながら、そこまでいくと公私混同だろう。今回のオレは、あくまで君たちのお目付役なわけだからな」

ぴしゃり、とはねつけられる。

口調や態度こそフランクだが、けじめのつけ方はさすが君主ロードというところか。まあ、でなければ、一大派閥の長などやってられないだろう。最弱最小派閥であるエルメロイとはわけが違うのだ。

「……一体、いつからなんでしょう」

ふと、背後で呟きが生まれた。

グレイであった。

「何のことだい?」

「……あ、いえ、黄金姫のことです。……もちろん、子供の頃から 綺麗だったのかもしれないですが、人間育っていく過程で顔は変わ るものでしょうから……」

Г......

妙に、ひっかかる言葉だった。

ただ、どのあたりかはうまく表現できなかった。

代わりに、別件で呼びかけた。

「グレイ」

「なんでしょう?」

首を傾げたフードの少女に、問いかける。

「確か、剝ア離ド城ラの事件では、調査のための心構えか何かを兄が言っていたんだろう。ほれ、魔術師にはまともな推理が意味がないとか」

「あ.....はい」

うなずいて、灰色のフードの少女はつっかえつっかえ口にした。

「ええと……フーダニットと……ハウダニットは……魔術師の関わる事件には意味がない……とか」

確か、探偵小説か何かの用語だったことは、私も覚えていた。

フーダニットWhodunitは、誰がやったか。

ハウダニットHowdunitは、どうやってやったか。

なるほど、魔術師にとってそのふたつはあまりに薄弱すぎる。使用する魔術さえ特定できない以上、妖精の輪による壁抜けにしろ呪いによる遠隔殺人にしろ、ほぼ無限といっていいほどの可能性がありえるからだ。

「だけど、ホワイダニットWhydunitは例外かもしれない......です」

「……ああ、それは道理だな」

と、私は納得する。

一種の超人として物理法則すら騙しきる反面、魔術師は思想だけ はごまかせない。

ある意味で、そのために存在していると言ってもよい生物だから だ。辿り着くことなどできない「」に向かうため、ただそのこと にすべての意志を集約した存在。集約してしまった概念たち。

.....なんだかんだいっても、私もそのひとりなのだ。

「マスター」

と、トリムマウが無感情に声をあげた。

「並べ終わりました」

その言葉通り、ベッドのシーツの上にかつての黄金姫が再現されていた。

鋸ジグソーパズルの名の通り、電動鋸のこで二十ヶ所近くも切断されたような死体。その美しさは、すでに死んでいるという事実を忘れて、吐き気を催しそうなほどであった。

「身体のパーツは……揃ってるな……」

死者の部位は、ものによってはある種の魔術に使えることもある。

たとえば、さきほどもあげた死霊魔術ネクロマンシーなどがそうだ。西洋の場合だと多くは占星術アストロロジーと影響し合っており、黄道十二星座に則のっとって身体部位を霊的に意味づけすることで、さまざまな魔術の触媒カタリストとして用いるのだった。

剝ア離ド城ラの事件でも、この黄道十二星座と七十二の天使にな ぞらえつつ魔術師の身体部位を奪い──その裏で魔術刻印を回収して いたというのだが、

「もともと、魔術刻印はないみたいだな。……まあ黄金姫、白銀姫はいわば魔術の成果物だから、魔術刻印自体は施術する側のバイロン卿が保持しているんだろう」

「.....なるほど」

だとすると、あの魔術への傾倒ぶりは、父親や家系に対する献身なのだろうか。

血臭による嘔おう吐と感と美的な陶酔感の相そう剋こくに苛さいなまれながら、しばらく私は死体のパーツを観察した。ともすると魂を持って行かれそうになるのは、それこそ悪魔の手になる美術のようだった。私が魔術師だからというのもあるが、これほど冒瀆的な魔魅を神のものと比喩する気には到底なれなかった。

「つ.....?」

かすかに、目が痛んだ。

壊れた扉の端の方だ。

木材の破片と石床の間に指を伸ばして軽く擦ると、何かがこびり ついていた。

(......これは....... いや灰か......?)

私の目が痛むということは、もともとは何らかの魔力を帯びていたのだろう。魔術師の住処であることを考えれば、さして不思議はない。

「.....ライネスさん?」

「どうしたかね?」

グレイとイノライが尋ねた。

「.....いえ」

ハンカチに押し包み、そっと懐へと隠す。

過熱しはじめた眼球に瞼越しに触れて、微笑した。

「……とりあえず、考えをまとめるので、一旦部屋へ戻りますよ」

朝日が、塔の影を色濃く大地に焼きつけていた。

秋の南風ノトスも爽やかに、緑の草原が波打っている。こういう 場合でなければ、なるほど黄金姫・白銀姫をつくりあげる環境は風 光明媚なものだと、感心したかもしれない。

ただし、今はそれどころではなかった。

重なった疲労のせいで、陽光を浴びるだけで吸血鬼みたいに溶けてしまいそうになる。ああ、実際の吸血鬼──吸血種が太陽が苦手かというと、これはだいぶ場合によりけりなのだが、陽の塔に戻るまでひたすら太陽を恨んでいたのは本当だ。

少しでも疲れを軽減するため、トリムマウもスーツケースへと戻しつつ、いつもの目薬だけ差してから、へたり込むようにしてベッドの端へと座り込む。

ひんやりとした部屋の壁は、昨日とはまるで違って感じられた。

もともと、魔術師の住処なのだ。友好的な関係といえなくなった 以上、環境自体が巨大な敵となって、無形の圧力プレッシャーをか けてくる。まるで、室内が巨人の内臓にでも変じたかのような悪寒 を禁じ得なかった。

ああ、つまり平凡な壁のシミが、人間の顔に見えたりするアレだ。

科学的には、三角形に配置された点を人間の脳が顔と認識する―なんでもシミュラクラ現象とかいって最近のデジタルカメラなどにも採用されているらしいが、魔術はそんな心の隙から忍び寄ってくる。一般的な心理からガードをこじあけ、最低限の魔力によって最大限の効用をもたらすのは、たとえば呪術では基本中の基本らしい。

逆に、自らに暗示をかけて『神秘を行うシステム』とつくりかえ

るのはたいがいの魔術の基本であり、多くの工房はこのための機能 を取り入れている。

(.....また、余計な思考が紛れ込んでるな)

軽く、頭を振る。

思考がよそへいくのは疲れている証拠だ。要事に集中し続けるだけのエネルギーが足りてないのである。

「……ライネスさん、どうするんですか」

「ああ。一応保険はかけてあるんだがね。まあ、こちらとしては……」

言いかけたところで、きゅうと可愛かわいい音が鳴った。

恥ずかしそうに、目の前のグレイが自分のお腹なかを押さえており、それで朝食を食べそびれていたことに気づいた。

「とりあえず、ご飯にしようか」

「......は、は、はい。でも、こんなときにイゼルマから朝食をいた だくわけにも」

「紅茶とスコーンは要求したんだがね。──まあ、君がイゼルマの食事を遠慮したいというなら、こういうのはいかがかな?」

そう言って、私はスーツケースから、いくつかの瓶詰めを取り出 す。

保存用のビスケットの上にレバーパテを塗り、適度にピクルスを置いて、もう一枚のビスケットで挟み込むとそれなりの見かけになる。コツは親の敵とばかりにパテを分厚く塗ることで、少々不格好でもパテの質さえ良ければ絶対に美う味まくなる。

ついで、

「トリム」

「イエス、マスター」

その間に、水銀メイドに紅茶の用意もしてもらう。

水は持参してきたミネラルウォーターである。水銀メイドの手の 片方が、たちまちティーポット状に変形して内側の水を沸騰させ出 す。うん便利便利。ちなみに熱エネルギーを誤魔化すのは私の魔術 回路だとちょっと難しいので、同様に持参してきたアルコールラン プの燃料をトリムマウの変形した手の内に取り込んでいる。

沸騰した湯に茶葉が泳ぎ出して、すぐによい香りが部屋を満たした。

「……ライネスさん、こんなのいつも用意してるんですか?」

「まあ、だいたいはね」

実のところ、エルメロイを受け継ぐより以前はよく逃亡生活をしていたため、最低限の保存食料を持ち歩くのが癖になっているのだった。まさか、こんなタイミングで役に立つとは思ってもいなかったが。

トリムマウが紅茶を淹いれるのに合わせて、ナプキンにパテを 塗ったビスケットを並べた。

「ほい。冷める前にどうぞ」

「……あ、はい。今日の恵みに感謝します」

十字を切って、少女がパテを挟んだビスケットを口にした。

一瞬ぱちぱちと瞬きしてから、さほど大きくもないビスケットを ひとかけらずつ大切に味わいながら食べ出す。

私も、トリムマウの淹れた紅茶を一口含む。

酸味の利いた香気が、疲れた頭によく響いた。半分ほど飲んでから、今度はミルクと砂糖もたっぷりいれる。普段なら一杯目はストレートでたしなむのだが、今回はいささか早急に脳が糖分を求めていた。

目を閉じて、ゆっくり胃の底に食事が落ちるのを待つ。

心に立ったさざ波が落ち着き、思考がもとのカタチに戻っていく のを感じる。 「さて、さっきの黄金姫のことだが―」

こちらもビスケットを頰張ったところで、

「一イッヒヒヒヒヒと。また殺人事件だよ。いい加減憑つかれてるんじゃないか! いやいや憑かれてるのは当たり前か! お前ってば英国でもよりすぐりの墓守だし、魔術師が周囲から呪われるのも必然だよな! ウケケケケケケ!」

けたたましい声が、部屋に響いたのだ。

耳障りかつ大変に縁起の悪い内容で、つい私の唇は笑みを浮かべて、グレイへとうなずいてしまった。

「.....ライネスさん」

「うん。いいぞグレイ」

私が認めると、じゃきん、と固フ定ッ具クの外れる音がして、グレイの右手に鳥かごに似た形状の『檻』が現れる。目と口のついた奇妙な匣は、突然放り出されたことに動揺して、グレイと私とを交互に見やった。

「え? お? グ、グレイまさか?! いや待て落ち着け俺が悪かった止めてくれライネスさんってば!」

「......少し、お喋りしすぎです」

無表情に告げたグレイの次の行動は、決まり切ったものだった。

右手でしかと摑んだまま、思い切り『檻』を上下に打ち振ったの である。

「ふぎゃああああああああああああり」」

叫びは、地獄の罪人もさもあらんとばかりに、部屋に響き渡った。ううん、私のご馳走というにはいささか艶が足りないんだが我慢しておこう。

ひとしきり悲鳴を堪能してからうなずくと、グレイが合わせて手 を止めた。

目をぐるぐるさせた、おかしな匣の一丁あがりだ。

「……あ、悪魔め……」

恨みがましい声も、まあパテの口直しと言うところか。

そこで、私は視線を落とした。トリムマウをいれたスーツケース の内側から、とんとんと打音がしたのだ。あらかじめ取り決めてあ る警戒用の符丁であった。

「貴重なご意見拝聴しておこう。──ところでグレイ、話の続きをしたいところだが、どうやらお客人のようだ」

「.....はい」

少女が目を回した匣の表面を撫でると、するりとフードの右手側 に吸い込まれる。

次の瞬間、ノックもなく扉が開かれたのだ。

「いいかね?」

「不調法に押し入るのは褒められませんね」

と返してから、私は淡く目を細めた。

刈り揃えられた短髪に、筋肉質の身体つき。

ゆっくりと紅茶を一口含みつつ、その名を思い出す。

「あなたは……ミック・グラジリエ」

「イエス!」

不器用に片目をつむって、色黒の男は肯定した。

三人残っていた、メルアステア派の魔術師のひとりだった。

「何の用かな」

「いや、今妙な叫びが聞こえなかったか? ケージごと思い切りぶんなげられた野良猫みたいな声」

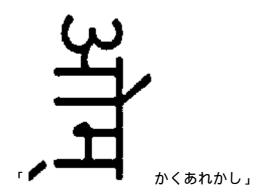
「気のせいでしょう」

しれっと答えて、グレイに控えるよう視線で示唆した。意外かも しれないが、いち早く戦闘態勢に入っていたのがこの少女である。 時計塔に負けず劣らず過酷な環境で育ってきたのは伊達ではない。 そういう意味では、時々離れて育った妹みたいな印象を彼女には覚 えるのであった。いや、厳密に私とどっちが年上かは訊いたことが ないのだが。

「そうか」

すう、と男が横に手を伸ばした。

その指先が、何かの印形をつくっていた。アジアの密教──タントラ・ブッディズムの講義で見たようなと私がいぶかしむより早く。



ばちん、と下品なほど大きな音がこだまして、何らかの魔力が部屋の内側をヴェールのように覆ったのを感じたのだ。こちらに害意があるという感じの魔力ではなかったが、目の前で魔術を行使されて、黙っているわけにもいかない。

「何のつもりかな?」

「一応結界ぐらいは張っておかないと。誰が聞いていてもおかしく ないしな」

手前勝手にうなずいて、大げさに男が一礼する。

「見ての通り、俺の魔術はタントラ・ヨーガの我流でね。氏うじが 悪いもんだから、いろいろ混交してる。で、手の内を明かしたんだ から少しは信用してくれるかな?」

「......つまり、他人には聞かせられないようなことを話すと?」

「はは、まあそうなんだがな」

頭を掻いて、色黒の男はにやついた。

好きな笑みではなかった。幼い頃から何度も見てきた──最近は別の種類のものも見るようになっていた──上っ面だけの笑顔。

そして、彼はそっと人差し指を唇にあてて、囁いたのだ。

「実は、俺はスパイでさ」

「.....は?」

あまりにも平然と話され、私の眉が中途半端なところで止まって しまった。

にやにやした笑みを浮かべたまま、ミックは言葉を続けた。

「もともと、この社交会にはとある派閥のお偉方に依頼されて、調査のつもりで入り込んでたんでね」

そこまでは、ままあることだ。

時計塔の派閥抗争は極めて入り組んでいる。二重スパイや三重スパイもさほど珍しいことではなく、源流刻印による分家もこうした裏切りを少しでも減らしておきたいという、ある種涙ぐましい努力の結果なのだった。

「で、そのスパイさんが私に何の用なのかな?」

「あんたと取引したいんだよ。エルメロイの姫」

と、彼は口にしたのだ。

「私と? 今更何をだ?」

なるべく用心深く、問いかける。スパイなんかに迂闊な言質を取られれば、エルメロイのような弱小派閥などそれだけで吹き飛びかねない。

しかし、彼の言葉は予想したいずれとも違っていた。

「─このまま、イゼルマを崩壊させないか?」

*

割ひょう軽きんな声音は、しかし切実な意味をともなって部屋に 響いた。

イゼルマを崩壊させる。

それは、そのまま三大貴族バリュエレータへの宣戦布告にも等しい。黄金姫の死も重ね合わせれば、時計塔全体を泥沼の戦争に巻き込みかねない一手であった。それでいて、そんな途と轍てつもない提案を口にした男はへらへらと笑っているきりだ。

「.....ライネスさん」

背後で、グレイの声音さえもがかすかに震えていた。

正確には魔術師ならざる彼女でも、それがいかに狂気に彩られた言葉か分かるのだ。気軽なほんの一言が、ひとつの世界を滅ぼす呪文であるかのように、彼女は音を立てて唾を飲み込んだ。

私は、そっとトリムマウの入ったスーツケースを引き寄せながら、慎重に尋ねた。

「……何を言ってる?」

「何もこうも、そのままなんだが」

と、ミックが肩をすくめる。

まるで悪びれない態度で、自分がスパイだと言った男は、こちらを見据えてくる。にまにまと笑った顔の中で、瞳だけが笑っていなかった。試験中のモルモットでも見つめているような目だ。

視線を外さず、私は問うた。

「犯人が自分だと、告白してるのか」

「いやいやいや」

両手をあげて、おどけた態度でミックはかぶりを振る。

「これは偶然だよ偶然。いや本当にさ。黄金姫があんな風に死ぬな んざ、まるで思ってもみなかった」

意気消沈とばかりに、がっくりうなだれて見せた。

「だけど、偶然も一旦起こってしまえば必然に組み込まれる。黄金姫が死んだというのはもはやただの事実だろう。ここから先はそうした前提で動くしかない。いやたとえばさ。たとえばの話だが、エルメロイ派―貴族主義にとって、バリュエレータの弱体は望むところじゃないか?」

言わずもがなのことを、ミックは口にした。

こうもあけすけに、普通なら言外に匂わせるべき内容を話しているのは、こちらを若人となめきっているか、所詮は弱小派閥と上から目線で脅しにかかっているか、まあその両方だろう。

Г......

私の脳裏を、いくつかの思考がよぎった。

小さくため息をついて、口を開く。

「何が、目的なのかな?」

「何がって? 今言ったところだろ?」

きょとんとしたミックを、私はわざとざっくばらんな口調で問い つめる。

「あなた方メルアステア派はあくまで中立のはず。民主主義のバ リュエレータが弱体しようがどうでもいいことだろう。ということ は、目的は別にあると考えるのが普通だよ」

「……ははは。さすがに、誤魔化されてくれないか」

わざとらしく、ミックはこほんと咳払いした。

もっとも、誤魔化すつもりなど微み塵じんも感じられなかった。 単に結論をこちらに言わせたかっただけだろう。人間、自分で辿り 着いた答えはどうしても信用してしまう癖がある。こちらを騙すつ もりかどうかはともかくとして、話を円滑に進めるために、前提を 明確化したというわけだ。

そうすると、最初にイゼルマを崩壊させるのどうのと言い出したのも、こちらが真剣に考えるように─選択肢への反応を絞り込めるように、という思考の結果だろう。スパイだなんだとふざけた主張をしながら、かつ適当極まりない態度でいながらも、少なくともこの相手の話の運び方は理に適かなったものであった。

そんなこちらの考えを見定めてか、にんまりと笑ったまま男は切り出したのだ。

「実はひとつ、手に入れたい呪物があるんだよ」

呪物。呪体。

呼び方はいくつかあるが、おおよそ魔力を持った触媒や物品の総称である。強大なものは魔術礼装や術式の核に使われ、その有り様を決定づけることとなる。ただし、あらゆる神秘の衰退し続ける現代では手に入る呪物の質は落ちる一方であり、上質の呪物となれば天文学的な値段で取引されることも稀まれではない。

トリムマウを成り立たせているのも、もとになった月霊髄液 ヴォールメン・ハイドラグラムの中心になる呪物なわけで、上質の 呪物の蓄積量が派閥の権威とイコールになることさえあるほどだっ た。 「とある幻想種の血が混じった品でね……」

「お断りしましょう」

言下に、私は拒絶した。

目を剝いた男が、大げさに手を打ち振りながら、訴える。

「おいおいおい? もう少し話を聞いてから断った方がいいんじゃないか? 少なくとも情報収集にはなるだろう?」

「ここまで聞いたからには、とやられてはかないませんので」

「ははっ、用心深いこった」

刈り上げた髪を搔いて、ミックは苦笑した。

「なら、いいさ。こっちも無理強いはしない。あんたらが俺の正体 を吹ふい聴ちょうするとは思えないしな」

「……すれば、やっぱり私たちが犯人でしたと告白するようなものですからね」

実は、スパイが突然自白してきたんですなどと言って、信用する者はいまい。まして、こちらは殺人事件の容疑者だ。疑わしきは罰せず──どころか、とりあえず両方ぶち殺しておけばいいんじゃね、ぐらいに処理されるのが関の山だ。

「よくお分かりで。──ではまた」

次に会うときは違う返事をすることになるぞ、と言わんばかりの 態度で、肌黒の男は踵を返した。

傲慢な気配が部屋を去ってしばらくしてから、私は埋もれるよう にベッドへ横たわった。

両手で顔を覆う。

眼球が熱く、瞼はひどく重かった。

このまま沈み込んでしまえたら、どれだけ幸せだろう......

「.....ライネスさん」

「ん?」

「いえ……顔に爪をたてると、痕が残りますよ」

「.....え?」

気づくと、目を閉じていた。顔を覆ったまま寝入ってしまっていたのか。

「わっ」

どっと冷や汗が噴き出て、すぐに収まる。

窓から覗く太陽の角度だと、まだ昼過ぎといったところだ。どうやら二時間ほどの仮眠ですんだようだった。ほっとため息をつきつ、 頰を撫でる。

「痕.....か」

まだ気にするような年齢じゃないが、じきに有力派閥の奥方みたいに加齢防止の魔術を探す日がくるのかもしれない。社交会で出会ったマイオのような薬師は、本人の腕次第では引っ張りだこで、植ユ物ミ科ナの結構な大きな収益となっていたりする。

それで、気が付いた。

「一そうだ」

と、上半身を持ち上げて呟いていた。

「ライネスさん?」

「ひとつ、思いついた。ここなら、まだ間に合うかもしれない」

「ここなら?」

「ああ」

小さくうなずき、唇がほころぶのを感じた。

「せめて、手がかりぐらいは見つけないとね」

すぐさま、私たちは月の塔へととんぼ返りしていた。

入り口には入らず、周囲の地面を念入りに観察する。うっかり踏み散らさないように、慎重に草葉を搔き分けながら、その証拠を探した。

やがて、

「……ビンゴ」

と、呟いた。

地面には、私の目でも分かるほどに、はっきりといくつかの足跡が残っていたのだ。都会と違って通りがかる者もほとんどいないこの場所なら、社交会の後の足跡を追跡できるのではないかと、グレイの言葉からそんな発想を得たのである。

「トリム、これなら追えるか?」

「承知しました」

ただちに、トリムマウの手がその足跡に触れる。

数秒ほどそうして、彼女の唇は肯定を返した。

「足跡の種類は十数人。その内、あの日の黄金姫様の足跡は特定可 能です」

「よし!」

思わず、ガッツポーズをつくってしまった。

いささかはしたないのは許してほしい。なにしろ、これだけ手詰まりだった中の、ようやくの光明なのだから。

「すぐ追ってくれ」

「了解です」

足跡に触れたまま、水銀メイドは手元から溶け出して、たちまち 地面へと流れていった。

こうしたパターン認識と統計は、トリムマウにとってお手の物だ。足跡なんてあまりに古典的な手段過ぎて、すっかり頭から抜けていたが、逆に犯人にとっても盲点な可能性はある。超越を気取っている多くの魔術師にとって、地道な捜査なんて概念は視野の外だからだ。

「グレイ、ついてきて」

本来の月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムの姿に戻り、鬱 うっ蒼そうと茂った森へと滑り始めたトリムマウを追って、私とグ レイも走り出す。

残念なことに、私とトリムマウとは五感を共有するには至ってないのである。使い魔の術式でくくっているわけではないからだ。彼女を成立させているのは、あくまで月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムという時計塔の歴史でも稀なる魔術礼装であり、人格やヒトガタはあくまでその基礎の上にほんの少し私が手を加えたモノに過ぎない。

だから、こういう状況では素直に追いかけるしかないのだが、あまり森を歩く格好ではなかったように思う。灌かん木ぼくや枝にしょっちゅうドレスがひっかかるし、自律判断に任せた以上トリムマウは容赦なく進んでいってしまう。

湿った土の臭いが鼻をつく。

人の手が入っていない森には、さまざまな臭いがこもる。

噎むせ返るような緑。腐った落ち葉や折れ枝に、名もしれぬ動物の糞ふん尿にょうが入り混じる。もとより魔術師が好むような森はたいてい霊力が濃く、珍しい毒草や猛獣が生息することも稀ではなかった。いや、そうした森の神秘を、人間たちが開拓していった経過こそが、古代から中世における西欧の歴史だったとも言える。古い魔女伝説の多くが、森の内で始まるのはこれが理由である。

懸命に追う内、やがて森の空気に白いものがたれこめはじめた。

(霧.....?)

もちろん、湖水地方に霧が多いのは知っている。私が来たときも あちこち霧が出ていたし、濃淡はあれど一年の多くが白く美しい霧 に覆われるからこそ、この地方もまた数多の浪漫あふれる伝承を生 み出してきたのだろう。

Г......

なのに、心臓が高鳴るのを覚えた。

ひどく嫌な予感がした。まるで子供の頃に路地裏の闇に感じていたみたいな、理由のない怯おびえであった。そうした直感を魔術師にとって希け有うなる素質だとか言ったのは誰だったろうか。

「え.....?」

声が出た。

不意に、先を行くトリムマウの姿を見失ったのだ。

ばかりか、自分とトリムマウとをつなぐ魔力の流れすら断ち切られたのを感じた。

「―結界?」

さきほどミックが使ったような一しかし、もっと大規模のそれ。

正体を見極めんと、熱を持ち始めた目を凝らしたところで、異変は別の形を取った。

豁かつ然ぜん。

葉擦れのさざめく中空に、刃やいばが走ったのだ。

「……ライネス、さんっ!」

背後で、叫びが飛び上がった。

硬い音が、私の頭上で交錯した。

刃とともに交錯した影はふたつに割れ、その片割れがフードの少女となって地面に着地したのである。

「グレイ.....!」

フードの少女が手にしているのは、死神の鎌グリム・リーパー。

あのアッドが変形したものだと、誰が想像するだろう。この少女が求めるとき、口汚い匣はその身体を退魔の武具へと変ずるのであった。

ならば、その刃と打ち合ったものは?

狭さ霧ぎりのただ中、グレイの目の前で蠢うごめいているモノは、ひどく不吉なカタチに揺らめいていた。

「ははははは! おいおいなんだよこれ! ずいぶんゴキゲンな相手だな?! まったくお前らと付き合うのは飽きないよな!」

陽気なアッドの声も、霧の中では虚うつろに響くようであった。

敵の異様に長い両手は、五本の指ではなく鋭い刃に置き換わっている。両足は逆関節とでもいうべき角度にねじまがり、上体はそれに合わせてほとんど地面を舐なめるような角度でのめっていた。

それは―-奇怪な人形だった。

「.....これ、は?」

グレイが、目を見開く。

「自動人形オートマタ?!」

私も、思わず声が裏返った。

まともに戦闘可能な自動人形オートマタなど、もはや作製不能な 代物ではなかったか。トリムマウのように本質が別ならともかく、 人体模造の概念はとうに衰退してしまっている。人体の解剖図が多 くの人類の知識として行き渡り、自分たちの内奥に神秘などないの だと納得してしまった時点で、それは魔術として成立しなくなっ た。 いや、兄の仮説では、人体に知られざるブラックボックスがある 以上神秘もまた消滅したわけではないということだが、よほどの魔 術師でも自動人形オートマタの分野においては数百年前の骨こっ董 とう品にかなわないというのは事実であった。

ならば、これは─。

(骨董品か? いや、それにしては妙に新しく見えるぞ)

値踏みしながら、ぎりと奥歯を嚙む。

トリムマウなしだと、戦闘用の魔術にはほとんど持ち合わせがない。私の魔術はおおよそが研究用に調整されているためだ。

(くそ、だから兄にも授業の比率がこれでいいか確かめていたろうに!)

エルメロイの秘術を引き継ぐにはこの授業配分が一番望ましいとか、頑として譲らなかったのである。ああ、もちろん先代へのひけめを利用していたぶっているのは私なのだが、あの男はいろいろ引きずりすぎなんだ!

「……ライネスさん、後ろへ!」

グレイが駆けた。

森の中ではいかにも使いにくそうな大鎌を、小さな体たい軀くで軽々と振り回す。それこそ幼少の頃から馴な染じんだ玩具とでも言わんばかりに、鎌と少女とは似つかわしかった。

三合。

たてつづけに、少女と人形の刃が打ち合った。

死神の鎌グリム・リーパーが描く弧と、自動人形オートマタが放 つ直線的な攻撃とが、けたたましい速度でぶつかりあう。多くの魔 術師と異なり、単なる肉体の『強化』だけではなく、『強化』と繊 細な技術とを融合せしめたのが、グレイの凄まじい戦闘能力の由縁 であった。

(.....だけど)

グレイの持ち味は、対霊戦闘にある。

本人は幽霊に恐怖しているくせ、その能力は大英帝国でも特筆される霊園で、なお歴代屈指と称されるほどだった。あの剝ア離ド城ラでさえ、軍勢といえるほどの霊を相手に一歩も退ひかなかったという。あるいは魔術師相手でも同じ技術が流用できるだろうが、自動人形オートマタが相手では実力の数割も発揮できるかどうか。

Г......

黙したまま、自動人形オートマタが身を低くした。

目の前のグレイを、片手間に屠ほふれる相手ではないと認識した のか。だとしても、次なる変化は想像せざるものだった。

自動人形の四肢が、さらに分裂し、刃を生やす。

四肢だけではなかった。

端整につくられていた顔までもがらりと割れて、その目を殖ふや したのである。

「な……っ!」

三面六ろっ臂ぴとはつまりあまねく観て、あまねく届くという神性を表現したものだが、この製作者もその故事を魔術として利用したものか。だったら、その発想はオリエンタリズムなどというよりもやはり現代らしすぎる。

自動人形オートマタが跳んだ。

もはや人のフォルムにあらず。蜘く蛛もか蟷螂かまきりのごとき 六つの刃を、死神のそれが迎え撃つ。

三合。

八合。

一一気に十七合。

手数と視界が増えたことが戦況に変化を与え、今度はグレイの鎌 の方が遅れを取りはじめた。いや、たったひとつの武器で六つの刃 に対処しているグレイを褒めるべきであろうが、私の目にも少女の 刃より、自動人形のそれが一手先を行くことが多くなり、次第にグ レイは防戦一方となりはじめた。

両者の凄まじさに森の木々が震え、緑の葉を舞い散らせる。

その葉もまたたてつづけに断ち切られ、狭霧に刃の軌跡を浮かび上がらせた。

「つー!」

「おい、グレイ?!」

アッドの声と同時、少女の右上腕が裂け、一筋の血が走った。

痛みのためか一瞬上体が傾き、その隙に自動人形オートマタが距離を詰める。もはや一個の嵐にも比する刃の怪物。死神の鎌グリム・リーパーの表面に浮いた眼球が人形を睨みつけるが、何の制止にもならず、ぐるんと回転した冷たい刃が袈け裟さ懸けに降り落ちた。

しかし。

寸前、光が人形を打撃したのだ。

衝撃に打たれた人形はかすかに体勢を崩し、片手殴りに振るわれたグレイの鎌が、強引に相手を吹き飛ばした。

「.....ライネスさん」

「せめて、この程度はね」

腕を突きだしたまま、ふん、と私は鼻を鳴らした。

といっても、今のは魔術でもなんでもない。

単に、魔力にカタチを与え、物理的な威力を伴わせた魔弾である。かりにも君主ロードの家門がこんな魔術に頼ったなどと知れれば、それこそ恥はじ曝さらしだろう。噂のルヴィアゼリッタならば、フィンの一撃と謳うたわれる呪いにまで昇華させるのだろうが、今の私には望むべくもない。

数ヤードほどの距離をおいて、草むらから立ち上がった人形はゆるりと首を左右に動かした。

案の定、何の傷も負ってはいない。

こちらの恐怖を楽しむかのようなその様子に、グレイはぼそりと 囁いた。

「.....アッド」

声とともに、突然気温が下がったように思った。

グレイの周囲に、不可視の渦のごとき現象が巻き起こり始める。

少女と鎌とが、周囲の魔力を吸い始めたのだ。相手が実体を持たざる霊ならばこれだけで致命傷となりうる、墓守としての異能。だが、魔力が定着している自動人形オートマタ相手では、単に自分の 『強化』を増幅するだけにとどまる。

それでも、必要と感じたのだ。

自動人形オートマタの顔が笑った。

三面が哄こう笑しょうした。

走った。

激突。

人形の刃と鎌がぶつかりあい、その部分を支点として、少女の身体が優美に宙返りした。ムーンサルトを思わせて、死神の鎌グリム・リーパーもまた三日月を虚空に刻んだ。一種の軽業と見せかけて、しかしグレイの渾身をかけたカウンターの一撃は、落下の勢いも乗せつつ力ずくで人形を拉ひしぐ。

ガギン、と異様な音が鳴った。

受けたはずの人形の刃が、砕けたのだ。

「イッヒヒヒヒヒヒヒ!これで力勝負なら負けなしなんだぜ!」

「.....もうひとつ!」

アッドの叫びとともに、グレイが鎌を振りかぶる。

しかし、今度は少女が硬直する番だった。打ちのめしたはずの至 近距離で、人形の口が大きく引き裂けて──そこから、臓器の槍のご とき奇怪な器官が飛び出たのだ。

いかなる歴戦の強者とて、このような不意打ちに抗あらがえるとは思えない。

ならば、すんでで身をかわしたのは、最前の『強化』増幅が働いただけではなく、まさしく天性の勘によるものだったか。それとも、私も知らない何らかの魔術的な支援がまだグレイに働いていたのか。

「つ--?!」

バク転とともに、グレイが引き下がる。

しかし、自動人形オートマタはそれ以上の追撃はしなかった。代わりに、少女が間合いを取ったのと同じくして、樹上へと飛び上がったのだ。こちらが視認できない速度で枝と枝との間を飛びすさり、霧の向こう側へと消えていった。

「―逃げた?」

「……そのようです」

アッドを仕舞いながら、小さくグレイが口にした。

声音に忸じく怩じたる雰囲気があるのは、油断したという思いのためだろうか。私からすれば、ほぼ無傷で切り抜けられただけでも大したものなのだが。いや、実際彼女に来てもらってなければ、ここで何もかも終わっていたわけで、用心深かった過去の自分にも改めて感謝しておきたい。

「で、トリムは」

どこに、消えたか。

少し考えて、懐から鎖を取り出す。先端にアメジストのはまった 鎖で、よく地下水や鉱脈を探すのに使われる魔術探索ダウジング用 のものだ。さきほどグレイが魔力を吸ったせいで結界は薄らいでい る。今の私の装備でも突破は可能と見た。

手首に鎖を絡め、先端のアメジストを真っ直ぐに垂らす。

「一調えよadjust」

ぴくり、と鎖が揺れた。

その方向へ、視線を動かす。すでに熱を持っている魔眼に力を込め、思い切り鎖を打ち振る。

「一さあ、汝の先触れを曝せThou, betray your sign!」

霧が、揺れた。

完全とはいかなかったが、視界が大きく晴れて、森の前途を露わ としたのである。

「急ぐぞ!」

声をかけ、奥へと走る。

はたして、遅からず目的地には辿り着いた。

開けた場所だった。

泉のほとり。

鬱蒼と茂った森の中で、そこだけが特別な空間に見えた。滾こん々こんと湧き出す泉からすれば実際にそうなのかもしれない。ある種東洋的な概念だが、霊穴が泉の位置と一致するのはよくあることだ。西洋でも泉を湧き出させるという御み技わざは、長く聖人の奇き蹟せきとされてきたものだった。

だが、今は。

「.....トリム?」

そこに、トリムマウは佇んでいた。

水銀の肌に秋の陽光を照り返させて、ただ静かに足下を見つめていた。いや、本当に見ているのか? もとより生物ではなく、ヒトガタを模倣しているだけの彼女にとって、瞳は感覚器官ではない。

なにより、私との魔力のつながりはいまだに回復しておらず─

^г——э! і

息が、止まった。

「そん……な……」

背後で、茫然としたグレイの呻きが空気に溶けた。

あってはならないことだった。トリムマウのその手は、アカイロに汚れていた。目眩のするようなその色よりも、しかし、今の私は泉に浮かび上がったもうひとつの人影に釘付けとなっていた。

どうしようもなく、それは致命的だった。

「.....カリーナ」

いや、レジーナであったろうか。

黄金姫と白銀姫に付き従っていたメイドの片割れが、死体となって泉に浮かんでいたのであった。

「……ライネス、様」

ぎこちなく、トリムマウが振り向いた。

手から滴ったアカイロは、水銀の肌に不思議なほどよく似合っていた。あの部屋にこもっていたのと同じ血臭は、ほとんどが風に晒さらされて感じられなかった。

「お前.....」

呻いた私の背後から、別の声がかかった。

「おっと待った。動かないでもらおう。こういう場合、現場保存というのかな? それとも現行犯逮捕というべきか?」

「っー!」

その声音は、まさに私たちの監視を買って出た相手だった。

不吉に木の葉を舞い散らす森のただ中から、緑のドレスの老女 は、真っ直ぐこちらを見つめていた。

「ロード・バリュエレータ。……なぜ、ここに?」

「お互い様だ。さっき、おかしな魔力の気配を感じたものでね」

あの結界だろう。私が森の中で結界に閉じ込められたとき、同じように外部のイノライも気づいたのだ。後は私たちが自動人形オートマタやらなにやらでグズグズしている間に、ここまで追いついてしまったというわけだ。

「……事情を説明させていただいても?」

「もちろん。だが」

「……ライネス……様」

トリムマウが、緩慢に動いた。

私の訪れで、断ち切られた魔力の経路を再生しようとしたのだろう。

「だが、それは駄目だ」

ロード・バリュエレータの手が、腰にくくられた小袋に触れた。

ひとにぎり何かを摑み上げ、短い呪言とともに、老女が投げはなったのである。

その砂が大地に振りまかれた瞬間、本来不定形であるはずのトリムマウが完全に縛り付けられたのだ。

(砂絵.....!?)

あたかも密教の砂曼まん荼だ羅らのごとく、振りまかれた色砂が トリムマウの姿を忠実に再現していたことも、私は視認した。

これが、ロード・バリュエレータの魔術。

びしりと停止したままのトリムマウを尻目に、老女の後ろからさらなる気配が現れた。

「.....カリーナ」

と、双子のメイドの片割れが呻いたのだ。

(.....ああ)

最初の印象通り、ここで殺されているのはカリーナであったらしい。

だが、それが分かったところで何になる?

湿った土を踏む足音は、当然のようにもうひとつあった。

「事情を説明していただけるかな。エルメロイの姫」

地面を杖でにじり、バイロン卿が訊いたのだ。

メイドともどもこのタイミングでやってきたのは、ロード・バ

リュエレータと同じく結界の魔力を感じたに違いない。あるいは ロード・バリュエレータと同道したのかもしれないが、今となって はどちらでも同じことだ。

「その水銀メイドがカリーナを殺した後、証拠隠滅に泉に投げ込も うとしたようにしか見えないが? これから重りでもつけるつもり だったか?」

Г......

いや、まったく。

いささか無理のある状況にせよ、現実として説得力は強固だ。自 分も逆の立場ならそのようにしか見えないだろう。

「言い分はありますが、解明のためにもトリムマウを解放してもら うわけには?」

「殺人犯に爆弾を渡す愚か者がいるかね?」

これまた、至極当然とうなずくしかない。

八方ふさがりだ。

いくらなんでも、ここから挽ばん回かいする手段は思いつかない。あまりにも明白な──露骨すぎるほどのカタチで、トリムマウは殺人を犯しており、対する私はろくな弁明もできずに立ち尽くすばかり。

結界と自動人形オートマタのことを話す?

いいや、せめて証拠と仮説がセットでなければ、一笑に付されて終わりだろう。私の前に立ち塞がっているのは真実を求める警察や容疑者ではなく、隙あらばバルトメロイ派を貶めんとする敵対派閥の長老たちなのだ。

つまるところこれは、けして事件の解決に向けての行動ではない。犯人として都合がよい相手が敵対派閥なら、ついでに吊つるしておけばよいというだけの魔女裁判なのだった。

バイロン卿が、さらに一歩、二歩と近づいてくる。

「どうしたのかな? エルメロイの姫。観念したということか」

「……はは、ご冗談を」

減らず口で答えてはみたが、皆目見当がつかなかった。

こちらの調べようとする端から、泥沼に埋まっていく感覚。いいや、すでに私は頭頂まで沈み込んでいるのに、気づかないふりをしているだけではないか。

「ライネスさん……」

グレイの声にも、聞こえないふりをした。

自分にできるのは、ただ降参をくりのべることだけだ。

時間稼ぎにもならない。それでも、かすかな意地だけが胃の底に わだかまって、容易に私を屈服させなかった。

しかし、それもほんのわずかのことだろう。

ほんの些細な、ボタンの掛け間違えみたいなものだろう。

だって私はもう詰んでいて、愚にも付かない選択を積み過ぎてしまって、ここに至るまでの罪をあらいざらいに精算するしかないところまで行き詰まっていて......

なのに。

「……一体何をしてるんだ。レディ」

ロード・バリュエレータたちと違う方向から、長身の影が差した のだ。

思わず、振り仰いだ。

その男は、唇に細い葉巻をくわえていた。

長髪も、纏うコートも漆黒。肩から赤いマフラーを垂らして、ひ

どく不機嫌そうに眉間に皺を寄せていた。一見傲然とも思える姿が、実のところ致命的なほどの自信のなさに裏打ちされていることを、私は知っている。あまりに欠けたものが大きすぎて、かえってその魔術師を一人前のごとく飾りあげてしまったという事実を。

だからこそ、私には眩まぶしすぎる相手だった。

「......兄上......」

「まったく、少し目を離すとこれだ。お前はもう少し無軌道さを減らせないのか」

心配していただとか無事だったかとか、そういう類のことは欠片 も口にせず、我が兄はただいつもの不機嫌そうな顔でこちらを見下 ろしていた。

「.....つ」

つい、調子が戻ってしまう。

「いくらなんでも、到着が早くないかな? まさか、可愛い妹のために泡を食って来てくれたのかな?」



「し、師匠?」

突然の登場に狼狽うろたえ、グレイが瞬きする。

食事の直前、一応保険はかけてある、と言った。

亡命を希望するなどという黄金姫の申し出を、念のために携帯電話で伝えておいたのだ。古い魔術師の工房の場合、通信用の魔術などはたいてい遮断されているのだが、現代科学へのセキュリティはがら空きなことも稀ではなく、イゼルマも例外ではなかったのである。

ただ、翌日の昼過ぎに、兄が直接やってくるとは思ってもいなかったのだが。

「お前の面倒を他人に任せられるか。残っていた大教室の授業は シャルダン翁に依頼してきたがな」

エルメロイ教室の、古株講師の名前であった。

もともと三級講師だった我が兄に説得され、隠居していたところ を引っ張り出された御仁であり、ご高齢なのにご苦労なことだとは 思う。

ひたすら不機嫌そうに顔をしかめ、この悽せい愴そうな状況で、 いつものように彼は言い募る。

「ああ、ウェスト・コースト本線に乗って、ウィンダミア駅まではすぐ着いたがね。何分この城自体は一種の結界内なせいで、地元の人間に場所を聞くわけにもいかなかった。おかげで、どれだけ靴が汚れたか」

「どうせ手入れはグレイでしょう」

「他人に面倒をかけたことは反省していただきたい」

どれほど急いでやってきたのかなどと、こちらも訊いてはやらない。せっかく磨いてもらった靴を泥だらけにしたことも、感謝なんてしてやらない。メイドの死体が浮かび上がり、血染めのトリムマウが停止したこんな現場にありながら、なおも私たちを欠片も疑わないことにも、心が動かされたりするはずがない。

そして。

顔色ひとつ変えず──こういう演技だけはうまくなったものだ── 我が兄は、この場で最も権威を持つ老女へと向き直った。

「ここは私が預かりましょう。かまいませんね? ロード・バリュ エレータ」

「ほう。オレにそれを言うのか」

むしろ愉たのしげに、イノライは微笑した。

「言いますとも。技量はともかく、ロードという一点で、私とあな たは対等です」

ああ、足が細かく震えているのを隠せていると思ってるのだろうか。十二の君主ロードの中でも特別視される三大貴族──ロード・バリュエレータに対して、どうしてこの男は真正面から立ち向かおうとするのだろう。そんなのは最初から馬鹿げている。あまりにも格が違いすぎて、象に立ち向かう蟻ありより能なしに映るじゃないか。

だけど、まあいい。

そういう兄だから、私もエルメロイを任せてみようと思ったのだから。

「もう一度、言いましょうか」

と、兄は正面から切り出した。

踵かかとを鳴らし、手袋をはめた腕で目の前を切り払うようにして、我が兄は堂々と宣言したのである。

「ロード・エルメロイII世として、この事件を預からせていただく」



「ロード・エルメロイII世として、この事件を預からせていただく」

ほとんどそれは、宣戦布告に匹敵する内容だった。

突然乱入して、自らの子弟を庇かばったあげく事件を預からせると言い放つ──これを宣戦布告と言わずしてなんと言おう。

実際、

「―そうはいかないだろう」

と、拒絶したのはバイロン卿であった。

ロード・バリュエレータに任せて事態を静観していたものが、兄 の登場で引っ込んでいられなくなったらしい。

「あなたの妹御への疑いは、度を超えている。いかに君主ロードの 命とはいえ、簡単に事件を明け渡すのには承伏しかねる」

遠く、鳥が鳴いた。

森のただ中へ凝集された魔術師の敵意に、耐えかねたかのよう だった。

Г......

その当主へと対たい峙じして、我が兄はしばらく視線を伏せてい た。

それから、

「黄金姫の術式は、特に隠すつもりもないのでしょう」

「……っ、何のことだ?」

一瞬呼気を止めたバイロン卿へ、兄が言い募る。

「陽の塔、月の塔。黄金姫に白銀姫。これだと太陽と月の術式を黄金と白銀になぞらえているのは丸わかりだ。くわえて、術式の基本は錬金術がモチーフらしい。太陽や月を比喩として使うのも、とりわけ西洋圏の錬金術ではよく見るパターンです。もともと錬金術の目的は卑金属を黄金に変える―という比喩のもと、俗世にまみれた人間を神に匹敵する存在にするための大いなる作業アルス・マグナであるとされていますが、つまり黄金姫、白銀姫における究極の美とはそういうことなのでしょう」

つらつらと、台本でも読み上げるかのような流ちょうさで、兄が 黄金姫の術式を嚙み砕いていく。

いや、この場合、本当に嚙み砕いていたのかもしれない。

最初の言葉こそ苦々しげに聞いていたバイロン卿が、続く台詞を 耳にするや、みるみる顔色を変えていったからだ。

「ですが、実際に陽の塔と月の塔を見て、感嘆いたしました。実際に黄金姫を形成するにあたって、あなたがやっていることは、人間の内側に惑星の運行を取り入れる行為だ。小宇宙ミクロ・コスモスと大宇宙マクロ・コスモスの照応は魔術の基本ですが、普段から暮らす住処に取り入れることによって、人間の生活そのものを惑星の運行にしてしまうとは、発想まではできても実行しうる者は希少です。

おそらく、あなたがたの食事や睡眠、排便さえもそうした周期に 則っているのでしょう。医食同源と古い国が言ったように、口から 入るものこそは人間の肉体を構築する。たとえば、秦の始皇帝が不 老不死を求めて水銀を食した事自体は間違いじゃないが、同時に星 のごとき肉体を形成しなければ毒となるだけだ。あなたがたはその 理屈を十分に知って、食事と生活、さらには環境までも自らの肉体 と合一させている。この土地の霊脈レイラインひとつとってもそう だ。東洋の禹う歩ほやチベットの独自技法のように、大地から魔力 を取り入れる歩法を日頃から強制してるのでしょう。

太陽と月は天の諸力。食事や生活は地の諸力。つまるところ、黄金姫や白銀姫とはこの土地の化身ともいうべき存在になりうる。まして、あなた方の家系がそんな行為を代々ずっと重ねてきたというのなら―」

「やめろ!」

叫びが、こだました。

憎々しげに、バイロン卿が我が兄を睨んだのだ。

さもあらん。目の前で自らの魔術を解体されるなど、魂を暴かれるにも等しい行為だった。しかも、これほど高位の魔術師が揃った中でやられれば―たやすく模倣されるようなことはなくとも、秘匿していた技術を持って行かれる可能性は高い。

各派閥が押さえている魔術特許は、それこそ魔術師の生命線とも いえる利権なのだ。

「ええ。ではやめておきましょう」

あっさりと、兄もうなずいた。

重い沈黙が、暗雲のようにたれこめた。

幽鬼のごとく、バイロン卿は我が兄を見つめていた。目の前で家 宝を盗み取った怪盗でも睨みつけるようであった。

「なるほど、これがロード・エルメロイか」

苦く、言葉は地面を這った。

「できれば、II世をつけていただきたい。私がその名に見合うとは 思えない」

「……ご希望とあらば」

皮肉げな笑みを浮かべて、バイロン卿がうなずく。

それを見てから、我が兄も深く腰を折り曲げた。

「……では、どうぞバイロン卿の広きお心をもって、私が事件の調査に関わるのをお許しいただきたい」

「.....いいだろう」

苦々しい顔で、バイロン卿が認めた。

ここで却下して、さきほどの続きをやられてもかなわないから だ。兄が刺した釘は、確かにバイロン卿の選択肢を制限していた。

しばし思い悩んだ後、森の雑草をにじって、バイロン卿が口を開 く。

「ただし、時間制限はつけさせてもらう。まさかこんな状況のまま数日も放置しておくわけにはいくまい。──そう、黙っていられるのは明日の夜までが限度だ」

「承りました」

「……それ、本当に受けていいのか、兄よ」

一応、私からも耳打ちしておく。

しかし、対する兄は軽く目め配くばせしたきりで、バイロン卿と 対峙していた。

森の濃い空気の中で、鉄錆びた臭いを鼻の奥に感じた。

もちろん錯覚だ。だが、そんな錯覚を催すほどに、対峙したふたりの気配が密度を増していく。その気配が魔力となって駆動すれば、たちまち千変万化の魔術となることは明らかだった。また、この場合はどちらの魔術師が屠られるかも。

魔術師としての、強者と弱者の格付けなどとうにすんでいる。

それでも弱者は強者から目を離さず、

「.....ちっ」

バイロン卿強者は、小さく舌打ちした。

すう、とその視線が泉のほとりで硬直したままのトリムマウへと 流れた。

「もうひとつ。こちらの月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムを お返しするわけにはいかない。なにしろ殺人に使われた可能性があ るのだからね」 「ええ。仰ることはもっともです。仕方ないでしょう」

これまた、兄はうなずいた。

ただし、コートの内側から一枚の紙切れを取り出して、ぬけぬけ と言ったものである。

「代わりに、預かりの証文は書いていただきたい」

「......くくく。そこで魔術に頼らないあたり、君は傑出してるよ」

これは、傍観していたイノライが苦笑したのだ。

自己強制証明ギアス・スクロールとまでは言わずとも、相手との取引を円滑に進めるための魔術はいくつか存在する。しかし、兄の技倆を考えれば下手な魔術を介入させるのは自殺行為なわけで──結果が預かりの証文という、ひどく原始的な方法になるわけだ。

苛いら々いらした顔でサインした紙を突き返してから、バイロン卿が踵を返し、一瞬未練げに振り返ったメイドのレジーナもそれについていった。

ついで、

「なかなか面白かったよ。ロード・エルメロイII世。では、ごきげんよう」

イノライが腰の袋に触れると、再び砂がこぼれ、固定されたトリムマウを包み上げる。

原理的にはトリムマウと同じようなものなのだろうが、おそらくこちらの砂はそれなりの触媒であっても、月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムのごとき高度な魔術礼装ではあるまい。つまり、使い手により強大な魔力と技倆が要求されるわけで、三大貴族の一角を見せつけられた思いであった。

三人の気配が遠ざかったところで、私は膝から頽くずおれるのを必死にこらえた。今そうすると、立ち上がれなくなりそうな気がした。そうでなくても、さきほどやってきた人物の前でだけは晒せない姿であった。

「……やれやれ。登場早々、派手にやってくれることだな。我が兄

ょ」

少々、まあスパイス程度の嫌みを込めて睨みつける。正直、安あ ん堵どよりも何をやってくれたんだという嘆息の思いが強かったか らだ。

「てっきり、人の魔術を解体するのは無意識にやってるのかと思ってたぞ」

「……む。滅多にやらんぞそんなの」

わりと本気で心外だったのか、兄の眉間の皺がきつくなる。

もっとも、さきほどのバイロン卿とのやりとりの後にそんなことを言われても、信しん憑ぴょう性せいは限りなく低い。他人の横暴で胃を痛めている癖に、実は本人もわりと横暴なのではないかと、ちょっとだけ思う。そういえば第四次聖杯戦争の際には、先代が取り寄せた聖遺物を勝手に持ち出したのがこの兄だった。

「……やっぱり無意識なのか」

「今回は特別だ」

と、兄が視線をそらす。お、この反応は目新しいな。今後開拓の 余地があるかもしれない。人間、十年付き合っても新発見はわりと あるものだ。

「まあ、妹を助けてくれたゆえの勇み足とでも思っておこう。うん うん。とりあえずは感謝しておくぞ」

「どうして、この流れで感謝を告げるのが最後の最後になるんだお 前は。だから友達ができないんだろう」

「ん! だ、だから友達とか君には関係ないだろう?!」

「仮にも兄である以上、妹の親交関係には責任がある。さすがに皆 無はよろしくない」

「……ほほう。我が兄よ、しかしそれは自分も切り裂く諸もろ刃はの刃ではないかな?」

「む」

「いやいや兄には立派な友人がいたな。これは失礼。何しろ大事な 大事な担保を預かってもらってるくらいだ」

「っ、あいつは関係ないだろうが!」

「...... 師匠」

極度の緊張から解放された気安さで、ついつい話し込んでいたと ころ、グレイが口を挟んだのである。

「もうひとり、来ます」

「.....え?」

グレイが睨みつけた、森の陰へと振り返る。

先のふたりと入れ違いに現れたのは、くすんだ緋色の髪の女であった。

「おやおや。おっとり刀で来てみれば、面白い人物の到来じゃない か」

その女に、兄が大きく目を剝いた。

「.....あなたは」

そして、よくよくその相貌を見つめ、喘あえぐように呟いたの だ。

「......固定しているのか」

「おいおい一言目がそれか。殺したくなるからやめてくれ君主ロー ド」

実に獰どう猛もうに、橙子が言った。

それから、胸ポケットに入れていた眼鏡をかけて、柔らかく笑ったのだ。

「初めまして、ロード・エルメロイII世。お会いできて光栄です わ。蒼崎と言えば分かるかしら」

「あなたが、トウコ・アオザキ……」

兄と橙子のやりとりの意味は、私にも伝わった。

お披露目で会ったときも似たことを考えたが、実年齢の問題である。詳しくは覚えてないが、少なくとも橙子が冠位グランドに選ばれてから十数年は経過しているはずだ。なのに、彼女の容姿は二十代の瑞みず々みずしいままだったのである。

誤解しないでほしい。

単に、若作りというのではない。魔術には老化を遅らせるものはいくらでもある。不老長生はある意味魔術を進歩させてきた源泉といってもよいほどだ。しかし、彼女の容姿は到底そんな域ではなかった。

完全に、彼女は固定されて完成されている。

ただ容姿がというのではなく、全体としてすでに固定されているのだ。単なる印象論ではあったが、この相手になるとそうした第一印象が妙な意味合いを持つことが多かった。もちろん、そうした第一印象を逆手に取る輩もいるのだが……

「さっき、バイロン卿とすれちがって事情を聞きましたけれど」 さらりと話題を切り替えて、橙子は我が兄へと問う。

「あなたが、この事件を預かるんですって?」

「そのつもりです。非才の身ではありますが、解決に微力を尽くさ せていただこうと」

「そう。意外と挑戦的な気質は、エルメロイの伝統なのかしら」

「.....初対面では?」

眉をひそめたグレイに、橙子はふふと声を潜めて笑った。

「II世ではなく、先代とは縁があったのよ。昔、先代当主の義腕を 用立てたことがあったんですよ」

「つ.....」

グレイの表情が変わる。

「それは……第四次聖杯戦争の……」

「あら、知ってましたか」

意外そうに、橙子が瞬きした。

大きく喉を鳴らしたグレイが、そのまま硬直する。

「まさか、あなたもあの戦争に……」

「ああ、誤解しないでもらえると嬉しいわ。私が直接参加してたわけじゃありません。さっき言ったように、II世ときちんと顔を合わせるのは初めてですもの。支払いだけはII世にしてもらいましたけど」

「.....そうでしたな」

兄が、小さく咳払いする。

森の空気に、その音が虚ろに響いた。

「封印指定を、執行停止されたと聞きましたが」

橙子の処置に関する辞令を、さすがに兄は聞いていたらしい。

まあ、これでも時計塔の重鎮なのだから、数少ない冠位グランド の処遇となれば知っているのは当然か。

対する橙子は、興味なさそうに微苦笑した。

「当座、時そ計ち塔らとこちらで折り合いがつく間は。さて何年も つことでしょう」

他ひ人と事ごとのような言いぐさ。

数多の魔術師が憧れ、同様に恐れる封印指定が、彼女に限っては 至極退屈な国際ニュースのような扱いらしかった。それもまた冠位 グランドという超絶ゆえだろうか。それとも、彼女だけが特別なの だろうか。

「ともあれ、こうしてお会いできて嬉しいわ。期待させていただきますよ、ロード・エルメロイII世」

手を振って、淡い微笑を寄越したのであった。

──今度こそ。

ほかの人々が去ってから、兄はカリーナの死体を検分していた。

意外と兄は死体が平気らしく、少なくとも検分の際に狼ろう狽ばいを見せたりすることはなかった。命を賭けた闘争も厭いとわぬ魔術師だが、誰もが死骸に慣れているかというとそういうわけでもない。

では、兄がどこで慣れたかというと……やはり、答えはひとつだろう。この男の人格形成と聖杯戦争はどうしても切り離せない。

泉のほとりに死体を移動させて、血に染まった傷跡のあたりを探りながら、

「……死因は、心臓を一突きか?」

と、兄が小さく呟いた。

よほど高位の魔術刻印を所持していても、心臓をやられればまず 即死する。このメイドも少しぐらいは魔術をたしなんでいたかもし れないが、それでは助かりようがないだろう。逆に言えば、犯人の 殺意はけして曖昧なものではなかったということでもある。

「これは?」

その衣服の下から、兄がとある装飾品を取り出した。

打ち割った石に、紐ひもを取り付けたネックレスらしかった。石には渦巻き紋が刻まれていて、何らかの魔術的な意味があるように も思われた。

「……どうやらケルトの護符といったところか。残念ながら役には立たなかったようだが」

一瞬、兄が沈痛な面もちになって、丁重に死体へ瞑めい目もくし

た。

「明日には弔ってもらえるようにはからおう」

それから塔へと移動して、黄金姫の死体も確認した。

一応頼んだ通り現場を保存していてくれたらしく、死体となって も変わらぬ黄金姫の美しさに、さしもの兄が大きく息を吞んでい た。こちらも一通り調査した後に、再び塔の外へと出る。

兄が選んだ場所は、陽の塔と月の塔を同時に見渡せる草原だった。

さわさわと湿った風の吹き通る中、ちょうど手頃な感じの岩があり、もう歩くのはごめんと座り込んだものだ。

なお、どちらかの塔に居座らなかったのは、ほかの魔術師の住処で重大な話ができるかという、兄の言葉を汲くんでのものだった。 古い魔術の家となれば土地の石ころひとつひとつにも管理者の意思がしみこんでいて当然だが、それでも住処に比べれば遥かにマシだ。

岩に座り込んだ兄は、何度か顔を撫でてからうつむいて、

「……死ぬかと思った」

と、胃の腑からごろりと吐き出すように漏らしたのだった。

「調査早々、軟弱どころじゃない弱音を吐かないでもらえるかな」

「昨夜からほとんど徹夜で、電車の中でもろくに眠れなかった上、 ウィンダミア駅からお前に会うまでは延々と走ってきたんだぞ! あげく調査調査の連続だ! 努力は認めていただきたい!」

仮にも君主ロードが、新人サラリーマンみたいなことを言い出すのはどうなのか。いや、努力だけは認めてくれなんて新人は、どこでもあまり歓迎されないと思うが。

頭痛をこらえるようにして、兄が懐から葉巻を取り出す。

ナイフで先端を断ち、炙るように火をつけて、たっぷりと吸い込んでから、

「……とりあえず、ここまでの状況を整理してみようか」

香りのきつい紫煙とともに、切り出した。

「事件のかい? あらましはメールで送っておいた通りだが」

「いや。私が整理しておきたいのは、どうやって黄金姫・白銀姫が あれだけの美を獲得したかだよ」

兄の返事に、私は思い切り眉をひそめた。

「待て。我が兄よ。犯人を見つけて、私を助けてくれるんじゃな かったのか」

「......師匠......」

グレイの口調にも、いささか非難の響きが混じっていると聞こえ たのは、気のせいではないだろう。

「いやいや……だから必要なんだ。事件の解明に」

「……本当に、ですか?」

これは、珍しくグレイが食い下がる。

こと魔術に関しては、この男がわりと本末転倒気味なほどに食いつくのを知っているからだろう。才能の欠如に反して、そういう点では実に「魔術師らしい魔術師」が我が兄なのだった。

「では一応信用するとして」

と前置きして、私は言葉を続けた。

「黄金姫と白銀姫の術式について、我が兄は何を知りたいわけ だ?」

「いや。そんなに興味なさげに言われても困る。だいたい、もっと 美しくなりたいというのは、おおよそどんな女性でも抱える願い じゃないか」

「あまり、考えたことはないが」

正直なところを告げると、兄は深々とため息をついた。

「レディ。それは欺ぎ瞞まんかあまりに殺伐とした人生過ぎるだろう。たとえハリウッドの銀幕俳優だろうが、整形手術を望む人間なんてごまんといる。まして現代では手術も多種多様。メスをいれなくてもできる整形なんてありふれてるぞ」

「.....そうなんですか?」

おずおずと、グレイが口を挟む。

おや。そんなところで食いつくとは意外。だけど、声音にほんの少し翳かげりが潜んでいるようにも聞こえた。今度時計塔に戻ったら念入りに化粧してやろうかと、心の中で考えたところで、兄が小さくうなずいた。

「化粧とは、もともと魔術だからね」

と、自分の頰のあたりを指で撫でる。

「現在発見されている痕跡では、最古の化粧は我々が我々になる以前――数万年前までさかのぼれる。目や鼻、耳、口といった穴から虫、悪魔、悪霊が侵入することを恐れて、鮮やかな色を塗りたくったという。今でもこうした魔除けの化粧はニューギニアの奥地やアマゾンで行われているから、なんとなくは馴染みがあるだろう。魔除けの逆に、守護してくれる霊や神を招き入れるための化粧もあって、これも現在の霊媒なんかに受け継がれているな。

で、最初は魔除けや虫除けだった化粧だが、古代エジプトあたりで大きく変化する。有名なところでは紀元前十四世紀あたり、新王国時代の王妃ネフェルティティか。ラピスラズリを染料にしてアイラインをつくっていたのなんかが確認されている。もちろん身体には有害なものが多かったが、それ以上に『美しく装う』ことの価値が認められるようになったんだ。その後、一部の化粧の有毒性が知られるようになっても、延々と化粧が広まっていったあたりに、美という価値観の凄まじさを見て取ることができるだろう」

つらつらと述べる兄が、私にはひどく不思議に思えた。

普段、女性の美醜などどうでもよろしいという顔をしているだけ に、その口から化粧の歴史などと言われても違和感は拭いがたい。

その違和感が伝わったのか、わざとらしく咳払いをしてから、兄は続けて口にした。

「仮にメスをいれる整形手術に限っても、史上最古は古代インドまで遡さかのぼる。当時、鼻を削そぐ刑罰が存在したのだけれど、これから少しでもマシな顔にするために、ほかから皮膚を持ってきて移植する手術を行ってたそうだ。ほかにも耳たぶに穴を開けて伸ばす手術とかも行ってたそうで、当時の医学書『スシュルタ・サンヒター』にも記述がある。まあ、イゼルマの魔術も、こうした美の追究の歴史の上に成り立っているわけだ。記録だと、イゼルマがこの土地で研究を始めてからだけでも十代以上―ざっと数百年はかかっているはずだよ」

そこで、兄の言葉は一旦止まった。

しばらく動かないぞとばかりに座り込んだまま、その視線がこちらを窺う。促し方があまりにあからさまなので、ついこちらも鼻を鳴らしてしまった。

「相変わらずの長口上だが、要するに我が兄はこう言いたいのか? ここまで時間をかけた黄金姫の研究が、突然花開いたのには何かわけがあるんじゃないかと」

「ご名答」

と、兄がうなずいた。

青空の下で、くるりと指を回す。エルメロイ教室でも時々やる癖だ。

葉巻を二本の指で挟み、抑えた声で兄は言葉を続けた。

「それに、いくつか胡乱な噂を小耳に挟んできた。──つい先月、イゼルマが特別な秘宝を買い上げたということだ」

「秘宝?」

眉をひそめた私に、すっかり葉巻の匂いに染まった兄が軽く肩を すくめる。

「何分、会員しか招待しない闇オークションということで、秘宝の 正体までは分からなかったがね。多くの魔術師が狙っていた中、イ ゼルマがほぼ一本狙いで買い上げたらしい」

兄の言葉に、グレイが不思議そうに尋ねる。

「イゼルマはそんなに富豪なんですか?」

「いいや。そういう噂は聞いたことがないな」

と、兄が答えた。

その結果としてイゼルマが資金繰りに困っていた……というのはありえなくもない。もともと魔術師というものはひどく金のかかる稼業だからだ。等価交換などという美しい原則は所詮建て前。たったーグラムの黄金を生み出すためにプール一杯分の黄金を費やす浪費と蕩とう尽じんこそが、魔術の本質だ。

そして、そんな乱費からしか生まれ得ぬ幻想もまた存在する。

「そういえば、あれも同じようなことを言ってたぞ。どうしても欲 しい呪物があるとかどうとか」

自称スパイ、とは言わなかった。

ミック・グラジリエ。イゼルマを崩壊させないかと誘いかけた 男。いかにも怪しげな勧誘だったので忘れかけていたが、そうする と秘宝の存在自体は確かなのだろう。

「ふむ。では、その秘宝によって黄金姫を完成させたと、我が兄は 言いたいのか?」

「……まあ、最初はそう思っていたんだがね」

歯切れ悪く、兄が頭を掻く。

「どうにも時期が合わない」

「時期が?」

「ああ。さっきも言ったが、黄金姫と白銀姫の術式は太陽と月が基準になっている。つまり、どのような秘宝を合わせるにせよ、その周期が基準になるんだが……この一ひと月つきほどはどうにも具合が悪くてね。これが月だけだったら、一巡りするわけだからどうにでもなるんだが、太陽と月の術式となるといかにもよろしくない」

そこまで言われて、ようやっとひとつ合点がいった。

「……ああ、なるほど。我が兄ながら本当に人が悪いな」

「どういうことです?」

隣で首を傾げたグレイに、私も苦笑しながら口を開く。

「つまり、さっき兄上がバイロン卿の前で魔術を解体して見せたのは、黄金姫と白銀姫に使ってるのが、本当に太陽と月の術式なのか確かめる意味もあったんだろう?」

「.....あ」

やっと得心したのか、フードの少女が目を見開いた。

「さすがにあの逆上が演技とは思いにくいからね。いやいや、兄上 もずいぶん時計塔での振る舞いが板に付いてきたじゃないか」

「……ほかの魔術師に露見しないよう、わざと違う名称をつける場合もあるんだ。まあ、そういう場合でも象徴性が落ちないように、ある程度近い感じで名付けるものだが」

ぶつぶつ言い訳じみて呟いた兄を、ついつい愉しげに見つめてしまうのは許してほしい。代わりに、そこまでやらかした理由はあえて問いつめないでおこう。

「とはいえ、この景色だと、そんな疑いを持つ必要はなかったかも しれんがな」

「ん? どういうことだね?」

私が訊き返すと、いかにもできそこないの生徒を持ったと言わんばかりに、兄は細い眉をひそめた。

「む。なんだなんだ。そんな顔をしなくてもいいだろう。何か気づいたことがあるというなら、可愛い妹に教えてくれてもいいだろう」

「都合良く、妹と生徒の立場を入れ替えるな。──ともあれ、ここから、あのふたつの塔を見たまえ」

言われた通り、塔を振り返る。

来たときと同じく、奇妙に傾いたふたつの建築物は、さしずめ蟻地獄か、極東の鬼オウガの角めいて映る。ただ、この方向からだとちょうど傾いた太陽が視界に入ってきて、眩しさとともに長い影をこちらへ伸ばしていた。

(.....ん? 影?)

そこまで気づけば、兄が言おうとしていたことはすぐだった。

「.....ああ!」

「.....ライネスさん?」

いぶかしげに呼んだグレイの前で、思わず頭を抱えてしまった。 一体どうして、あんなものを見過ごしていられたのだろう。さすが に、こればかりは兄が呆れていたのに賛同してしまう。

葉巻を唇から外し、煙をくゆらせながら、岩に座り込んだ兄は答えを口にした。

「日時計と月時計だよ。あんな堂々と見せられるとかえって気づき にくいものだが」

「あ」

それで、グレイも大きくうなずいた。

陽の塔自体が、極めて巨大な日時計となっているのだ。妙に傾いた塔だと思っていたが、まさかそんな意味合いがあったとは。

「……では、月時計というのは」

「要は、日時計と同じだよ。ただし月時計は満月のときにしか機能しない。ついでに言うと、どちらも本式には傾きが足りないが、そこはあの湾曲ぶりや時計板になる土地の方で補正をかけているんだろう。おおよそはお分かりかな? レディ」

「うむ。確かに、ここまで大がかりな仕掛けをつくっておいて、イゼルマの魔術──黄金姫、白銀姫と関係ないことはないだろうね」

うなだれたまま、肯定する。

いや、今回はちょっと情けない。見落としにもほどがあるだろう。

「じゃあ、太陽と月の術式が揃わないと言ってたのも、この時計のことか」

「ああ。月時計がまともに機能するのは月に一度だけだが、日時計の方もそれなりの誤差が常に発生する。地球の公転軌道—太陽の周囲を回る軌道が楕円なために、均時差が免れがたいからだ。だからこそ、太陽と月の桁式を使う者は月の満ち欠けと均時差を計算にいれるのが基本になる。……が、ごく最近さっきの秘宝を導入したとすればどうにも日付が合わないんでね」

「日付?」

「大きくはふたつあってね。本来、太陽と月の術式で一番いいのは 真昼の日食だ。なにしろ新月も太陽も頂点に位置してるんだから な。で、次にいいのが満月期の真昼。地球を挟んで太陽と月が一直 線に向かい合うオポジション。まあ占星術的には凶兆なんだが、魔 術に利用するには都合がいい」

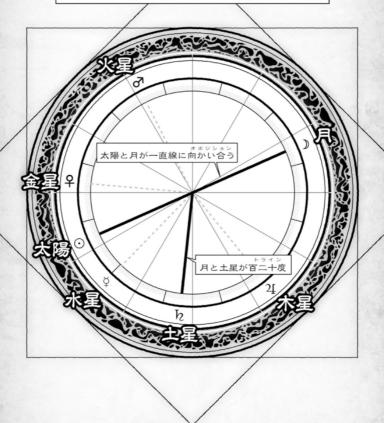
近くの枝を拾って、地面にがりがりと円と模様を描いていく。

こんなときまで講師の癖が抜けないなと思いながら見ていたが、 刻まれた模様に、私も小さく瞬きした。

「ホロスコープか」

つまり、天体の配置図だ。

エルメロイ||世の説明する理想の天体配置



魔術師ならずとも、雑誌の占いや何やらで一度は見たことがあるだろう。おおよそ惑星と黄道十二宮からなるその図形を、我が兄はざくざくと刻んでいった。

「天体科アニムスフィアでなくても、この程度は基本中の基本だろう。で、オポジションの時期なら一ヶ月内にもあったんだが、次善と言ったのには理由がある。本来凶兆なのもあって、別の惑星の位置関係も干渉してくるんだ。太陽と月ならば同位置か逆位置が基本だが、惑星ならば百トニラ十イ度ンが必要だ。今回の場合、黄金姫や白銀姫に関わる術式なのだから、造形を司る土星と百トニラ十イ度ンの位置になければならない。一最近のオポジションはここでアウトになる。ああ古典準拠なので冥王星と海王星はそもそも除外してるぞ」

ご丁寧にほかの惑星の配置まで書き添えてから、太陽と月を差し、そこから百二十度の位置にある土星を突いた。

「なるほど……理想の位置に来た場合、そもそも満月期の真昼にならないわけか。そういえば、時計塔でもそんな授業をしてたな」

「星々を利用する魔術を扱うなら必修事項だ。太陽と月の組み合わせでなければ、昼や夜を気にする必要はないんだがな」

「.....ふうん」

少し考えてから、口を開く。

「そもそも、秘宝とやらを黄金姫に使ったとは限らないんじゃ?」

「.....かもしれないが」

このあたりはぶつぶつと語尾を濁して、兄が自分のこめかみをつついた。ちょっぴり女々しく持論にこだわるのは、兄の習性である。……要するに貧乏性なので、一度打ち立てた仮説を放棄するのがもったいないのだ。そのくせ、論文ではクラッシュ&ビルドを旨としていたりして、つくづく嗜好と才能が一致しない男ではある。

一拍おいて、

「……それに、蒼崎橙子がいたなら、考えるべきことはまったく変わってくる」

続くため息は、なおさら重苦しいものだった。

実のところ、それは今回の事件において、ある意味真犯人以上の 重大な位置を占めていたからだ。同様に沈黙したことで、こちらの 気持ちも伝わったらしい。

「どうやら、レディも考えていたかな」

「ああ。もちろん分かっているさ」

うなずいて、忌ま忌ましさとともに口にする。

「死んだ黄金姫は本物だったのか、だろう」

それは、蒼崎橙子という冠位グランドの魔術師を見てから、ずっと頭の隅にこびりついて離れぬ問いだった。

そして、兄はその先へと疑問を進める。

「さらに言えば、黄金姫と白銀姫──どちらかが人形ではないか、と いうことだ」

「.....え?」

きょとんと、グレイが瞬きした。

私と兄とを交互に見やり、突然世界が灰色と化したかのように茫然と口にした。

「……人形……って、でも拙たちが見た黄金姫は確かに」

「ああ。人間としか思えなかったさ。だけど、その場に蒼崎橙子が いたとなれば話はまるで変わってくる」

と言って、私は二本指を上げた。

「彼女が時計塔であげた業績は多々あるが、とりわけ目立っている のはふたつだからね」 そう、ふたつだ。

目立つと簡単に言ったが、魔術師の最高峰たる時計塔で、注目に値する研究というのは滅多にない。基本的に魔術とは過去に奉仕する学問である上、ほとんどが強烈な個人主義者なために、重大な研究ほど抱え込んでしまうからだ。それゆえ、もしも何らかの研究で一目置かれようとするならば、彼らの抱え込んだ研究成果をも圧倒する出来でなければならない。

時計塔に長くいるほとんどの魔術師が、主義主張は別として何らかの派閥に属する理由はここにある。時計塔にはおおよそ最高の環境が揃っているが、真に奥義を目指して研究を重ねたいのならば、派閥に秘蔵されている成果を開陳してもらわねばお話にもならぬからだ。

ただし、私の知識が確かならば、蒼崎橙子は創造科バリュエを含むいくつかの教室を渡り歩きつつも、ついに派閥に属することはなかった。

それでいて、彼女がなした業績は―

「ひとつは、魔術基盤の衰退したルーンの再構築」

思い出しつつ、人差し指を折る。

「ルーン魔術自体は有名で、一部の魔術師は古くから活用・研究していたが、その多くは失われて久しくてね。ところが、彼女はその失われた大部分を再構築してのけた。噂が本当ならば、基礎となる共通フサルクルーン二十四文字の魔術的再生はおろか、神代に消えたはずの原初のルーンすら何文字かは解析したという。まあ、前者の利権は時計塔に売り払われたし、後者については彼女が封印指定された際厳重に仕舞い込まれたそうだがね」

時計塔がよくやるやつだ。

比較的便利で低位の術式については魔術特許として利権にするが、本当に高位の一ひとつの派閥の奥義に匹敵するような代物については、禁呪として管理するという口実で、宝物庫に仕舞い込んでしまう。一体その管理された知識が、誰かに届く日は来るのかどうか。なお、ルーンについてはトゥーレ協会にもオリジナルが存在するということだが、こちらも死蔵したまま魔術基盤が衰退すること

さえ気にとめなかったというのだから、魔術師の秘匿好きには呆れ させられる。

「もうひとつは、卓越した人形師としてだ」

中指を折る。

すると、グレイがことりと首を傾げたのだ。

「……確か……人体模造の魔術概念は……?」

それは、自動人形オートマタが現れたときに、私も思ったこと だ。

「ああ。ルーン魔術とはいささか事情が違うが、人体模造の魔術概念もすでに衰退している。言ってみれば、彼女はふたつもの魔術を現代に再構築してのけたのさ」

グレイの沈黙に、私の方こそ強くうなずきたかった。

そうだろう。馬鹿げていると思う。ふたつもの衰退した魔術をまがりなりにも現代に蘇よみがえらせるなど、いっそ喜劇じみている。それは死者の蘇そ生せいにも等しい、ある種冒瀆的なまでの所業だ。自分を神様だとでも思っているのかと、毒づきたくなる来歴だ。

だが、なればこそ、冠位グランドに足る。

事実上の最高位──色位ブランドを越える、時計塔の頂点。

そこで、やっと気がついたように、グレイが顔を上げた。

「じゃあ、あの自動人形オートマタも!」

「普通に考えれば、蒼崎橙子の作品だろうが……」

語尾がよどむのを、私は感じた。

いまいち、こちらは自信が持てないのであった。確かに、ほかに あれほどの自動人形オートマタを創れる魔術師はいない。時計塔全 体を見渡してすら、あの蒼崎橙子を除いては……はたして、ひとり かふたりいるかどうか。

しかし、だとしたら、あんな自動人形オートマタを魔術師間の犯罪に使うだろうか。それでは犯人は蒼崎橙子ですと名札をつけているようなものだ。あの女がそんな馬鹿なことをするだろうか? それとも、バレた上でさらにこちらを嵌はめるような罠を用意してあるのだろうか?

もともと、状況的には真犯人を追及するような場ではない。バルトメロイ派である私を追い詰めたかっただけというならば、そういう手を使うかもしれないが......

「……そちらは、ほかにもいくつか手がある」

と、聞いていた兄が口を挟んだ。

「たとえば、魔術概念が衰退する以前の自動人形オートマタを買い上げて、現代らしく改修するというのは可能だろう。 贋がん作さく づくりで、時代相応に古ぼけさせるのと逆の方法論だな」

「……ああ、なるほど」

思わず納得してしまう。

こういう発想の転換については、やたらと歯切れがよいのが兄ら しくはあった。

風が鳴った。どこか不吉な響きは、今回の事件の秘密を自分だけは知っているぞ、と嘲あざ笑わらっているかのようにも聞こえた。

「……その推理ですと、死んだ黄金姫は蒼崎橙子のつくった人形で、黄金姫はまだ生きているかもしれないということですか?」

「まあ、そうなるな」

「じゃあ、犯人の目的はなんなんです?」

素朴なグレイの問いに、兄は顎もとを押さえて考え込んだ。

「……最初から、イゼルマが我々をハメるつもりだったというのも考えたのだが、それはリターンとリスクが釣り合わなさすぎるな。 エルメロイ私たちを引き込むのがプラスになるのは、最小限のコス トでできるならという前提あってのことだ。これではいささか手が 込みすぎてる。こちらの落ち度ならともかく、明らかに罠にはめて 引き込んだとあっては、それこそバルトメロイが黙っていまい」

「......ああ_」

と、私もうなずいた。

「時計塔に戦争を起こさせたいのだというのならまた別だが、現状トランベリオ派とバルトメロイ派にはそこまで圧倒的な差がない。 行き着く先は誰も得しない泥沼の戦争だろう。まあ、聖堂教会あたりは大喜びするかもしれんがね」

神秘撲滅を掲げる聖堂教会と、神秘隠匿を掲げる魔術協会は基本 的に水と油だ。まあ、一応とはいえ主を崇あがめる団体と、魔術本 位の組織とが折り合いの良いはずもない。

兄の言葉だと、多くの西洋魔術は主の存在を前提にしたものだというが、それは要するに主を『手段』として利用しているのであって、根っから『信仰』している相手にすればなおさら腹が立つだけだろう。

Г......

そこで話題が絶えて、しばらくの間沈黙が落ちた。

「そうだ」

ふと思い出して、私は懐からハンカチを取り出した。

正確には、その中に包んでいた品だった。

「兄よ。この粉を、見てもらえるか?」

黄金姫の死亡現場で採取した粉だった。何らかの魔力を帯びているところまでは分かったのだが、それ以上は踏み込めなかったものだ。

「ふむ……少し待て」

手にしていた小さなバッグから、兄がルーペを取り出してくる。

錬金術師──というよりも、百年ぐらい前の警察の鑑識めいた姿なのだが、兄の場合はどうしてもこちらの格好が似つかわしい。つくづく時計塔の魔術師に向かないタイプではあった。

「……これは灰か?」

「私も同じように思ったんだけどね。それ以上はさっぱりだ」

肩をすくめたことに、兄は気づきもしなかった。

しばらく、魅入られるかのように灰を見つめていた。ルーペ越し に凝視して、しばらくするとルーペも外して直接睨みつけ、果ては その灰のひとつまみをなんと自らの口に放り込んだのだ。

「ちょ! 兄よ、気でも違ったか!」

Г......

口中でしばらく舌を動かし、自らの手に吐き出す。

手の平についた付着物をしばらく観察して、兄は小さく囁いた。

「……ああ、こちらは見当がつく」

「ほう? てっきり犬畜生な前世でも蘇ったのかと思ったぞ」

「前世とはずいぶんオリエンタリズムな発想だな。.....だが、ペローか、バジーレか? それともミロのヴィーナスよろしくギリシャまで遡るつもりか......?」

うつむいたまま、兄はしばらくぶつぶつと呟いていた。

それこそ、こちらが見えていないのではないかというほどだった。

「.....おい、兄上?」

「しばらく、考えさせてくれ」

呻くように、兄が口にしたのであった。

月の塔の最上階に、その工房はあった。

多くの魔術師は、地下か最上階に工房を置く。それは地脈から『力』を受けるか、天から『力』を受けるかの違いだ。こイのギ島リ国スではいささかの特殊事情から伝統的に地脈が強く、時計塔にしても地下に多くの工房を置いているのだが、イゼルマは例外であった。

所狭しと、数多の書物や試験管、蒸留器に哲学者の卵フラスコが 置かれている。創造科バリュエの派閥らしいところは、そんな中に 美麗な絵画や彫刻も交じっているところだろうか。部屋の隅に置か れたキャンバスとしみついたテレピン油の臭いからすると、工房の 主たるバイロン卿も自ら筆を取るのかもしれない。

そんな中、今はゆらゆらと香りのきつい煙が揺れている。

海泡石メシャムのパイプであった。

他人の前ではほとんど喫やらなくなったが、海泡石メシャムのパイプに刻み煙草を詰め、煙をくゆらせるひとときは、彼にとって得難いものであった。

もっとも、今日ばかりはその味も彼の心を慰めることはなかった。

──『あなたがやっていることは、人間の内側に惑星の運行を取り入れる行為だ』

その言葉を、バイロンは思い出していた。

一体、どこまであの男は近づいているのか。確かに、周囲への権

威付けから黄金姫・白銀姫の術式はさほど隠蔽しているわけではないが、出会い頭にこうも核心をつかれたのは初めてであった。

無論、あそこで言われたことはあくまで概要にすぎない。発端となるアイディア程度は今更惜しむものでもないし、それをきっかけに少々踏みいられたところで、自分たちの域まで辿り着けるはずもない。

だが。

だが、と思わせる何かが、あの男にはあった。もしも、あのまま 放置していれば、あの男はどこまで詰め寄ってしまうだろうかと。 そして、その言葉をロード・バリュエレータや冠位グランドの蒼崎 橙子など、『実行しうる天才』が耳にしてしまったならば、どこま で再現してしまうだろうかと。

「……っ、くそ」

歯ぎしりし、バイロンはパイプの吸い口を強く嚙みしめる。

自分たちの数百年を踏みにじられるような恐れを、彼は抱いていた。歴史だけであれば、それこそエルメロイ元来の本家であるアーチボルト以上だというのに、どうしてもイゼルマの家は一定より先に抜きんでることができなかった。「人の身で至上の美を再現する」という道は早々に設定しながら、魔術師としては長い長い間足踏みしていた。

しかし、自分の代で、今回の黄金姫・白銀姫はようやくその理想 に近づいたのだ。

(.....もう少しで)

もう少しで、手が届く。

あのロード・バリュエレータさえ、今回のお披露目は絶賛を惜しまなかったではないか。ああ、突然極東から現れて冠位グランドを 篡さん奪だつしたあの小娘だって、今の自分を無視することはでき まい。

だからこそ、バイロンはひたすらにもがいてきた。考えられる限りあらゆる手段を尽くし、あの小娘にすら頭を下げて、後たった数歩を進めようとしてきた。

「だというのに、どいつもこいつも.....」

ぎりとまたパイプを嚙みしめたところで、

「―バイロン卿」

と、名を呼ばれた。

「ああ、来たか」

工房の入り口へ振り向いて、バイロンはふたりの男と、メイドの姿を認めた。

イスロー・セブナン。

マイオ・ブリシサン・クライネルス。

そして、レジーナであった。

「白銀姫―エステラがいる以上、黄金姫の喪失は絶対ではない」

ゆっくりと、バイロンは彼らへ口を開く。

実際そうだった。事件の衝撃は大きいが、まだ十分に取り返せる。イゼルマの血脈がつくりあげた黄金姫と白銀姫は、互いにスペアの意味も持っている。片方が失われたとしても、それは後退を意味しない。

パイプを咥くわえた壮漢の視線は、まず自らの髪を織り込んだ魔術師へと向かった。

「だが、お前のドレスはどうだ」

「……僕の……ドレスは完璧です……」

うつむいたまま、イスローが答える。

その長い指に、同じく長い針と糸が絡んでいた。

西洋には、紡ぎに関する魔女や女神の伝説が多く存在する。眠れる森の美女は錘つむの針に刺されて死ぬと魔女に呪われ、はたまたギリシャ神話にも運命の糸を紡ぎ、割り当て、断ち切る三女神モイライが存在する。

彼のつくるドレスはそうした古い伝承を基盤としたものなのだった。

ついで、バイロンはもうひとりの魔術師へと視線を向けた。

「お前の薬はどうだ」

「ぼ、僕は、痛っ」

慌てて舌を嚙んだのか、口元を押さえてから、改めてマイオは 言った。

「僕の薬も、完璧です。ディアドラ様同様、エステラ様が白銀姫と してふさわしくあれるよう、協力させていただきます」

このふたりは、黄金姫・白銀姫にとって欠くべからざる魔術師であった。

だからこそ、他派であるにも拘わらず、頻繁にバイロンの工房に招き入れていたのだ。彼らは派閥の垣根を越えて、イゼルマの目的一「至上の美を持つヒトをつくり出す」というものに、古くから賛同してくれた血脈であった。

「カリーナがいなくても支度には問題ないな」

「.....そのつもりです」

レジーナが頭を下げる。

黴かび混じりの空気に、しばし沈黙が落ちた。

「よろしい」

と、バイロンは杖を突き、叩こう音おんが殷いん々いんと工房に響きわたる。

「あの探偵気取りの君主ロードがどのような結論を出すかは知れぬが、我らには関係ない。粛々と美を求めるのみだ。場合によってはエルメロイの責を問う。先代が死んで十分切り取られた後だが、今ならばまた別の旨うまみもあるだろう」

エルメロイ教室といえば、新世代ニューエイジにとっては希望の

星だという。ためこんだ利権はすぐさま金銭に変換できるようなものではないにせよ、自分たちのような古い家系ならば使いようがあるはずだ。いかに脆ぜい弱じゃくとはいえ仮にも現ノ代ー魔リ術ッ科ジを支配しているのだから、十二家ならざる者にしてみればその果実ははかりしれなかった。

腹の底からたぎるような野心が、彼を突き動かしていた。

娘の死すら、今の彼をとどめる障害とはなりえない。ああ、もと もと黄金姫も白銀姫も魔術師ではなく、実験材料に過ぎないのだ。 自分が魔術刻印を継がせるべき息子は、また新たにつくらねばなる まいが、それはどうとでもなるだろう。

「─あの、バイロン卿」

マイオが口を挟んだ。

「犯人を、捜す必要はないんですか?」

それは、彼にしてみれば当然の問いかけだった。

たとえ、白銀姫というスペアがあるにせよ、またエルメロイを利用するためのきっかけに使えるとしても、黄金姫を殺した犯人を野放しにしておくわけにはいくまい。だいたい、事件が解決しないことには、自分たちだっていつ殺されるか分かったものではないのだ。

戦闘面に優れた魔術師であれば、そんなものは殺される方が悪いと片づけるかもしれないが、マイオもイスローもそうではない。それぞれに奥の手はあるかもしれないが、誰かとの戦いに絶対の自信を持てるようなタイプではなかった。その点で、あの剝離城アドラに集まっていた面々とは大きく様相が異なっていたのである。

「つまり、君はあのライネスとかいう娘は真犯人じゃないと言うの かね」

「......い、いえ、そういうわけでは」

しどろもどろに、マイオが言う。だけど生来の気の弱さで、それ 以上の言葉がどうしても出てこなかった。

「お前たちが気にする必要はない」

「ですが」

「気にする必要はないと言った」

粘ろうとしたマイオを、バイロンが言下にはねつける。

「.....はい,

深く頭を下げ、マイオに続いて三人ともが工房を去った。

それを見送ってから、バイロンは扉を睨みつけ、低く囁いたのであった。

「.....だが、もうひとつは仕掛けがいるかもしれん」

*

蒼崎橙子の研究室は、月の塔に用意されていた。

ほかの客人同様陽の塔に泊まらされているのだが、彼女に限って 研究室もあるのは、橙子が社交会以前からの客人であるためだっ た。時々乞われては、魔術について適当なアドバイスを投げている あたり、性質としては食客に近かったかもしれない。

長く滞在してるためか、部屋にもずいぶんと彼女の好みが反映されている。古めかしい地球儀やごちゃごちゃと積まれた文房具、俗っぽいゴシップ週刊誌と哲学書と魔術書のごった煮に交じって、ほとんどガラクタと見分けのつかぬような発ぜん条まいやブリキの玩具が大量に置かれているのも、おそらくはそのためだろう。

今、彼女のついたデスクには、いかにも年季の入ったリール式の 映写機が置かれていた。

「やっぱり、イゼルマの管理はさすがね。百年ぐらいのものって骨 董的な価値を見るには微妙な古さだから、たいていガタがきちゃっ てるのに」

ほれぼれと映写機をためつすがめつ、橙子が呟く。

彼女の場合、もちろん魔術的な要素にも力点を置くが、むしろそのモノにしみついた時間を重視する。人の手を渡り歩いた宝石の方がさまざまな思念が沁しみて魔術的な加工を行いやすいように、古い道具もまた様々な人の想いに触れてひそやかに神秘の芽を育むからだ。そのほとんどは潜ませたままで終わるが、ごく稀に開花させたモノを指して、彼女の生まれた国では付つく喪も神がみなどと呼ぶのであった。

「あなたは何を映してきたのかしら? これからは何を映したいのかしら? 前につくりあげた子は、どうしても欠陥が残っちゃったんで礼園女学院に置きっぱなしにしてしまったのだけれど」

映写機に呼びかける。

細められた目とフライホイールのあたりを撫でる指は、映写機に 刻まれた歴史を直接読み解こうとするようだった。

その手を止めず、

「一そうそう。早く出てくるといいわよ」

声を、投げかける。

はたして、部屋には橙子ひとりしか見あたらない。私物に埋もれた彼女の姿は、この広い部屋で逆に浮き上がるようだった。

しかし。

扉のそばから、とある人影が姿を現したのだ。

「─なんだ、君か。今更来るとは思わなかったぞ」

眼鏡を外し、橙子は言った。

彼女にとって、この眼鏡は外界への対応を切り替えるスイッチだ。

見方が変われば対応が変わるのも当然だ、と彼女は思う。だって、ひとりの人間にとっての世界なんて、結局自分が認識できる限りのことだろう。

逆にいえば、原子だとか宇宙だとかの世界を認識したとき、人類

にとっての世界は確実に広がったのだ。もちろん、広がったのが幸せかどうかは別だが。六畳一間から豪ごう奢しゃな大邸宅に引っ越したから幸せになると限らないのは、万国共通だろう。

「自分は犯人じゃないだって? ああ、そんなことはどうでもいいんだ。別に、事件の犯人捜しになんて興味はない。それはここに集ってるもののほとんどがそうじゃないか?」

その程度にはみんな魔術師人でなしだろう、と橙子は言う。

ライネスが考えたのと、ほぼ同じ事柄ではあった。

事件といいつつ、今回の殺人はけして真犯人捜しに焦点があてられてはいない。その核にあるのは魔術師同士の派閥抗争であり、代理戦争である。黄金姫やそのメイドを殺した犯人というのは、その抗争におけるカードの一枚にすぎない。大変重要なカードではあるが、決定的な証拠でもない限りはそこどまりだ。

最も意味を持つのは、この事件をきっかけにどのような波紋が起きるか、だ。

現状、バルトメロイ率いる貴族主義と、トランベリオ率いる民主 主義は持きっ抗こうしている。

だが、これでエルメロイが潰れるようなことがあれば、天てん秤びんは確実にトランベリオに傾くだろう。エルメロイの規模を考えれば、けして致命的ではないが、時計塔に衝撃をもたらすには十分な一撃だ。波紋は新たな波紋を呼び、場合によっては魔術師同士の戦争すら招きかねない。

冷戦から熱戦へ、だ。

もちろん、ロード・バリュエレータもバイロン卿もそのことは十分に知ち悉しつしている。ロード・エルメロイII世の介入を認めたのも、結局は彼がライネス以上の大物だからだ。たとえ名目であれど、君主ロードの名を冠した彼に責任を直接問えるならば、そのメリットは何倍にも大きくなる。

たとえば、それこそエルメロイにトランベリオ派に寝返るよう促すことすら、考えられるだろう。

「イノライ先生はずいぶん彼にご執心のようだしな。──ああ、まっ

たく魔術師どもは変わらん」

ぽつり、と橙子が呟く。

あるいは、かつての彼女を知る者ならば──たとえばイノライが聞いたのであれば、その言葉のかすかな違和感に眉をひそめたかもしれない。

その言い方だと、つい最近まで、魔術師人でなしじゃない価値観 に長く触れてきたみたいじゃないか、と。

「で、なんだい? 彼がやってきたことでびくついているわけかな。あれは確かに魔術師としては凡庸だが、研究者としては一流だ。……くわえて、他人の魔術を見極めることについてだけは、超一流といっていいかもしれないな」

いくつかの言葉を、人影は投げ返した。

「ほう。ずいぶん張り込むじゃないか」

意外そうに、橙子が振り向いた。

人影の持ちかけてきた内容と条件が、彼女にしてから予想外で あったためだ。

「ああ。事情の説明はいいよ。その報酬なら十分だ」

ひどく軽い調子で、橙子はうなずいた。

それから、

「その条件なら、私は彼の─ロード・エルメロイII世の敵に回ろう」

*

昼なお暗い、森の暗がりであった。

事件現場からやや離れた、陽の塔の東に広がる森である。

鬱蒼と茂った葉が陽光を遮り、その闇の内側で嗄れた声が生じた。

「どうするんだ? エルメロイII世の口ぶりを聞いたろう。もう、すでに半分がたは暴露されているも同然だ。この分だと、明日がどう転ぶかは分からんぞ」

樹木の一本にもたれかかった老女は、ひどく愉しげに尋ねた。

ロード・バリュエレータであった。

「犯人が分かろうが、何になる?」

と、別の闇の一隅から答えが生じる。

「俺もあんたも犯人追及を争ってるわけじゃない。この場での正し い推理なんて、派閥抗争に使えるカードの一枚にすぎないだろう」

「カードには、カードなりの気持ちがあるかもしれんがな」

くくく、と老女は笑い声を押し殺した。

「じゃあ、あれを呼ぶのか?」

「呼ぶさ。あんたとの協力も取り付けられたし―」

と、彼は続ける。

短く刈り上げた髪をざらりと撫でて、

「一なにしろ、あれが俺の依頼主なんでな」

にんまりと、スパイを自称していた魔術師──ミック・グラジリエは笑ったのであった。

はたして、あれから数時間が経っていた。

日もずいぶんと傾いており、陽の塔がつくった影はその分ぐるり と弧を描いている。

残念ながら、芳しい結果とは言い難い。なぜなら、兄は手元に ノートを置いたまま、何度も万年筆で推論や仮説を書き連ねては大 きな×印で削除して、呻き続けていたからだ。

「太陽をヘリオスに見立てての術式も駄目。逆に、月をセレネかナンナに置き換えて聖獣の属性を付与したところで根幹は変えがたい。陽の塔と月の塔が因子として大きすぎて、小手先の技法がまるで意味をなさない」

「......師匠?」

「駄目だ。やはり太陽と月では揃わない。……本当にあの秘宝は関係ないのか」

と、正直なところを兄は吐露した。ほとほと情けない顔で、これが昼前に颯さっ爽そうと乱入して、三大貴族の一角と対峙した男と同一人物かと疑いたくなる。

「おいおい兄よ。まだそこにこだわってたのか。そんな調子で、バイロン卿のつけた時間制限に間に合うのか?」

そもそも事件を解明したところで、そんなものはカードの一枚に 過ぎないのだ。私にかかった疑いや、拘束されたトリムマウを解放 するためには、もっと強烈な一手が必要になる。だからこそ、バイ ロン卿も時間制限をつけつつ、こちらの行動を許したのだ。

こんな段階でつまずいていては、逆転どころではない。

「ああ。いや、これについては待ってるというのもあって……」

「待つ?」

「まあ.....」

と、兄が言葉を濁した。湿った地面を這う声は、ひどく陰鬱なものを湛えていた。兄が極めて私的な類の厄介ごとを抱えたときの響きだ。

しかし、その視線が地面を彷徨ったところで、眉がかすかにひそめられた。

「あ」

かすかに、私の目も痛んだのだ。

実際、その正体はすぐに発覚した。

少し離れた樹木から、にゅうと影が伸びていたのだ。いくら夕暮れが近づいているとはいえ陽の塔が落とした影とは明らかに違う角度で、不自然なまでに長い影だった。しかも、さわさわと揺れる草むらにも落ちているのに、その影だけが微動だにしていなかった。

Г......

黙って、兄は口にしていた葉巻を取り上げた。

小さく呪言を囁くと、ぼっ、と葉巻の先の炎が膨れあがる。その 炎が不自然極まりない影と草むらに放り込まれ──

「熱あちちちちっ!?」

と、影が悲鳴をあげたのだ。

そのまま飛び上がったのは、金髪碧へき眼がんの少年であった。 ズボンの尻についた火を必死でたたき落とし、ひいひいと悲鳴を上 げてから、ぐるりとこちらを振り返る。

「わあ、見つかっちゃった!」

「.....何してきたのかな、フラット?」

「俺やってきましたよ教授! 日本語だと夜露死苦ですよ! 日本の挨拶ってブッディズムな感じで深淵で深しん遠えんですね!」

無邪気な声で、金髪の少年が言い募る。

さっきのは、多分幻術だろう。影を使った隠れ身は、確かドイツ のあたりではポピュラーな魔術だったはずだ。どこで学んだのかは しれないが、ことさまざまな魔術を見よう見まねで再現する面においては、大変器用な少年であった。

ついで。

「一フラット!」

と、非難の声が街道の方からこだました。

たった今走り込んできたもうひとりの少年が、形の良いまなじり をつりあげて、フラットへと抗議の叫びをあげたのである。

「お前、僕が遅れるから先に行って伝えてくれって言ったのに!」

「わ、ル・シアンくん!」

「だからル・シアン犬って言うな! あ、お待たせしました先生!」

フラットと同じ金髪碧眼でも、精せい悍かんで整った顔はある意味好対照だった。猟犬といってもよい。研ぎ澄まされた瞳からは緻ち密みつに制御された野性が覗き、ぴしりと一礼した姿も堂に入ったものだった。

スヴィン・グラシュエート。現ノ代ー魔リ術ッ科ジにおける現役 最古参。フラット・エスカルドスと双璧をなす、最優秀の学生だっ た。

.....が、それも一瞬で溶け崩れる。

「グレイたん!」

私の隣の少女を見つけた瞬間、スヴィンが声をあげたのだ。

びくうっと震えたグレイに、まさしく飛びつく勢いで、金髪の犬 系美少年はくんかくんかと鼻をこすりつけはじめたのである。

「ああグレイたんグレイたんグレイたん! いつもの甘くて灰色で

四角くて、身体の内側をひっかかれるみたいな匂い!」

「.....や、やめてください!」

抵抗するグレイの声も聞こえないのか、スヴィンが匂いを堪能しかけたところで、声がかかった。

「スヴィン」

「.....は、はい!」

兄の冷たい声に、直立不動でスヴィンが敬礼する。

「も、申し訳ありません。ひさしぶりにグレイたんの半径二十メートル内に入れたせいで、つい理性が蒸発してしまって」

「お前たち.....」

今回の事件で一番深いため息をついて、兄が片手で顔を覆う。

ふと、私も気づいて振り返った。

「ところで君、生徒は使わせないんじゃなかったのか」

「自主性に任せた結果だ。時計塔の私室で準備しているところを見つかってな。.....だが、ふたりとも調査結果だけメールで送って、現地には来ないように言ったぞ」

「だって教授! ライネスちゃんが大変なんでしょ! そんな楽し そうなの放っておけるわけないじゃない!」

......今、こいつ楽しそうとか言ったな。よし殺す。手伝わせてから殺す。

「フラットの監視をしないわけにはいきません」

対して、スヴィンはなんとも優等生な返事ではあった。

まあ、さっきのグレイへのあれこれは忘れることにしよう。まだ、彼女は私の背中にしがみついて怯えてるけど。

まったく緊張感の欠片もない。

だけど、逆に言えば、これこそいつも通りの時間であった。友好的とは言い難い魔術師の土地で殺人の罪を着せられ、トリムマウも奪われて、あげく時間制限もつけられて。それでも不思議にいつものような呼吸ができた。

どうしてだろう、とは思わない。

多分、それこそ兄が何年もかけて、時計塔で蓄えてきた『力』なのだろうから。誰に教わったのかも知れないが、こんなにも魔術師らしい兄の──あまりにも魔術師らしくない在り方。もしもそう言ったら、兄は「魔術師は弟子を大切にするものだ」とか言い訳するかもしれないが。

ひとしきり落ち着いてから、ふと兄はスヴィンへと水を向けた。

「頼んでいた調査は、どうだった?」

「こちらです」

まだ、グレイの方をちらちらと眺めつつ、スヴィンが一枚の紙片を差し出した。

「……なるほど」

と、兄もその紙片を確かめてうなずく。

「どうしたかな? 逆転の秘策でも?」

「ああ。まだ、いろいろ欠片ピースが足りないがね。見切り発車するしかない」

こめかみのあたりをつつきながら、兄はゆっくりと立ち上がった。

漆黒のコートが揺れた。

赤いマフラーをなびかせ、弟子たちを引き連れて、彼は堂々と歩き出す。

「さあ。まずは、出陣の準備と行こうじゃないか」

――一時、舞台は移る。

双貌塔からやや離れた、ウィンダミア駅近郊のとあるホテルのスイートルームだった。

煌びやかな部屋で、最新型の携帯端末が持ち上げられていた。

もっとも、手にしているのは本人ではない。いくつもの宝石を纏う肌も露わな侍女に持ち上げさせて、主たる青年が気だるげに話しているのであった。

「では、問題ありませんね? ロード・バリュエレータ」

褐色の肌の青年だった。

金髪を胸元まで伸ばし、首には美しい黄金のリングを巻いてい た。

「ええ、そうです。──この介入には、あなたは一切干渉しないとい うことで」

返答の間をおいて、褐色の肌の青年は侍女に電話を切るよう促す。

そして、

「.....よし」

と、ひそやかに拳を握りしめた。

彼にとって、唯一恐れるべき相手が、このロード・バリュエレータであった。ほかの有象無象はどうとでもなるが、さすがに三大貴族の一角ばかりは譲らざるを得ない。古いだけが取り柄の老害であるうと、魔術においては年月がものを言う。

だが、今はその障害も取り払われた。恐れるべき対象は、もはや あの双貌塔に残っていない。くだらない殺人事件に乗っかる必要も ない。正面から蹂じゅう躙りんして簒奪すればよい。

「では、収穫しにいくとしようか。何しろ勝つためには手段が必要だ。イゼルマが交渉に乗らなかったことを後悔させてやろう」

周囲の侍女たちを見回し、青年は優美に笑う。

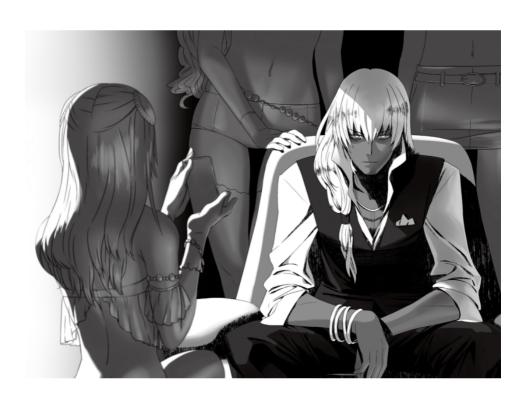
とりわけ麗しい女が、耳元で囁いた。

「では、若様自らで?」

「ああ。僕がやるからには徹底的にやるし、準備も必要だろう? 遊びで参加したロード・エルメロイの轍てつを踏むつもりはない」

唇を歪ませ、青年は自負とともに告げる。

「この、アトラム・ガリアスタはね」



あとがき

三田 誠

―それは絶対の美。

誰に侵食されることもなく、誰に脅かされることもない。

人ひ間との届かぬ高みにありて、しかし人ひ間とにしか想像できない概念。

小説の強みのひとつは、「絵にも描けない美しさ」などと、しれっと書いてしまえることです。本来現実には存在しえない精髄だけを、ぽんと文章は提示できます。それはまるで魔術のようなもの。だからこそ、『ロード・エルメロイII世の事件簿』にふさわしいと思った題材です。双貌の姫の魔術推理劇、どうぞ下巻もお付き合いくださいませ。

さて、第一巻のあとがきで「現在の構想としては一年一冊」と書いたのを、いきなり前倒しで破ってしまいました。というのも、新年早々に行った二巻の打ち合わせのためなのですが、その際の会話を再現してみましょう。

「ところで三田さん、次の事件簿夏に出せないかな?」

「いや奈須さん? 一年一冊って書いたじゃないですか」

「マコトを信じている」

「な、奈須さん? 僕、夏には『ケイオスドラゴン』のアニメがあるのだけど」

「マコトを信じている」

「……次は……一巻より分厚くなりそうだから……上下巻の上巻なら……」

そんな感じで、いささか早くお披露目することとなったのですが、新たに登場したキャラクターには驚かれた方もいるのではないでしょうか。

彼らや時計塔の秘部について綴るたび、常にない緊張を感じながら筆を進めています。ロード・エルメロイII世とともに、TYPE-MOONさんのつくってきた豊穣な世界を魅力的に描けていればよいのですが。

最後になりましたが、極めて無茶な題材や前倒しの修羅場にも付き合ってくださった坂本みねぢさん、いつもながら困難な魔術考証を引き受けてくださった三輪清宗さん、フラットなどの台詞に協力いただいた成田良悟さん、そして奈須きのこさんをはじめとするTYPE-MOONの皆様に感謝を申し上げます。

下巻は冬にお目見えする予定です。

二〇一五年七月

菊地秀行の『双貌鬼』を読みながら

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

2 「case.双貌塔イゼルマ(上)」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2017年10月4日 発行

ver.004

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 2 「case.双貌塔イゼルマ(上)」』

2015年8月14日 初版発行

2017年8月18日 第九版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

%Japanese text only

